



【時奏（ときかなで）姫の街道旅】 吟遊詩人の歴史旅：得川茜

忍城主 松平信綱と共に

～忍城から江戸城・御成道・日光街道～

松平信綱様取材 1634 年（寛永 11 年）7 月取材から始まった時奏姫の歴史旅

作者：海老蔵管理人

第一章 『海老蔵（えびぐら）』の会話

チェロが鳴ると、歴史は動き出す

「……よし。」

私はノートパソコンを閉じ、大きく伸びをした。

窓の外では六月の風が、忍城の北谷門近くに建つ古い藍染蔵——『海老蔵』の白壁を優しく撫でている。

ここは二〇三〇年。

実は編集工房『工房えびはら』。

けれど、その二階にある私の部屋だけは、少しだけ普通ではない。

壁一面には江戸時代の古文書。

床には取材メモ。

机の上にはカメラ、タブレット、ノートパソコン。

そして、その隣に静かに立てかけられている一本のチェロ。

茶色く美しい木目。

名前は――

『時奏（ときかなで）』。

「今日は松平信綱様か……。」

資料を見返す。

寛永十一年。

忍藩。藩主2年目。

まだ若き名君。

残された史料だけでは、どうしても分からない表情がある。

だったら――

本人に聞けばいい。

私は笑った。

「取材、行っちゃおうかな。」

チェロケースを開く。

蓋の裏。

小さく輝く三つ葉葵。

それは得川家だけが持つ、不思議な紋だった。

私は静かに弓を構える。

狙うのはG線。

重く。

深く。

信綱様への想いを音に込める。

ゴォォン……

低音が部屋いっぱいに響いた。

その瞬間だった。

チチチチチチ……

壁の時計が逆回転を始める。

一秒。

十秒。

一分。

十分。

猛烈な勢いで針が巻き戻っていく。

「始まった……！」

床から無数の光が舞い上がる。

青。

金。

銀。

七色の光輪が私の足元を包み込む。

チェロの音はさらに深くなる。

窓の外の景色が溶ける。

空が流れる。

星が逆向きに走る。

歴史という大河が、目の前で巻き戻されていく。

「寛永十一年——お願い！」

私は最後の音を鳴らした。

世界が真っ白に染まる。

.....

.....

静寂。

聞こえてきたのは鳥の声だった。

目を開ける。

「着いた……。」

そこは四百年前。

まったく同じ造りの部屋。

ノートパソコンもある。

タブレットもある。

キッチンもある。

ベッドもある。

時間だけが江戸へ移った、不思議な作業部屋だった。

「やっぱり、この部屋だけは変わらないんだ。」

私は笑う。

ジーンズを軽く払う。

革のブーツを履き直す。

チェロケースを背負う。

「さあ、歴史散歩の始まり！」

一階へ降りる。

店先では着流し姿の孟が掛け軸を眺めていた。

「また行くのか。」

「もちろん。」

「私は留守番だ。」

「知ってる。今度一緒に行こうよ！」

「帰ったら原稿よろしくね。」

「写真も撮ってくるよ。」

「江戸じゃ写真は撮れん。」

「そうだった。」

二人で笑う。

「じゃ、行ってきます！」

私は北谷門へ向かって歩き出した。

まだ知らない。

このあと自分が、

「怪しい女」として捕まり、

三日後には、

忍藩中を熱狂させる「時奏姫」と呼ばれることになるとは——。

第二章 北谷門の追い返し

——寛永十一年七月。

朝の風が、忍城の堀を静かに渡っていた。

私は『海老蔵』を出ると、大きく息を吸い込んだ。

「空気まで違う……。」

四百年前の空は、どこまでも青い。

土の匂い。

薪の煙。

遠くから聞こえる鍛冶屋の金槌の音。

馬のいななき。

歴史書では決して伝わらない「生きた江戸時代の忍城」が、目の前いっぱいに広がっていた。

「まずは北谷門ね。」

私はチェロケースを背負い直す。

木目調の黒いケースには、旅の傷跡のように世界中のシールが貼られている。

だが、その中に眠る『時奏』は誰にも開けられない。

たとえ盗まれても壊されても、夜になれば必ず私の元へ帰ってくる。

そんな不思議な相棒だ。

歩くこと十分。

石垣が見えてきた。

「これが……忍城。」

思わず足が止まる。

水面に映る櫓。

堀を渡る風。

後世に「浮き城」と呼ばれる理由が、一目で分かった。

「写真が撮れないのが残念だなあ。」

そう独り言を言った瞬間、

「止まれ！」

鋭い声が飛んだ。

槍を持った門番が二人。

私をじっと見つめている。

「何者だ。」

「歴史ライターです。」

「……？」

「あ、違った。」

しまった。

江戸時代にライターなんて職業はない。

「旅の楽人です。」

門番は首をかしげる。

「その奇妙な着物は何だ。」

「ジーンズです。」

「じい……？」

「えっと……丈夫な旅装束です！」

門番はもう一人と顔を見合わせる。

「黒い箱は。」

私は胸を張った。

「チェロです！」

「ちえろ？」

「楽器です。」

「鉄砲ではないだろうな。」

「違います。」

「大砲でもないな。」

「入りません。」

「では開けよ。」

「……それは無理です。」

開かない。

正確には開けられない。

茜以外には絶対に開かない魔法？のケースなのだ。

説明できるはずもない。

門番の表情が一気に陰しくなる。

「怪しい。」

「ものすごく怪しい。」

「違います！」

私は慌てて両手を振る。

「私は松平信綱様に取材……じゃなくて、お話を伺いに来たんです。」

「殿に？」

「はい。」

門番二人は同時に吹き出した。

「はっはっは！」

「どこの町娘だ！」

「殿はお忙しい。」

「そんな簡単に会える方ではない。」

「ですが……」

「面会なら大手門だ。」

「ここは通せぬ。」

私は肩を落とした。

「やっぱりそうですよね……。」

史料にも北谷門は限られた者しか通れないと書かれていた。

現地で体験すると、妙に納得してしまう。

「ありがとうございます。」

私は頭を下げた。

「礼儀は知っている娘らしい。」

「だが変な格好だ。」

「その箱も怪しい。」

門番は最後まで警戒を解かなかった。

私は笑顔で歩き出す。

「よし、大手門へ！」

その姿を見送りながら門番の一人が小さくつぶやいた。

「変わった娘だったな。」

「しかし……。」

もう一人が腕を組む。

「あの娘の目。」

「うむ。」

「悪人の目ではなかった。」

大手門までは思ったより遠かった。

途中、城下町を歩く。

店先には野菜。

味噌。

醤油。

桶。

草履。

染物。

子どもたちが走り回り、商人が元気な声を上げる。

「いらっしやい！」

「朝採れ野菜だ！」

「新しい団子だよ！」

私は思わず財布を開きかけ……

止まった。

「あ。」

令和のお札しかない。

「使えない……。」

お腹が鳴る。

ぐううう……

「あはは……。」

私は苦笑した。

すると団子屋のおばあさんが笑う。

「腹が減ったのかい？」

「少しだけ。」

「旅人か。」

「はい。」

「一本やる。」

「え？」

「困った時は助け合いさ。」

「ありがとうございます！」

私は団子を受け取る。

温かい。

甘い。

「おいしい……。」

おばあさんは目を細めた。

「そんなに喜ばれると嬉しいねえ。」

「今度、お礼に演奏します。」

「えんそう？」

「歌です。」

「それは楽しみだ。」

私は心の中で決めた。

この町で最初の演奏は、この団子屋さんの前にしよう。

きっと素敵な出会いになる。

そう、この時はまだ知らなかった。

大手門で待っているのは、

もっと大きな試練。

そして――

「怪しい異国の間者を捕らえよ！」

その一声だった。

第三章 怪しい旅人、牢へ入る

「ようやく着いた……。」

私は額の汗をぬぐった。

忍城の大手門は、北谷門とは比べものにならないほど立派だった。

何本もの槍が朝日に光り、武士たちが忙しく出入りしている。

さすが忍藩の正門。

空気そのものが張り詰めていた。

「ここなら、ちゃんと取り次いでもらえるかな。」

チェロケースを背負い直し、私は門番へ近づく。

「失礼します。」

年配の侍がこちらを見る。

「何者だ。」

「旅の楽人です。」

「用件は。」

「松平信綱様にお会いしたくて参りました。」

侍の眉がぴくりと動く。

「殿に？」

「はい。」

「何の用だ。」

私は胸を張る。

「取材です。」

「……しゅざい？」

しまった。

また現代語だ。

「えっと……お話を伺い、後世に伝えるためです。」

侍はじっと私を見つめる。

「どこの家の者だ。」

「得川茜です。」

「聞いたことのない家だ。」

もちろんだ。

今はまだ名乗るべき時ではない。

「その黒い箱は何だ。」

「チェロです。」

「開けろ。」

「それは……。」

開けられる。

でも、開けば三つ葉葵が現れる。

今ここで見せるわけにはいかない。

「申し訳ありません。」

「開けられませんか。」

門番の空気が変わった。

「開けられぬ？」

「はい。」

「中身を見せられぬ？」

「はい。」

「理由は。」

「秘密です。」

一瞬、静寂。

そして――

「捕らえよ！」

「えっ？」

四方から武士が飛び出してきた。

「ちょ、ちょっと待って！」

私は逃げない。

逃げれば本当に間者になってしまう。

だから両手を上げる。

「私は怪しくありません！」

「怪しい者ほどそう言う！」

「その大きな箱は何だ！」
「武器ではありません！」
「異国の兵器か！」
「楽器です！」
「そんな楽器があるものか！」
「あります！」
「聞いたことがない！」
「まだヨーロッパでは……」
「ヨーロッパ？」

しまった。

また余計なことを言った。

武士たちがざわつく。

「異国と通じている！」

「南蛮の間者か！」

「違います！」

私は思わず笑ってしまった。

「笑ったぞ！」

「余裕がある！」

「やはり怪しい！」

「違うんですって！」

あっという間だった。

縄を掛けられる。

もっとも、防御壁のおかげで痛くもかゆくもない。

私は内心で苦笑する。

（完全にやらかした……。）

取り調べ部屋。

石壁。

畳一枚ほどの狭い部屋。

小さな格子窓。

「ここで待て。」

扉が閉まる。

ガチャン。

静かになった。

「牢屋かぁ……。」

私は壁にもたれた。

「まあ、歴史取材だし。」
普通の人なら泣く場面かもしれない。
でも私は平気だった。
怪我もしない。
病気にもならない。
疲れもほとんど感じない。
『時奏』も、ちゃんと隣に立て掛けられている。
誰もケースを開けられないから、取り上げられる心配もない。
「さて。」
私はバッグからノートパソコンを取り出した。
カタカタ……
「えーっと。」
『忍藩初日。
開始三十分で逮捕。
予想より早かった。』
思わず自分で吹き出した。
「こんな取材メモ、誰も信じないよね。」

その頃。
城内では。
「例の娘はどうした。」
「牢へ。」
「何か吐いたか。」
「いいえ。」
「泣いたか。」
「いいえ。」
「暴れたか。」
「いいえ。」
「……。」
家臣たちは顔を見合わせる。
「では何をしている。」
武士は困ったように答えた。
「笑っています。」
「笑う？」
「はい。」
「しかも何やら板を叩いて文字を書いております。」

「板？」

「光る板です。」

「……。」

部屋が静まり返る。

「妖術か。」

「かもしれませぬ。」

「ますます怪しい。」

二日目。

牢番が恐る恐る覗く。

「……。」

娘は歌を歌っていた。

しかも静かで美しい声だった。

「城下に風が吹く

今日も誰かが笑ってる

石垣越えて空に行く

鳥は歴史を知っている——」

牢番は立ち止まった。

「……きれいだ。」

気が付くと、もう一人。

さらにもう一人。

交代の武士まで足を止めていた。

「牢屋で歌っているのか。」

「変わった娘だ。」

誰も気付いていない。

歌にはまだチェロを合わせていない。

だから本当の力は出ていなかった。

それでも茜の歌声だけで、人々は足を止め始めていた。

三日目。

「娘。」

牢番が声を掛ける。

「はい？」

「飯だ。」

「ありがとうございます。」

「文句は言わぬのか。」

「何をです？」

「牢に入れられて。」

私は笑う。

「誤解は、ちゃんと会えば解けます。」

「歴史も人も、急いでは分かりませんから。」

牢番は少し驚いた。

「おぬし……変わっておる。」

「よく言われます。」

「殿に会えぬかもしれぬぞ。」

「大丈夫です。」

「どうして。」

私はチェロケースを優しくなでた。

「音楽は、人をつないでくれます。」

「だから私は信じています。」

「きっと、この町の誰かと友達になれるって。」

牢番は静かにうなずいた。

その日の夕方。

城下町では、こんな噂が広がり始めていた。

「牢に、不思議な娘がおるらしい。」

「泣きもせず、怒りもせず。」

「毎日、笑って歌っているそうさ。」

その噂は、風に乗るように町へと広がっていく。

そして四日目の朝——。

ついに茜は牢を出ることになる。

まだ誰も知らない。

その日、城下町の片隅で奏でられる一曲が、忍藩の人々の運命を少しずつ変えていくことを。

第四章 城下町に響く、はじめてのチェロ

四日目の朝。

「娘。」

牢番が静かに鍵を開けた。

ギィ……

「出てもよい。」

「え？」

私は思わず聞き返した。

「放免だ。」

「ただし。」

牢番は苦笑する。

「まだ疑いが晴れたわけではない。」

「城下から出ることも許さん。」

「分かりました。」

私は深々と頭を下げた。

「三日間、お世話になりました。」

牢番は目を丸くする。

「……礼を言う者は初めて見た。」

「ご飯、おいしかったです。」

「牢飯を褒める者も初めてだ。」

二人は思わず笑ってしまった。

城門を出る。

四日ぶりの青空だった。

「やっぱり外は気持ちいい！」

私は思い切り背伸びをした。

通りを歩く人たちが、ちらりところらを見る。

「あれが牢にいた娘か。」

「変わった格好だな。」

「でも思ったより普通じゃないか。」

そんな声が耳に届く。

私は気にしない。

むしろ笑顔で手を振る。

「おはようございます！」

すると子どもたちがくすつと笑った。

「変なお姉ちゃん！」

「そうだよ。」

私は笑って答える。

「すごく変なお姉ちゃん。」

子どもたちは大笑いした。

その様子を見ていた母親も、思わず笑顔になる。

（よかった。）

私は心の中でつぶやく。

(歴史って、人の笑顔から始まるんだ。)

歩いていると、見覚えのある団子屋が見えてきた。

「あっ！」

店のおばあさんが手を振る。

「旅のお嬢ちゃん！」

「覚えていてくださったんですね。」

「もちろんさ。」

「無事だったかい？」

「三日ほど、お城でお泊まりしていました。」

「……え？」

「牢屋でしたけど。」

団子を焼いていた若い職人が吹き出した。

「はっはっは！」

「そんな冗談があるか！」

「本当なんです。」

「ますます面白い娘だね。」

おばあさんは笑いながら言った。

「そうだ。」

「この前、お礼に歌を聴かせてくれるって言ったね。」

私はにっこり笑う。

「もちろんです。」

ようやく約束を果たせる。

私は店先の広場へ歩いた。

チェロケースをそっと地面に置く。

周囲には十人ほど。

団子を買いに来た町人。

子ども。

荷物を運ぶ若者。

井戸端会議のおかみさん。

「何が始まるんだ？」

「南蛮の楽器らしい。」

「見たことがないぞ。」

ざわざわと人が集まってくる。

私は静かにケースを開けた。

カチリ。
蓋の裏で、小さな三つ葉葵が淡く輝く。
けれど、それは私にしか見えない。
誰も気づかない。
そっとチェロの『時奏』を取り出す。
朝日を受けて、美しい木目が柔らかく光る。
「きれい……。」
誰かが思わず声を漏らした。
私はエンドピンを伸ばし、ゆっくりと地面へ立てる。
カチッ。
それだけで空気が変わった。
誰も話さなくなる。
子どもまで静かに見つめている。
私は深呼吸した。
「この町で最初の一曲です。」
弓を構える。
G線がゆっくり震え始める。
ボオオオ……
低く。
深く。
まるで大地そのものが歌い始めたような音だった。
町の空気が揺れる。
風が止まる。
私は目を閉じた。
そして歌い始める。

♪

水を映して 浮き城は
朝日に今日も 目を覚ます
鍛冶屋の槌は 明日を打ち
畑の歌は 風になる
笑っておくれ 今日という日を
あなたの笑顔が 歴史になる

♪

歌いながら、私は町の景色を見つめる。

八百屋のおじさん。

井戸で洗濯する娘。

走り回る子ども。

笑うおばあさん。

そのすべてを歌に織り込んでいく。

これは決まった歌ではない。

その場で生まれる、その町だけの歌。

私だけの歴史散歩。

『時奏』の音色は、聴く人それぞれの心に眠る懐かしい記憶を静かに呼び覚ましていく。

「……母ちゃん。」

若い男がぼつりとつぶやいた。

十年前に亡くなった母親と、一緒に田植えをした日のことを思い出した。

団子屋のおばあさんは、亡き夫と初めて祭りへ行った夏の日を思い出し、涙をぬぐっていた。

幼い子は、父に肩車をしてもらった夕暮れの景色を思い出し、にこにこ笑っている。

武士は、幼いころ師匠に木刀を握らせてもらった日のぬくもりを思い出していた。

誰一人、同じものは見ていない。

けれど、誰もが温かい記憶の中にいた。

演奏が終わる。

静寂。

誰も拍手という文化を知らない。

だから誰も動かなかった。

やがて――

ぽたり。

一粒の涙が石畳に落ちる。

「……ありがとう。」

団子屋のおばあさんだった。

「忘れていた思い出を、思い出させてもらった。」

その言葉をきっかけに、あちこちから声が上がる。

「もう一曲！」

「明日も来てくれ！」

「うちの店でも弾いてくれ！」

「子どもにも聴かせたい！」

人の輪はどんどん広がり、広場はいつの間にか大勢の人で埋め尽くされていた。
その様子を、通りの向こうから一人の若い足軽が息をのんで見つめていた。

「牢にいた娘が……。」

「町中を泣かせている……。」

彼は踵を返すと、一目散に忍城へ駆け出した。

「城代様に申し上げます！」

「例の娘が、町の人々を熱狂させています！」

その報せは、まもなく城中を揺るがすことになる。

そして茜はまだ知らない。

この一曲がきっかけで、城下町の人々は「なぜあの娘を牢に入れたのか」と語り始め、やがて城代へ嘆願の声が集まり始めることを――。

第五章 「あの娘を牢に入れるとは何事だ！」

「もう一曲！」

「頼む！」

「こっちでも歌ってくれ！」

拍手という文化こそなかったが、人々の目は輝いていた。

誰も帰ろうとしない。

私は少し照れながら笑った。

「ありがとうございます。」

「でも、この町の歌は皆さんが作るんですよ。」

「え？」

団子屋のおばあさんが首をかしげる。

私はチェロを抱えたまま町を見渡した。

「私は歩いて見つけた景色を歌にします。」

「だから明日は違う歌。」

「明後日も違う歌。」

「毎日、この町が新しい歌をくれるんです。」

町人たちは顔を見合わせる。

「面白い娘だ。」

「毎日違う歌なのか。」

「それなら毎日来なくちゃならんな。」

笑い声が広がる。

その空気を見て、私は小さくうなずいた。

（これでいい。）

（歴史は資料じゃない。）
（そこに生きている人なんだ。）

その頃、忍城では――。

「申し上げます！」

若い足輕が息を切らして広間へ飛び込んできた。

「例の娘が町で演奏しております！」

城代は書状から顔を上げる。

「あの牢の娘か。」

「はい！」

「何人集まった。」

「最初は十人ほどでしたが……」

「今は？」

「三百人を超えております！」

「……何？」

部屋の空気が止まった。

「三百人だと？」

「はい！」

「町中の人が集まり始めました！」

「泣いております！」

家老が眉をひそめる。

「泣かせているのか。」

「違います！」

足輕は興奮して首を振る。

「感動して涙を流しております！」

「子どもも。」

「商人も。」

「武士までも。」

「皆、涙しております！」

別の家臣が笑った。

「大げさだ。」

「まさか。」

そのとき。

廊下から声が聞こえた。

「失礼いたします！」

今度は年配の同心だった。

「私も見てまいりました。」

「どうだった。」

「……。」

同心は静かに頭を下げる。

「足輕の申したこと、一つ残らず事実でございます。」

「何だと？」

「私は二十年、この城に勤めております。」

「しかし、あれほど人が笑い、泣き、肩を組み合っていた町を見たことがございません。」

広間は静まり返った。

翌日。

団子屋の前には朝から人が並んでいた。

「今日はいつ来る？」

「昼頃らしい。」

「昨日の歌が忘れられない。」

「孫も連れてきた。」

私は驚いた。

「えっ……。」

昨日より三倍。

いや五倍はいる。

「こんなに？」

団子屋のおばあさんが笑う。

「町中に広まったよ。」

「『涙が止まらない歌姫』って。」

私は思わず吹き出した。

「歌姫？」

「そんな大げさな。」

「本当だよ。」

「市場でも噂だ。」

「鍛冶屋でも。」

「お寺でも。」

「武家屋敷でも。」

「みんな、お前さんの話をしている。」

「今日はどんな歌？」

子どもが聞く。
私は町を歩く。
市場。
鍛冶屋。
染物屋。
桶屋。
魚売り。
笑顔。
怒鳴り声。
赤ん坊の泣き声。
全部を胸にしまう。
「今日は……」
チェロを構えた。
ボオオオ……
低いG線が響く。
私は歌い始める。

♪

朝の市場は 夢を売る
笑う親父の その声が
百年先まで 響くよう
今日も歴史は 歩いてる
鍛冶屋の火花は 星になり
子どもの笑顔は 宝もの
名もない人の その一日が
未来をつくる 物語

♪

演奏が終わる頃には、人の輪は五百人を超えていた。
誰も帰らない。
「ありがとう……。」
「また明日。」
「毎日来てくれ。」
そのときだった。
一人の老人が杖をつきながら前へ出てきた。
「娘。」
「はい。」
「わしは昨日まで、おぬしを怪しい娘と思っておった。」

「……。」

「許してくれ。」

老人は深々と頭を下げた。

「そんな！」

私は慌てて駆け寄る。

「頭を上げてください。」

「私も、いきなりお城へ行ったんですから。」

「怪しまれて当然です。」

老人は目を潤ませた。

「なんと器の大きな娘じゃ……。」

その姿を見ていた町人たちも、一人、また一人と頭を下げ始めた。

「昨日は悪く言ってすまなかった。」

「許してくれ。」

「疑ってしまった。」

私は困ってしまった。

「皆さん、本当にやめてください。」

「私は歴史を習いに来たんです。」

「皆さんの毎日を教えてください。」

「それだけで十分です。」

その言葉に、人々はますます心を動かされた。

夕暮れ。

町の有力な商人、職人、寺の住職、庄屋、町年寄たちが一軒の茶屋に集まっていた。

「このままでいいのか。」

「何がだ。」

「城は、あの娘を牢へ入れた。」

「それなのに町のために歌い続けている。」

「……。」

庄屋が静かに口を開いた。

「城代様へお願いを出そう。」

「お願い？」

「いや。」

「嘆願じゃ。」

「二度と、あの娘を罪人のように扱わぬように。」

「賛成！」

「私も署名する！」

「寺からも出そう！」

「職人衆も全員だ！」

「市場も協力する！」

その夜、忍藩では前例のない出来事が始まった。

城代へ提出する「得川茜殿の赦免と保護を願う嘆願書」。

一枚。

二枚。

十枚。

百枚。

町中の名前が集まり始めた。

その知らせは、やがて城主・松平信綱の耳にも届くことになる。

まだ誰も知らない。

この「町人たちの願い」が、歴史を大きく動かす第一歩になることを――。

第六章 忍城を揺るがす「町人たちの願い」

翌朝――。

忍城大手門の前には、朝早くから人が集まっていた。

商人。

職人。

農民。

寺の僧。

町年寄。

さらには昨日まで茜を怪しんでいた武士の家族までいる。

その数、およそ二百人。

「静かに。」

庄屋が声を掛ける。

「今日は喧嘩ではない。」

「お願いを届けに来た。」

誰も大声を出さない。

誰も騒がない。

皆、大切そうに一枚の和紙を抱えていた。

そこには町中の名前が並んでいる。

「どうか、あの娘を罪人として扱わないでください。」

たったそれだけの願いだった。

門番は驚いていた。

「今日は何事だ。」

「市が立つ日ではないぞ。」

商人が一步前へ出る。

「城代様へお願いがございます。」

「願ひ？」

「これを。」

両手で差し出された和紙。

門番は開いて目を丸くした。

「……これは。」

百人。

二百人。

三百人。

びっしりと署名が並んでいる。

「こんな願ひ書は見たことがない……。」

「至急お届け願ひたい。」

門番は無言でうなずき、城内へ走った。

その頃、茜は何も知らず市場を歩いていた。

「おはようございます！」

「おはよう、歌姫！」

「その呼び方、恥ずかしいですよ。」

市場の人たちは笑う。

「今日は魚屋へ行こう。」

「昨日は鍛冶屋だったからな。」

「今日は港の歌かな？」

「港はありませんけど。」

また笑いが起こる。

町の空気が少しずつ変わっていた。

昨日まで「変な娘」と呼ばれていた私は、今では誰からも名前と呼ばれるようになっていた。

「茜さん！」

「こっち！」

子どもたちが走ってくる。

「今日はおじいちゃんも来た！」

振り向くと、白髪の老人が立っていた。

「昨日、足が悪くて来られなかったんじゃ。」

「今日は楽しみにしておった。」

私は自然と笑顔になる。

「ありがとうございます。」

「それじゃあ今日は、おじいちゃんにも届く歌を歌いますね。」

一方、忍城では。

「城代様。」

門番が和紙を差し出した。

「町から願い書にございます。」

「願い書？」

城代は軽い気持ちで受け取った。

しかし。

読み進めるうちに顔色が変わる。

「これは……。」

家老も覗き込む。

「商人組合。」

「鍛冶職。」

「桶職。」

「染物屋。」

「庄屋。」

「寺。」

「農民代表。」

「……全部か。」

城代は思わず立ち上がった。

「町全体ではないか！」

「はい。」

「内容は。」

家老が静かに読む。

「『旅の楽人・茜殿は町の人々を癒やし、争いを鎮め、笑顔を取り戻してくださいました。どうか罪人ではなく、大切なお客様としてお迎えください。』」

部屋が静まり返る。

「ここまで慕われる者がおるのか……。」

そこへ、また一人の武士が駆け込んできた。

「申し上げます！」

「今度は何だ。」

「市場でございます！」

「また演奏か。」

「はい！」

「今朝は昨日以上の人出です！」

「何人だ。」

「七百人ほどかと！」

「七百……。」

家老は絶句した。

「祭りでもない日に七百人？」

「しかも喧嘩がございません！」

「皆、静かに順番を待っております！」

「信じられぬ……。」

市場。

私は今日も『時奏』を抱える。

「皆さん。」

「今日は市場を歩いていて、一つ思ったことがあります。」

人々が静かになる。

「この町は、とても優しい町ですね。」

「……。」

「昨日、魚屋さんが野菜屋さんを手伝っていました。」

「鍛冶屋さんが、おばあちゃんの荷物を運んでいました。」

「子どもたちが迷子を家まで送っていました。」

「私は、その景色が大好きです。」

私はゆっくり弓を構えた。

G線が響く。

ボオオオ……

市場の喧騒が静かに消えていく。

歌が始まる。

♪

魚売る声も

鍬打つ音も

みんな誰かを

幸せにする

名もない人の

その一歩が

明日の歴史を
歩いてゆく
笑顔を一つ
手渡すたびに
この町は今日も
美しくなる
♪

歌い終えた瞬間だった。

市場中からすすり泣く声が聞こえた。

ある若い武士は、幼い娘の手を握り締めて涙を流していた。

「父上？」

娘が不思議そうに見上げる。

「……すまん。」

「父は大切なことを忘れておった。」

その姿を見た町人たちは、また静かに涙をぬぐう。

茜の歌は、人々に「過去」を思い出させるだけではなかった。

「今、自分のそばにある幸せ」にも気付かせてくれる。

だからこそ、人々の心を強く揺さぶるのだった。

その日の夕方。

忍城の奥。

城代は静かに命じた。

「例の娘を調べよ。」

「はい。」

「どこの生まれか。」

「何者なのか。」

「誰が後ろ盾なのか。」

「一つ残らず調べるのだ。」

家老が尋ねる。

「もし、本当にただの旅人なら？」

城代はゆっくり首を振った。

「ただの旅人が、これほど民の心を動かせるものか。」

「私はそうは思わぬ。」

そして誰にも聞こえないほど小さな声でつぶやいた。

「……もしや、この娘には、まだ我らの知らぬ秘密があるのではないか。」

その調査が、やがて「海老蔵」に眠る古文書と、「得川」の名の秘密へとつなが

っていくことを、このときの城代はまだ知る由もなかった。

第七章 海老蔵を探れ

忍城——城代の執務室。

障子が閉められた静かな部屋で、城代は家老たちを前に腕を組んでいた。

「七日。」

ぽつりと口を開く。

「たった七日で町人の心を掴んだ。」

誰も返事をしない。

「牢へ入れた娘を、民が守ろうとしておる。」

「前代未聞にございます。」

家老が静かに頭を下げた。

「その娘の名は。」

「得川茜。」

「得川……。」

城代はその姓を何度も口の中で転がした。

「聞いたことがない。」

年配の奉行が首をかしげる。

「しかし、どこか気になる響きです。」

「そうなのだ。」

城代は立ち上がった。

「調べよ。」

「得川という家。」

「そして——」

一枚の紙を机へ置く。

そこには小さく書かれていた。

『海老蔵』

「娘は毎日あの蔵から現れ、夕方になると戻る。」

「住まいはあそこに違いない。」

「調べてまいります。」

若い同心が深く頭を下げた。

その日の昼。

北谷門近く。

藍染蔵「海老蔵」。

店先では着流し姿の孟が掛け軸を書いていた。

筆先は迷いなく走る。

「風」

一文字。

勢いのある見事な書だった。

そこへ武士が三人やって来る。

「主人。」

孟は顔を上げた。

「いらっしゃいませ。」

「城より参った。」

「これはご丁寧に。」

「少々尋ねたいことがある。」

「どうぞ。」

孟は少しも慌てない。

茶を勧める。

武士たちは腰を下ろした。

「最近、旅の娘が出入りしておるな。」

「茜殿ですね。」

「知っているのか。」

「ええ。」

「歴史を書く方です。」

「歴史？」

「人の暮らしを書き残しております。」

武士は店内を見回した。

古い掛け軸。

藍染。

茶碗。

刀の鍔。

硯。

筆。

骨董が整然と並んでいる。

老舗そのものだった。

「蔵を見せてもらえるか。」

「もちろん。」

孟は笑顔で立ち上がる。

「どうぞ。」

一階。

武士たちは驚いていた。

「ずいぶん古い品が多い。」

「代々集めておりますので。」

「何百年分ある。」

「数えたことはございません。」

「この蔵はいつから。」

「関ヶ原の頃より少し前でしょうか。」

「古いな。」

「ええ。」

武士は二階の奥へ進もうとした。

その時だった。

足が止まる。

「……？」

そこに部屋があるように見える。

だが近付くと壁しかない。

「妙だ。」

「どうかなさいましたか。」

孟は何事もないように尋ねる。

「いや……。」

武士は首を振る。

気のせいかな。

実はその壁の向こうには、茜と孟しか見ることのできない「無限収納」と、時代を超えて存在する茜の作業部屋があった。しかし蔵そのものが主を選ぶため、他人には存在すら認識できない。

「変わった蔵だ。」

「昔から『生きている蔵』と言われます。」

孟はさらりと言った。

もちろん、本当の意味は誰にも話さない。

調査を終えた武士が帰る頃。

一人の若い同心だけが店先に残った。

「主人。」

「はい。」

「一つだけ聞かせてくれ。」

「何でしょう。」

「茜殿は……。」

「なぜあんなに人に慕われる。」

孟は少し笑った。

「簡単ですよ。」

「？」

「人の話を最後まで聞くからです。」

「……。」

「身分を見ません。」

「武士も。」

「町人も。」

「子どもも。」

「みんな同じ笑顔で話しかけます。」

同心は静かにうなずいた。

「なるほど……。」

「それが一番難しいことなのですが。」

孟は墨を磨きながら答えた。

「茜殿は、それを当たり前のようにできる人です。」

その頃、茜は町外れの畑にいた。

「茜さん！」

農家の青年が手を振る。

「どうしました？」

「水路が詰まって困ってるんです。」

見ると、用水路に泥がたまり、水が流れなくなっている。

私はしゃがみ込んだ。

「なるほど。」

現代なら重機で終わる。

でも今は江戸時代。

私は周囲を見回した。

竹。

縄。

木の板。

「これ、借りてもいいですか？」

「もちろん。」

竹を切り、簡単にてこの仕組みを作る。

泥を少しずつすくい上げる。

「ここをこうすると……。」

ゴボッ。

水が一気に流れ出した。

「流れた！」

「すごい！」

農民たちが歓声を上げる。

「大したことじゃありません。」

私は笑う。

「昔も今も、水は高いところから低いところへ流れるだけです。」

「そんなことも知っておるのか。」

後ろから感心した声が聞こえた。

振り向くと、先ほど海老蔵を調べていた若い同心が立っていた。

彼は茜の一挙手一投足を黙って見つめている。

「武士様。」

茜は自然に頭を下げた。

「今日はお仕事ですか？」

「……いや。」

同心は少し照れたように笑う。

「見回りだ。」

「そうでしたか。」

「それより。」

茜は『時奏』を抱き上げる。

「せっかく皆さんが集まっていますから、一曲いかがですか？」

農民たちが歓声を上げる。

「待ってました！」

「今日は畑の歌だ！」

私は『時奏』を静かに構えた。

G線が、大地のように低く響く。

ボオオオ……

風が稲を揺らす。

青空をツバメが横切る。

私は目を閉じ、畑を見つめながら歌い始めた。

♪

土を耕す その手には

明日を育てる 夢がある

流れる水は 命の歌
風は優しく 種を運ぶ
汗をぬぐって 笑う人
その笑顔こそ 宝もの
名もなき今日が 積み重なり
未来の歴史に 花が咲く
♪

演奏が終わるころには、農民も武士も区別なく輪になって立っていた。
若い同心は胸の前で手を組み、小さくつぶやく。

「この娘は……。」

「人の心を操っているのではない。」

「人の心を、思い出させているのだ。」

その確信は、その夜の報告書にも書き記された。

そして城代は、その報告を読み終えると静かに命じる。

「——得川茜を、城へ招け。」

「今度は罪人としてではない。」

「客人として、正式に。」

ついに茜は、忍城の奥で松平信綱と対面する機会を得ることになる。

だが、その面会こそが「得川」の名に隠された秘密を開く、歴史の大きな転機となるのだった。

第八章 初めての登城

翌朝——。

「茜殿。」

『海老蔵』の店先で掛け軸を書いていた孟が、静かに筆を止めた。

「城から迎えが来ています。」

私は顔を上げた。

「え？」

店の前には、昨日まで私を見張っていた若い同心が立っている。

その後ろには槍を持った武士が四人。

しかし今日は、誰も陰しい顔をしていなかった。

「得川茜殿。」

同心が深々と頭を下げる。

「城代様よりお招きにございます。」

「お招き……ですか？」

「はい。」

「正式なお客様として。」

私は思わず孟の方を見た。

「どうしよう。」

孟は微笑む。

「取材の目的は。」

「松平信綱様に会うこと。」

「なら、ようやく始まりですね。」

「そうだね。」

私はチェロケースを背負う。

「行ってきます。」

「夕飯までには帰ってきてください。」

「努力します。」

孟が笑う。

「歴史は予定どおりには進みませんから。」

「違いない。」

二人は顔を見合わせて笑った。

忍城へ向かう道。

今日は昨日までと違っていた。

町人たちが私を見つけるたびに声を掛けてくる。

「茜さん！」

「頑張って！」

「殿様にも歌を聴かせておくれ！」

「応援してるよ！」

子どもたちは走ってくる。

「お姉ちゃん！」

「帰ったらまた歌って！」

「約束！」

私は笑顔で手を振った。

「もちろん！」

その様子を見た武士たちは小さく驚いていた。

「本当に人気者なのだな……。」

同心が苦笑する。

「昨日より人が増えております。」

門へ近づくと、北谷門の門番が気付いた。

「あっ！」

「あの娘か！」

以前、追い返された門だ。

私は立ち止まり、ぺこりと頭を下げた。

「先日は失礼しました。」

門番は慌てて槍を脇へ寄せる。

「いや……。」

「こちらこそ。」

「仕事とはいえ。」

「申し訳なかった。」

「そんな！」

私は笑った。

「ちゃんとお仕事をされたんですから。」

「気にしていません。」

門番はほっとしたように笑う。

「どうぞ。」

「本日はお通りください。」

重い門がゆっくりと開いた。

ギギギ……

私はその門を見上げた。

（やっと入れる。）

昨日は追い返され。

数日前は牢屋。

そして今日は客人。

歴史とは、本当に面白い。

城内へ入ると、案内役の武士が歩き始めた。

「こちらです。」

私は歩きながら周囲を見回す。

白壁。

広い庭。

石畳。

武士たちが忙しく行き交っている。

（資料で見た忍城だ。）

（でも、本物はもっと美しい。）

歩きながら、私は小さな手帳へ書き込んだ。

「石垣の高さ……。」

「庭の植栽……。」

「廊下の長さ……。」

同心が不思議そうに尋ねる。

「何を書いておられる。」

「取材メモです。」

「またその言葉か。」

「えへへ。」

「癖なんです。」

広間へ案内される。

「こちらでお待ちください。」

私は静かに正座した。

チェロケースは膝の横。

部屋は静まり返っている。

襖の向こうから武士たちの声が聞こえる。

「本当にあの娘か。」

「町中で評判の。」

「思ったより若い。」

「礼儀正しいではないか。」

私は聞こえないふりをする。

（緊張してきた……。）

さすがに今回は少しだけ緊張した。

これから会う相手は、忍藩藩主・**松平信綱**。

後に「知恵伊豆」と称される名君である。

（歴史の教科書に出てくる人だもん。）

思わず背筋が伸びる。

しばらくすると襖が静かに開いた。

「失礼いたします。」

家臣たちが整列する。

その中央を、一人の武将がゆっくり歩いてきた。

年の頃は四十代半ば。

鋭い眼差し。

しかし、その奥には冷静さと知性が宿っている。

私はすぐに分かった。

（この人だ。）

松平信綱。

私は深く頭を下げた。

「旅の楽人、得川茜と申します。」

信綱は静かに席へ着く。

「面を上げよ。」

私はゆっくり顔を上げた。

信綱は私ではなく、まず隣に置かれたチェロケースへ目を向ける。

「その箱。」

「町で評判になっておる。」

「はい。」

「楽器です。」

「ほう。」

信綱は穏やかに微笑んだ。

「まずは聞こう。」

「なぜ、この忍藩へ参った。」

私は少し考えてから答えた。

「人に会いに来ました。」

「誰に。」

「あなた様です。」

広間がざわつく。

家臣の一人が思わず顔をしかめた。

「無礼な……。」

しかし信綱は手を上げて制した。

「続けよ。」

私はまっすぐ信綱を見つめる。

「歴史には出来事が書かれています。」

「ですが、人の心は書かれていません。」

「私は、それを知りたいんです。」

「殿様が何を考え。」

「何を悩み。」

「何を願って、この国を治めようとしているのか。」

「それを未来へ伝えたい。」

広間は静まり返った。

信綱はしばらく黙って私を見つめていた。

やがて、小さく笑う。

「面白い娘だ。」

「……。」

「余は今まで。」

「戦の話を聞きに来た者は数え切れぬほど見てきた。」

「だが。」

「心を聞きに来た者は初めてだ。」

私は少しだけほっと息をついた。

そのときだった。

信綱の視線が再びチェロケースへ向く。

「その楽器。」

「町人の心を動かしたと聞く。」

「はい。」

「ならば。」

信綱は静かに言った。

「この城でも、一曲聴かせてもらえぬか。」

家臣たちが息をのむ。

私はにっこりと笑った。

「喜んで。」

そう言って私は、ゆっくりとチェロケースへ手を伸ばした。

まだ誰も知らない。

ケースの蓋が開いた瞬間、小さく輝く**三つ葉葵の紋**が、信綱の運命を大きく変えることになるとは――。

第九章 開かれたチェロケース

広間は、水を打ったような静けさに包まれていた。

松平信綱の一言で、家臣たちは左右へ控える。

私は静かに一礼した。

「それでは、失礼いたします。」

畳の上へ、木目調の黒いチェロケースをそっと置く。

町では何度も演奏してきた。

けれど、城の中で演奏するのは初めてだった。

しかも目の前には、忍藩藩主・松平信綱。

（緊張しない、緊張しない。）

私は小さく深呼吸した。

ケースの留め金へ手を掛ける。

カチリ——。

その瞬間だった。

蓋の裏側で、小さな光がふわりと灯る。

黄金色にも緑色にも見える、不思議な輝き。

三つ葉葵。

それは得川家に伝わる紋。

茜以外の者には、ただ一瞬、柔らかな光が揺らめいたようにしか見えなかった。

しかし、その場にいた松平信綱だけは、思わず目を見開く。

（今……。）

（葵の紋に見えた……。）

信綱は何も言わない。

だが、その視線はケースから離れなかった。

私は何事もなかったように『時奏』を取り出す。

茶色く艶やかな木肌。

四百年後も変わらぬ美しさを持つチェロは、静かに広間の光を映していた。

「その楽器は……。」

信綱が口を開く。

「初めて見る。」

「西の国で生まれた楽器です。」

私は少しだけ説明した。

もちろん、未来から来たとは言えない。

「人の声に一番近い音が出ると言われています。」

「人の声か。」

信綱は興味深そうに頷く。

「では、その声を聞かせてもらおう。」

私は静かにエンドピンを伸ばした。

カチッ。

広間に、小さな金属音が響く。

家臣たちは固唾をのんで見守る。

「始めます。」

私は弓を構えた。

最初に鳴らすのは、いつも決まっている。

G線。

低く。

深く。

大地を揺らすような一音。

ボオオオオ……

その響きは、柱を伝い、梁を伝い、静かな城内へと溶け込んでいく。

「……。」

家臣たちの表情が変わった。

誰も聞いたことのない音だった。

重い。

なのに優しい。

遠い昔を思い出させるような、不思議な響き。

私は歌い始めた。

♪

城を守るは 高き石

国を守るは 人の心

刀は鞘に 眠る日こそ

真の平和が 花開く

名を残すより 笑顔残そう

人のぬくもり 歴史となる

♪

歌いながら、私は信綱を見つめた。

その顔には驚きも、喜びもない。

あるのは、静かな思索だった。

だが、その目だけは少し潤んでいるように見えた。

演奏が終わる。

静寂。

広間には、誰一人として声を発する者がいない。

やがて信綱がゆっくり口を開いた。

「……不思議なものだ。」

「はい。」

「余には、幼き日の父上の声が聞こえた。」

家臣たちが顔を見合わせる。

信綱は遠くを見るように話し始めた。

「まだ家督を継ぐ前。」

「父に連れられ、この庭で弓を習った。」

「失敗して泣いておった余に、父は笑ってこう言った。」

『信綱、人は一度や二度の失敗で器は決まらぬ。』

「その言葉を……何十年も思い出しておらなんだ。」

広間は静まり返る。

茜は静かに微笑んだ。

「音楽は、忘れていた宝物を見つけることがあります。」

信綱は深く頷いた。

「まこと、その通りだ。」

その時だった。

一人の家臣が前へ進み出た。

「殿。」

「何だ。」

「恐れながら。」

「申せ。」

「この娘……。」

「人を惑わす妖術を使っているのではございませぬか。」

空気が一変した。

数人の家臣もうなずく。

「確かに。」

「皆が涙するなど普通ではない。」

「何か術があるに違いない。」

私は何も言わなかった。

反論しても意味はない。

その代わり、信綱が静かに口を開いた。

「違う。」

「殿？」

「術ではない。」

信綱はきっぱりと言った。

「人の心を動かす者は、術ではなく真心を持つ。」

「余は、この娘の目を見た。」

「偽りの目ではない。」

家臣たちは押し黙る。

「だが。」

信綱は茜へ視線を向けた。

「一つだけ聞かせてほしい。」

「はい。」

「得川とは……。」

その問いに、広間の空気が張り詰めた。

私は一瞬だけ言葉を選ぶ。

まだ話す時ではない。

けれど、隠し続けることもできない。

「殿。」

私は静かに答えた。

「今はまだ、お話しできません。」

「ですが。」

「その答えは、この忍城のすぐ近くにあります。」

「近く？」

「海老蔵です。」

信綱の眉が動いた。

「海老蔵……。」

「そこに、長い年月守られてきた古文書があります。」

「古文書？」

「はい。」

「それをお読みいただければ、私が何者なのか、お分かりになると思います。」

広間は再びざわめいた。

家臣の一人が声を上げる。

「殿！」

「真偽も分からぬ古文書など！」

しかし信綱は、その声を制した。

「よい。」

「余自身の目で確かめよう。」

そう言って静かに立ち上がる。

「明日、海老蔵へ参る。」

その一言に、家臣たちは驚きの表情を浮かべた。

藩主自ら城を出て、一軒の古い蔵を訪ねる。

それは極めて異例のことだった。

そして茜は心の中でそっとつぶやく。

（いよいよ始まる。）

（得川の歴史が、動き出す。）

その翌日、「海老蔵」で発見される古文書が、忍藩の人々の運命を大きく変えることになるとは、この場にいる誰もまだ知る由はなかった。

第十章 海老蔵の古文書

翌朝――。

忍城では、朝から慌ただしい空気が流れていた。

「本当に殿がお出ましになるのですか。」

家老が確認する。

「ああ。」

松平信綱は静かに頷いた。

「余の目で見たい。」

「その蔵を。」

「その娘を。」

「そして……。」

信綱は少し間を置いた。

「『得川』という名を。」

誰も異を唱えなかった。

昨日、広間で聞いたチェロの音色は、それほどまでに家臣たちの心を揺さぶっていた。

北谷門近く。

藍染蔵「海老蔵」。

朝日を浴びた藍色の暖簾が、風に静かに揺れている。

孟は店先を掃除していた。

簾を止める。

「おや。」

遠くから武士の列が見える。

中央には一頭の馬。

その横を歩く一人の武将。

「殿自ら……。」

孟は小さく微笑んだ。

「茜殿。」

二階へ声を掛ける。

「お客様ですよ。」

私は階段を下りながら返事をした。

「今行きます！」

今日もビンテージジーンズに革のブーツ。

いつもの取材スタイルだった。

チェロケースを背負い、店先へ出る。

「おはようございます。」

私は深く一礼した。

信綱も静かに頷く。

「昨日は見事な演奏であった。」

「ありがとうございます。」

店内へ案内される。

古い柱。

藍染の布。

掛け軸。

古時計。

骨董品が整然と並んでいる。

信綱はゆっくり見回した。

「落ち着く蔵だ。」

「四百年近く、人を迎えてきましたので。」

孟が静かに答える。

「ほう。」

「歴代の主人が、古いものを守ってまいりました。」

信綱は一本の掛け軸の前で足を止めた。

達筆な書。

そこには、

『温故知新』

と書かれていた。

「良い言葉だ。」

「昔を知れば、新しい道が見える。」

「茜殿も、そう申しております。」

信綱は小さく笑う。

「なるほど。」

「殿。」

私は静かに言った。

「今日は、一つお見せしたいものがあります。」

「古文書か。」

「はい。」

私は孟を見る。

孟は黙って頷いた。

そして店の一番奥へ歩いていく。
そこには何もない壁がある。
家臣たちは不思議そうな顔をした。

「壁ではないか。」

「……。」

孟は壁へそっと手を添える。

その瞬間だった。

ゴォ……

蔵全体が小さく震えた。

壁が、ゆっくりと霞のように揺らぐ。

「なっ……！」

家臣たちが息をのむ。

「壁が消えた！」

その向こうには、小さな部屋が現れていた。

棚が幾重にも並び、巻物や古文書、木箱が天井近くまで積み上げられている。

「これは……。」

「蔵の奥座敷にございます。」

孟は穏やかに答えた。

「代々、忍藩に関わる品だけを守り続けてきた場所です。」

実際には、茜と孟にしか自由に出入りできない「無限収納」である。しかし、
蔵が主と認めた信綱にだけ、この日だけは入口が静かに姿を現した。

信綱は棚を見つめる。

「これほどの史料……。」

「忍城にも無い。」

「ええ。」

孟は一冊の帳面を取り出した。

「こちらは島村家伝来。」

次に木箱。

「こちらは戦国期。」

さらに巻物。

「こちらは徳川家康公以前のものの。」

家臣たちが次々と広げていく。

「これは本物だ。」

「墨が古い。」

「紙も。」

「間違いない……。」

その時だった。

孟が最も古い桐箱を静かに持ち上げた。

「茜殿。」

「お願いします。」

私は両手で受け取る。

桐箱には一つの紋が焼き印されていた。

三つ葉葵。

しかし、徳川家のものとは少しだけ形が違う。

葉の曲線が柔らかく、古い意匠だった。

「……。」

信綱が立ち上がる。

「その紋。」

私は静かに蓋を開いた。

中には、一本の巻物。

四百年以上前の和紙。

慎重に広げる。

最初に現れた文字は、

『得川家系図』

広間の空気が凍りついた。

「得川……家？」

家臣の一人が思わず声を上げる。

「そんな家は聞いたことが……。」

信綱は無言で巻物を見つめる。

古い筆跡。

代々の名。

そして最後の余白に書かれた一文。

『徳川の祖、ここにあり。』

「……。」

誰も言葉を発することができなかった。

信綱は震える手で巻物を受け取る。

何度も読み返す。

古文書を照合する。

印判。

花押。

年代。

一つひとつ確認していく。

やがて信綱は静かに息を吐いた。

「偽りではない……。」

「殿！」

家老が思わず叫ぶ。

「これは……。」

信綱はゆっくり顔を上げる。

そして茜を見る。

「茜殿。」

「はい。」

「そなた……。」

「この家の血を引く者なのか。」

私は静かに頷いた。

「はい。」

「得川の末裔です。」

部屋中の武士が立ち上がる。

誰もが息を呑み、茜を見つめている。

昨日まで「旅の娘」と呼ばれていた女性が、今、歴史の中に埋もれていた由緒ある家の末裔として名乗りを上げたのである。

しかし茜は少しも誇らしげではなかった。

「殿。」

「私は、この血筋を自慢したくて来たものではありません。」

「……。」

「人々の暮らしを書き残したいためです。」

「笑顔を未来へ届けたい。」

「それだけです。」

信綱はその言葉を聞き、静かに目を閉じた。

やがて深く頷く。

「血筋よりも、人柄か。」

「……見事である。」

そして家臣たちへ向き直り、静かに、しかし力強く命じた。

「今日より得川茜殿は、忍藩の大切な客人として遇せよ。」

「決して無礼があってはならぬ。」

家臣たちは一斉にひざまずいた。

「ははっ！」

こうして、牢へ入れられた「怪しい旅人」は、忍藩が敬意をもって迎える「客人」となった。

だが、茜自身はまだ知らない。

この古文書の存在は、やがて江戸幕府そのものを揺るがす大きな出来事へと発展していくことを――。

第十一章 姫君として迎えられる日

海老蔵の店内では、しばらく誰一人として口を開かなかった。

静寂の中で聞こえるのは、軒先の風鈴の音だけ。

ちりん……

松平信綱は、もう一度ゆっくりと古文書へ目を落とした。

何度読んでも内容は変わらない。

年代。

花押。

島村家に代々伝えられた記録。

そして「得川」の名。

歴史を預かる者として、その価値は十分すぎるほど理解できた。

「……間違いない。」

信綱は静かに巻物を閉じた。

「この文書は、代々守られてきたものの。」

「偽る理由がない。」

家臣たちは黙ってうなづく。

誰も反論できなかった。

「得川茜殿。」

信綱が立ち上がる。

私も自然と姿勢を正した。

「はい。」

「先日まで、そなたを不審者として扱った。」

「……。」

「忍藩を預かる者として、ここに詫びよう。」

そう言うと、信綱は深く頭を下げた。

その場にいた武士たちは目を見張った。

「殿！」

「おやめください！」

家老が慌てる。

藩主が一人の旅人に頭を下げるなど、前代未聞だった。

私は慌てて両手を振る。

「やめてください！」

「殿が頭を下げることはありません。」

「皆さんはお仕事をされたんです。」

「私が怪しかっただけです。」

思わず笑ってしまう。

「ジーンズに大きな黒い箱ですから。」

広間に小さな笑いが広がった。

緊張していた空気が、少しだけ和らぐ。

信綱も微笑んだ。

「町人たちがおぬしを慕う理由が分かった。」

「え？」

「怒らぬ。」

「恨まぬ。」

「人を責めぬ。」

「それでいて、人を笑顔にする。」

「これほどの人物は珍しい。」

私は少し照れくさくなった。

「私は……。」

「皆さんのお話を聞くのが好きなんです。」

「それだけですよ。」

「いや。」

信綱は首を横に振る。

「それが一番難しい。」

その時、一人の年配の家臣が進み出た。

「殿。」

「申せ。」

「恐れながら。」

「得川家の血筋と判明した以上、茜殿への扱いを改めるべきかと。」

家臣たちもうなずく。

「確かに。」

「姫君としてお迎えすべきでは。」

「当然です。」

「しかし……。」

私は慌てた。

「姫なんて無理です！」

「私はライターですから！」

「らいたあ？」

また家臣たちが首をかしげる。

しまった。

また現代語だった。

「えっと……。」

「歴史を書き残す仕事です。」

信綱は静かに笑う。

「その仕事は続ければよい。」

「え？」

「だが、忍藩では姫君として遇する。」

「それは……。」

「町人の前では、これまでどおり自由に歩けばよい。」

「城へ来た時だけは、我らが礼を尽くす。」

私は困って孟を見た。

孟は小さく笑っている。

（助けてくれないんだ……。）

その日の午後。

城から仕立屋が海老蔵へやって来た。

「茜様。」

「はい？」

「姫君用のお召し物をお持ちいたしました。」

大きな桐箱が三つ。

中を開ける。

思わず息をのんだ。

淡い桜色の打掛。

藍色の小袖。

白銀の帯。

どれも見事な手仕事だった。

「すごい……。」

仕立屋の主人が胸を張る。

「忍藩一番の職人が、昼夜を問わず仕立てました。」

私は布にそっと触れる。

「きれい……。」

「でも。」

私は苦笑した。

「普段はジーンズが好きなんです。」

部屋中が一瞬静まり返る。

次の瞬間。

仕立屋も。

家臣も。

孟まで吹き出した。

「はっはっは！」

「姫君がジーンズとは！」

「そのような姫は聞いたことがない！」

私は頬をふくらませる。

「だって歩きやすいんです。」

信綱も珍しく声を立てて笑った。

「好きにするとよい。」

「え？」

「城では姫。」

「町では吟遊詩人。」

「それがおぬらしい。」

私はようやく安心した。

「ありがとうございます。」

夕暮れ。

いつものように私は市場へ向かった。

もちろん服はジーンズ。

チェロケースを背負っている。

「あっ！」

子どもたちが走ってくる。

「茜さん！」

「今日も歌って！」

「もちろん。」

私は広場へ座る。

すると市場の人々が口々に言い始めた。

「姫様！」

「姫様、お待ちしていました！」

私は苦笑する。

「その呼び方はやめてください。」

「茜で十分です。」

「でも城では姫様なんでしょう？」

「町では茜さん！」

「そうしましょう！」

市場は笑い声に包まれた。

私は『時奏』を取り出す。

今日の歌は、この町への感謝を込めて。

G線が静かに響く。

♪

肩書きよりも 笑う顔
身分よりなお あたたかい
名前を呼んで 手を振れば
今日も心は 近くなる
城の空にも 町の空にも
同じ夕日が 照らしてる
人を想えば それだけで
歴史はきっと 花になる

♪

歌が終わると、大きな拍手ではなく、江戸時代の人々らしい静かな一礼が広場
いっぱい広がった。

その光景を遠くから見つめる信綱は、小さくつぶやく。

「姫でありながら、民と同じ目線で歩くか……。」

「この娘は、身分を誇るのではない。」

「人を大切にする。」

「だから、人は自然と集まるのだな。」

その夜、信綱は密かに江戸へ使者を送ることを決める。

届ける相手は――

三代将軍・徳川家光。

「忍藩に、不思議な姫君あり。」

その一通の書状が、やがて茜の運命をさらに大きく動かしていくことになる。

第十二章 将軍家光への書状

その夜――。

忍城の書院には、まだ灯がともっていた。

家臣たちは帰り、広い部屋には松平信綱だけが座っている。

机の上には、海老蔵で見た古文書。

そして、得川茜が町で歌う姿を記した報告書。

信綱は静かに筆を取った。

「……これは余だけで抱える話ではない。」

白い和紙を前に、一文字ずつ丁寧に書き始める。

＞ 忍藩に、不思議なる旅の楽人あり。

＞ 姓は得川。

＞ 海老蔵に伝わる古文書により、その由緒尋常ならざること判明。

＞ 人心を慰め、民の争いを鎮める力あり。

筆が止まる。

（人を慰める……。）

（いや。）

信綱は小さく首を振った。

「違うな。」

もう一枚、新しい和紙を広げる。

今度はこう書いた。

＞ 人を癒やすのではない。

＞ 人が忘れていた心を思い出させる娘なり。

それが一番正しい表現だった。

翌朝。

江戸へ向かう早馬が忍城を出発した。

「将軍家へ急げ！」

「はっ！」

馬は土煙を上げながら日光街道を南へ駆けていく。

その背中を見送りながら、信綱は静かにつぶやいた。

「家光公は、どのように受け止められるだろうか。」

その頃。

茜はいつものように市場を歩いていた。

「おはようございます！」

「茜さん！」

「今日は染物屋へ来て！」

「鍛冶屋も！」

「うちは明日！」

町の人たちは、すっかり茜の日課を楽しみにしている。

「今日はどこへ行こうかな。」

チェロケースを背負い、笑顔で歩く。

すると一人の少年が駆け寄ってきた。

「茜さん！」

「どうしたの？」

「父ちゃんが元気ない。」

「仕事で失敗したんだ。」

私は少年と一緒に鍛冶屋へ向かった。

鍛冶場では、一人の職人が黙って火を見つめていた。

「こんにちは。」

職人は顔を上げる。

「ああ……茜さん。」

「元気ありませんね。」

「昨日、大事な注文を失敗してしまってな。」

「お客さんに迷惑をかけた。」

私は隣に腰を下ろした。

「落ち込む日もありますよ。」

「でも、鉄は何度でも打ち直せます。」

職人は苦笑した。

「人もそうだといいいんだが。」

「きっと同じです。」

私は『時奏』を静かに構えた。

「今日は鍛冶屋さんの歌ですね。」

G線が低く響く。

ポオオオ……

火が揺れる。

金槌の音が静かに止まる。

私は歌い始めた。

♪

熱き炎に 向かう手は

誰かの暮らしを 守るため

失うことも あるけれど
明日は今日より 強くなる
鉄も人も 打たれながら
優しさ覚えて 光りだす
♪

歌い終える頃には、職人の頬を涙が伝っていた。

「ありがとう。」

「もう一度やってみる。」

「今度はきっと、うまくいく。」

茜はにっこり笑う。

「応援しています。」

周囲の職人たちも大きくうなずいた。

「よし！」

「仕事に戻るぞ！」

鍛冶場に再び金槌の音が響き始める。

カン、カン、カン――。

その音は、昨日までより力強く聞こえた。

夕方。

海老蔵へ戻ると、孟がお茶を淹れて待っていた。

「お疲れさま。」

「ただいま。」

「今日も町中で歌ってきたの？」

「うん。」

私は今日の出来事を楽しそうに話す。

職人のこと。

少年のこと。

市場の笑顔。

孟は静かに聞いていた。

「茜殿。」

「なに？」

「自分では気付いていないでしょう。」

「？」

「あなたは歴史を書いているだけではありません。」

「え？」

「歴史を作っています。」

私は笑って首を振る。
「そんな大げさだよ。」
「私は取材してるだけ。」
「そう思っているのは本人だけですよ。」
孟も笑った。
「町の人とは違います。」
「みんな、茜殿が来るのを待っています。」
私は少し照れくさくなった。
「明日も歩こう。」
「まだ会っていない人がたくさんいるから。」

その頃、江戸城では——。
早馬が城門へ到着していた。
「忍藩より急使！」
「松平信綱公からの書状でございます！」
将軍への取次役は封を見て、表情を改める。
「信綱公直筆か。」
「急ぎ上覧の準備を。」
書状は静かに奥へ運ばれていく。
その先には、天下を治める一人の男がいた。
三代将軍・徳川家光。
そして、その書状を読んだ家光が最初に口にする言葉は、忍藩だけでなく江戸中を驚かせるものになる。
「得川……だと？」
その一言が、新たな歴史の幕を開ける合図となった。

第十三章 将軍家光の決断

——江戸城。

朝霧がまだ白く残る本丸に、一人の使者が足早に廊下を進んでいた。
「忍藩・松平信綱公より急書でございます。」
取次役が両手で差し出した書状は、すぐに将軍執務の間へ運ばれた。
障子が静かに開く。
そこには、天下を治める男——**徳川家光**が座していた。
家光はまだ四十歳にも満たない。
鋭い眼光。
しかし、その瞳の奥には深い孤独と聡明さが宿っていた。

「信綱からか。」

家光は封を切る。

松平信綱から届く書状は、滅多なことではない。

しかも「至急」とある。

ゆっくり読み始める。

一行。

二行。

三行。

やがて、その手が止まった。

「……得川？」

家光はもう一度読む。

＞ 忍藩に、不思議なる旅の楽人あり。

＞ 姓は得川。

＞ 海老蔵に伝わる古文書により、その由緒尋常ならず。

家光は静かに目を閉じた。

「得川……。」

その姓には覚えがあった。

幼いころ。

乳母から一度だけ聞いた話。

『徳川の前に、得川という古い呼び名があったとも伝わります。』

その話は、すぐに

「昔話だ。」

と打ち切られた。

それ以来、誰も口にしなかった。

「阿部。」

家光が声を掛ける。

老中が静かに進み出た。

「はっ。」

「得川という姓を知っておるか。」

老中は少し考えた。

「申し訳ございませぬ。」

「記憶にございません。」

「そうか。」

「では保管庫を調べよ。」

「家康公以前の記録を。」

「ははっ。」

江戸城の書庫が一斉に動き始めた。

その頃。

忍藩では何も知らない茜が今日も城下町を歩いていた。

「おはようございます！」

「茜さん！」

「今日は橋の方へ来て！」

利根川へ続く小さな橋では、旅人が荷物を運んでいた。

一人のおばあさんが重そうな荷を持っている。

私は駆け寄った。

「持ちますよ。」

「悪いねえ。」

「大丈夫です。」

チェロケースを背負ったまま荷物を運ぶ姿に、周囲の旅人が笑う。

「変わった娘さんだ。」

「楽人なのに力持ちだ。」

私は笑った。

「旅は助け合いです。」

橋を渡ると、小さな茶店があった。

旅人たちが一息ついている。

「茜さん！」

茶店の主人が手を振る。

「一曲お願いできますか。」

「もちろん。」

私は橋のたもとへ腰を下ろした。

今日の景色を眺める。

川。

舟。

風。

旅人。

子ども。

全部が歌になる。

『時奏』を静かに抱える。

G線が深く響いた。

ボオオオ……

川面がゆっくり揺れる。

私は歌い始めた。

♪

橋を渡れば また出会い

人は誰かと 歩いてる

笑顔一つを 手渡せば

知らぬ誰かも 友になる

旅は道では ありません

出会う心が 道になる

♪

橋の上を吹き抜ける風が、歌を遠くまで運んでいく。

旅人たちは静かに目を閉じて聴いていた。

一人の老人は涙を流している。

「五年前に旅立った息子を思い出した。」

「また会えた気がした。」

茜は優しく微笑む。

「きっと、その思い出は、お父さんの心の中でずっと生きています。」

老人は深く頭を下げた。

その様子を、馬上から見つめる一人の武士がいた。

江戸から忍藩へ向かう早馬の使者である。

「……これが。」

「信綱公の書状にあった娘か。」

彼は馬を止めた。

遠くから歌を聴く。

やがて目を閉じる。

脳裏に浮かんだのは、幼いころ母に手を引かれて歩いた故郷の田んぼ道だった。

「母上……。」

わず頬を涙が伝う。

使者は慌てて袖で拭った。

「これほどとは。」

「信綱公の書状は誇張ではなかった。」

彼は馬を降りると、茜へ深く一礼して消えた。

第十四章 将軍からの召状

翌朝――。

忍城の書院。

松平信綱は、一通の書状を静かに見つめていた。

封には三つ葉葵。

江戸城からの早馬が夜通し駆け、今朝ようやく忍城へ届いたものである。

信綱は封を開き、一文字一文字を丁寧に読み進めた。

やがて小さく息をつく。

「……家光公らしい。」

書状には簡潔に書かれていた。

＞ 忍藩松平信綱へ。

＞ 得川茜と申す者、一度江戸城へ召し出す。

＞ そなた自ら警護し、無事に登城させよ。

＞ 徳川家光

信綱は静かに立ち上がった。

「茜殿をお呼びしなさい。」

「はっ。」

しばらくして、海老蔵から茜がやって来た。

今日もダメージジーンズに革のブーツ。

背中には『時奏』を収めた黒い木目調のチェロケース。

「お呼びでしょうか、信綱様。」

信綱は一通の書状を差し出した。

「将軍家光公よりだ。」

「え？」

「私に……ですか？」

「いや。」

信綱は微笑んだ。

「余への命である。」

「茜殿を江戸城へお連れせよ、と。」

私は驚いて書状を見つめた。

「将軍様が……。」

「お会いになりたいそうだ。」

しばらく言葉が出なかった。

歴史の教科書で何度も見た人物。

その将軍が、自分と呼んでいる。

「緊張します……。」
思わず本音が漏れる。
信綱は穏やかに笑った。
「安心なさい。」
「江戸までは余が責任をもって警護する。」
「茜殿に指一本触れさせぬ。」
その言葉に私は深く頭を下げた。
「よろしく願いいたします。」

三日後。
忍城大手門。
二十騎あまりの騎馬武者が整列していた。
中央には松平信綱。
そのすぐ後ろを茜が歩く。
町中の人々が見送りに集まっていた。
「茜さん！」
「行ってらっしゃい！」
「将軍様にも歌を届けてください！」
団子屋のおばあさんが涙ぐみながら手を振る。
子どもたちは大声で叫ぶ。
「また帰ってきてね！」
私は笑顔で大きく手を振った。
「必ず帰ってきます！」
信綱が馬上から声を掛ける。
「出立！」
一行は忍藩を出て日光街道を南へ向かった。

街道には夏の風が吹いていた。
松並木の木陰を進みながら、私は馬の横を歩く。
「信綱様。」
「何かな。」
「江戸まで何日くらいですか？」
「二日ほどだ。」
「意外と近いんですね。」
「道中も勉強になる。」
私はうれしそうに周囲を見回した。

「全部取材ですね。」

信綱は思わず笑う。

「本当に歴史が好きなのだな。」

「はい。」

昼過ぎ。

一行は街道沿いの茶屋で休憩を取った。

護衛たちは馬に水を飲ませている。

私は『時奏』を壁へ立て掛け、小川で手を洗った。

「冷たくて気持ちいい。」

子どもたちが近寄ってくる。

「お姉ちゃん、あの大きな箱は？」

「楽器だよ。」

「見たい！」

「あとで演奏するね。」

私は笑顔で答えた。

その様子を、茶屋の隅から二人の浪人風の男がじっと見つめていた。

「……あれか。」

「ああ。」

「珍しい楽器らしい。」

「高く売れそうだ。」

二人は静かに目配せをする。

休憩を終え、一行が再び出発しようとした、その時だった。

「茜殿。」

信綱が振り返る。

「チェロは？」

私は壁を見る。

「あれ？」

そこにあるはずの黒いケースがない。

「……ない。」

笑顔が消えた。

私は周囲を見回す。

茶屋。

馬。

荷物。

どこにもない。

「『時奏』……。」

心臓が大きく鳴る。

「ありません！」

護衛たちが一斉に動いた。

「探せ！」

「街道を封鎖しろ！」

「盗人だ！」

信綱は鋭い目で街道の先を見つめた。

遠くに二つの人影。

黒いケースを担いで林へ走っていく。

「追え！」

騎馬武者たちが一斉に馬を走らせる。

私は立ち尽くしていた。

「『時奏』……。」

しかし次の瞬間。

誰にも聞こえないほど小さく、

ケースの中から——

ボオオオ……

G線の低い響きが、風に乗って聞こえた気がした。

まるで『時奏』自身が、

「必ず帰る。」

そう告げているようだった。

第十五章 盗まれた『時奏』

「追え！」

松平信綱の鋭い声が街道に響いた。

二十騎の騎馬武者が一斉に馬を走らせる。

土煙が舞い上がる。

盗人は二人。

黒い木目調のチェロケースを抱え、街道脇の雑木林へ飛び込んだ。

「逃げ！」

「逃がすな！」

私はその場に立ち尽くしていた。

「時奏……。」

胸が締めつけられる。
あの『時奏』は楽器ではない。
私の旅の相棒。
歴史と一緒に歩いてきた、大切な家族だった。
信綱が馬を降り、私の肩に手を添える。
「茜殿。」
私は顔を上げる。
「申し訳ありません。」
「私が目を離したばかりに……。」
信綱は静かに首を横に振った。
「謝ることではない。」
「必ず取り戻す。」
その目には武将らしい強い決意が宿っていた。

一方その頃――。
林の奥。
盗人二人は息を切らしながら笑っていた。
「はっはっは！」
「重い箱だな！」
「だが、高く売れるぞ。」
二人は人気のない場所まで来ると、ケースを地面へ降ろした。
「さあ、中を見よう。」
留め金を引く。
カチッ。
……開かない。
「ん？」
もう一度。
カチッ。
やはり開かない。
「壊れてるのか？」
力いっぱい引っ張る。
びくともしない。
「貸せ！」
もう一人が刀の柄で叩く。
ゴン！
ゴン！

ゴン！
木目調のケースには傷一つ付かなかった。
「なんだ、この箱！」
「鉄より硬いぞ！」
二人は汗を流しながら必死にこじ開けようとする。
しかし、まったく動かない。
「化け物か！」
「鍵穴もない！」
「どうなってる！」
その時だった。
ケースの中から、
ボオオオ……
低く美しいG線の音が響いた。
誰も弾いていない。
それなのに、森の空気が震えた。
盗人たちは顔を見合わせる。
「聞いたか？」
「今……鳴った。」
「中に誰かいるのか？」
恐る恐る耳を近づける。
すると再び、
ボオオオ……
「ひっ！」
二人は飛び退いた。
「呪いだ！」
「こんな物、盗むんじゃなかった！」

その頃、街道では捜索が続いていた。
武士たちは林を探し回る。
「見つからぬ！」
「足跡はここまでだ！」
信綱は静かに周囲を見回す。
「茜殿。」
「はい。」
「何か心当たりは。」
私は少しだけ笑った。

「実は……。」

「？」

「『時奏』は、私のところへ帰ってくるんです。」

信綱は 一瞬言葉を失った。

「帰って……くる？」

「はい。」

「夜になると。」

家臣たちがざわつく。

「そんなことが。」

「あり得ぬ。」

私は肩をすくめた。

「私も理由は分かりません。」

「でも、一度も帰ってこなかったことはありません。」

信綱は黙って歯を見つめる。

これまでに、不思議な出来事はいくつも見てきた。

チェロの音。

海老蔵。

古文書。

今さら疑う気持ちは、不思議と湧かなかった。

「ならば。」

信綱は静かに言った。

「信じよう。」

日が傾き始めた。

一行は近くの本陣へ宿を取るようになった。

武士たちは落ち着かない。

「本当に戻るのだろうか。」

「盗まれたのだぞ。」

「相手は盗人だ。」

私は縁側へ腰掛け、夕焼けを見つめていた。

「『時奏』。」

小さくつぶやく。

「帰っておいで。」

風が吹いた。

庭の木々が揺れる。

やがて日が沈み、

空に一番星が輝き始めた、その時――

カタン。

誰もいない廊下から、小さな音がした。

信綱が振り向く。

武士たちも立ち上がる。

廊下の向こうに、

黒い木目調のチェロケースが、

まるで誰かに運ばれてきたように静かに置かれていた。

「な……。」

「誰だ！」

武士たちが飛び出す。

しかし外には誰もいない。

私はゆっくり歩み寄る。

「おかえり。」

そっとケースへ触れる。

カチリ。

留め金は自然に外れた。

中には『時奏』。

何事もなかったかのように静かに眠っている。

私は思わず抱きしめた。

「よかった……。」

その瞬間、

G線が優しく震えた。

ボォォ……

まるで、

「ただいま。」

そう返事をしたようだった。

その光景を見つめる信綱は、静かに目を閉じる。

「……。」

やはり、この娘はただ者ではない。

そして、このチェロもまた、人の手では説明できぬ力を宿している。

信綱は心の中で固く決意する。

「この姫君は、何があっても江戸城までお守りしよう。」

将軍・徳川家光との対面まで、あと一日。

しかし一行はまだ知らなかった。

この盗難事件は、単なる盗人の仕業ではなく、茜の存在を探る者たちによる最

初の試しであったことを――。

第十六章 街道に響くチェロの調べ

翌朝――。

本陣の庭には、澄み切った朝の空気が流れていた。

「『時奏』。」

私はチェロケースをそっとなでる。

「昨日はありがとう。」

ボォ……

小さくG線が震えた。

まるで返事をするようだった。

その様子を見ていた松平信綱は、小さく微笑む。

「本当に帰ってきたな。」

「はい。」

「この子は約束を守るんです。」

信綱は静かに頷いた。

「余も約束を守ろう。」

「江戸城まで必ず守る。」

私は深く頭を下げた。

「よろしく願いいたします。」

一行は再び日光街道を南へ進み始めた。

夏の日差しが松並木を照らし、木漏れ日が街道へ美しい模様を描いている。

道中では旅人が何度も立ち止まった。

「あれは昨日盗まれた楽器では？」

「戻ったのか？」

「どうやって？」

護衛の武士たちも、不思議そうな顔をしている。

昨夜の出来事は誰にも説明できなかった。

「茜殿。」

信綱が馬上から声を掛ける。

「はい。」

「余も一つ頼みがある。」

「何でしょう。」

「今日は街道の人々にも一曲聴かせてはくれぬか。」

私は嬉しそうに笑った。

「もちろんです。」

昼頃。

一行は宿場町へ到着した。

街道沿いには旅籠や茶店が並び、多くの旅人で賑わっている。

「松平様のお通りだ！」

人々が道を空ける。

しかし、その視線は信綱ではなく、一人の若い女性へ集まっていた。

「あの黒い箱の娘だ。」

「昨日盗難騒ぎになった。」

「歌姫だそうだ。」

信綱は苦笑する。

「余より人気ではないか。」

家臣たちまで笑い出した。

「そのようです。」

宿場の広場。

茜は静かに『時奏』を取り出した。

「皆さん。」

「旅をされていて思いました。」

旅人たちが静かになる。

「街道は、人と人をつなぐ道ですね。」

「城と町。」

「親と子。」

「知らない人同士。」

「全部、この一本道でつながっています。」

私は弓を構えた。

G線が深く響く。

ポオオオ……

街道の喧騒が少しずつ静まっていく。

私は歌い始めた。

♪

歩く一步が 今日となり

重ねる一步が 明日となる

旅は遠くへ 行くためでなく

誰かの笑顔に 会うために
松の木陰も 川の風も
みんな旅人 迎えてる
今日という日が 思い出になり
歴史の道は 続いてゆく
♪

演奏が終わる頃には、広場いっぱい人が集まっていた。

老人も。

子どもも。

旅の武士も。

飛脚も。

皆、静かに涙をぬぐっている。

その中に、一人だけ泣いていない男がいた。

旅装束に身を包み、深く笠をかぶっている。

男は腕を組み、茜をじっと見つめていた。

「……。」

演奏が終わると、小さくつぶやく。

「間違いない。」

「得川の姫か。」

誰にも聞こえない声だった。

男は懷から一枚の紙を取り出す。

そこには、古い三つ葉葵によく似た紋が描かれている。

「やはり生きていた。」

そう言うと、人混みに紛れて静かに姿を消した。

その夜。

宿に着いた信綱は、護衛頭を呼び寄せた。

「一つ気になることがある。」

「何でしょう。」

「今日、人混みの中に一人。」

「茜殿だけを見ていた男がいた。」

護衛頭は驚く。

「殿もお気づきでしたか。」

「おぬしも見たか。」

「はい。」

「町人ではありません。」

「武士とも違う。」

「忍びでしょうか。」

信綱は静かに首を振った。

「分からぬ。」

「だが。」

「明日から護衛を倍にせよ。」

「茜殿から目を離すな。」

「はっ！」

護衛たちは緊張した表情で持ち場へ散っていった。

縁側では、茜が月を眺めながら『時奏』を優しく奏でている。

その穏やかな音色とは対照的に、闇の中では何者かが静かに動き始めていた。

江戸城まで、あと少し。

茜を待つのは将軍との対面だけではない。

得川家の秘密を知る者たちもまた、その足音を忍び寄らせていた。

第十七章 江戸城、目前

翌朝。

一行は夜明けとともに宿を出立した。

松平信綱が空を見上げる。

夏の青空がどこまでも広がっていた。

「今日は急ぎます。」

「はい。」

私は『時奏』を背負い、笑顔でうなずいた。

昨日の盗難騒ぎなど、まるで何事もなかったかのように。

しかし信綱だけは違った。

護衛の数を昨日の倍に増やしていた。

前方に四騎。

後方に四騎。

左右にも武士が付き、一行はまるで大名行列のようになっていた。

「大げさではありませんか？」

私が苦笑すると、信綱は真剣な表情で答えた。

「余の勘は、あまり外れぬ。」

「まだ終わっておらぬ。」

昼過ぎ。

一行は大きな川へたどり着いた。
渡し船が何艘も行き来し、多くの旅人が順番を待っている。
「ここで少し休みましょう。」
護衛たちは周囲を警戒しながら馬に水を飲ませる。
私は川辺へ歩いていった。
水面がきらきら光っている。
「きれい……。」
すると小さな女の子が近寄ってきた。
「お姉ちゃん。」
「なあに？」
「昨日、お歌を聞いたよ。」
「ありがとう。」
「もう一回聞きたい。」
私は笑顔になった。
「もちろん。」
信綱も優しくうなずく。
「少しなら構わぬ。」

私は川辺の石へ腰を下ろし、『時奏』を取り出した。
静かにG線を鳴らす。
ボオオオ……
川面が震えたように見えた。
旅人たちが次々と集まってくる。
私は歌い始める。

♪

流れる川は 時のよう
止まることなく 海へゆく
人も歴史も その流れ
出会いを重ね 明日になる
別れは終わり ではなくて
また会うための 約束と
風が静かに 教えてる

♪

歌が終わると、大きな拍手の代わりに、人々は静かに頭を下げた。
女の子は笑顔で言った。
「ありがとう。」

私は頭をなでる。

「またどこかで会おうね。」

その時だった。

護衛の一人が馬を飛ばして戻ってきた。

「殿！」

信綱が振り向く。

「どうした。」

「江戸城より迎えの旗本衆が参ります！」

遠くの街道に、三つ葉葵の旗が見えた。

二十騎ほどの武士たちが整然と近づいてくる。

隊列の中央には、一人の若い旗本。

馬を降りると、信綱へ深く一礼した。

「松平伊豆守様。」

「ご苦労。」

「上様のご命令により、ここより江戸城までは我らがお迎えいたします。」

信綱はうなずいた。

「よろしく頼む。」

旗本は次に茜へ向き直る。

「得川茜様。」

「はい。」

「上様が、お待ちでございます。」

「……。」

その一言に、私は急に緊張してきた。

「いよいよですね。」

信綱が笑う。

「怖いですか。」

「少しだけ。」

「では一つ教えよう。」

私は信綱を見る。

「家光公は。」

信綱は穏やかな声で続けた。

「恐ろしいお方ではない。」

「人を見る目を持つ方だ。」

「飾らず、ありのままの茜殿で会えばよい。」

私はほっと笑った。

「ありがとうございます。」

その日の夕暮れ。
遠くに江戸の町並みが見え始めた。
数え切れない屋根。
白壁。
大きな橋。
立ちのぼる炊事の煙。
そして、その向こうに堂々とそびえる巨大な城。
「……江戸城。」

私は思わず足を止めた。
想像をはるかに超える大きさだった。

「すごい……。」
信綱は静かに城を見つめる。
「天下の中心だ。」
その時、『時奏』が小さく震えた。
ボォ……

私はそっとケースを抱きしめる。

「大丈夫。」
「一緒に行こう。」

その夜、一行は江戸城外の上屋敷で一泊することになった。

そして翌朝――。

得川茜は、ついに三代将軍・徳川家光との運命の対面を迎える。

しかし、その江戸城ではすでに、得川家の古文書を巡る別の思惑が静かに動き始めていた。

「本当に得川の姫なのか……。」

「確かめねばならぬ。」

その言葉を発した人物は、家光のすぐ近くに仕える重臣であった。

茜を待つのは歓迎だけではない。

試練もまた、江戸城の中で待ち受けていた。

第十八章 江戸城への初登城

翌朝――。

江戸の町は、朝早くから活気に満ちていた。

商人たちの威勢のよい掛け声。

橋を渡る旅人。
魚河岸へ向かう荷車。
私は思わず立ち止まる。
「すごい……。」
昨日見た忍藩の城下町とは比べものにならない。
「これが江戸……。」
人口百万人。
世界一の大都市。
歴史書で何度も読んだ町が、今、目の前にあった。
「茜殿。」
信綱が優しく声を掛ける。
「参りましょう。」
「はい。」

一行はゆっくりと江戸城大手門へ向かう。
門前には大勢の武士。
三つ葉葵の旗が風にはためいている。
「松平伊豆守様、ご到着！」
門番が大きな声で告げた。
重厚な門がゆっくりと開く。
ギギギ……
私は思わず息をのんだ。
「大きい……。」
石垣だけでも忍城よりはるかに高い。
広い。
美しい。
まさに天下の城だった。
「どうぞ。」
信綱が先に進む。
私は一礼して門をくぐった。

城内へ入ると、何人もの旗本や役人が並んでいた。
しかし――
その視線は皆、私に向いている。
「あの娘か。」
「得川茜。」

「信綱が申ししていた……。」

「本当に旅姿だ。」

私は少し照れくさくなる。

今日もいつものダメージジーンズ。

革のブーツ。

そして背中には『時奏』。

「姫なのに……。」

「珍しい。」

そんな声が聞こえてくる。

信綱は苦笑した。

「気にしなくてよい。」

「はい。」

やがて控えの間へ案内された。

「ここで少々お待ちください。」

私は静かに座る。

緊張してきた。

信綱が隣へ腰を下ろす。

「茜殿。」

「はい。」

「一つだけ。」

「？」

「家光公の前でも、町で歌う時と同じ笑顔でいてください。」

「それだけで十分です。」

私は少し笑った。

「難しいです。」

「将軍様ですよ？」

信綱も笑う。

「余も最初はそうだった。」

「え？」

「初めてお会いした日は、一晩眠れなかった。」

思わず吹き出してしまう。

「信綱様でも？」

「もちろん。」

緊張が少しほぐれた。

その頃――

江戸城奥書院。

将軍・徳川家光は、一枚の古文書を眺めていた。

その横には老中たち。

そして、ひときわ鋭い眼差しの老臣がいた。

「上様。」

「何だ。」

「得川の古文書。」

「まだ真偽は分かりませぬ。」

家光は静かに頷く。

「承知しておる。」

「しかし。」

「信綱がここまで申す以上、会わぬわけにはいかぬ。」

老臣は続ける。

「もし偽りであれば。」

「その時は余が判断する。」

家光の声は穏やかだった。

しかし、その言葉には将軍としての重みがあった。

「松平伊豆守様。」

障子が静かに開く。

「上様がお待ちです。」

信綱は立ち上がる。

「参ろう。」

私は深呼吸した。

「よし。」

『時奏』のケースをそっとなでる。

「一緒に行こう。」

ボォ……

小さくG線が震えた。

「ありがとう。」

長い廊下を歩く。

庭には美しい松。

池には鯉が泳ぐ。

障子越しに差し込む朝日。

静寂の中を、一步ずつ進んでいく。

やがて、一番奥の広間へ着いた。

「こちらでございます。」

襖の前で足が止まる。

信綱が静かに言った。

「茜殿。」

「はい。」

「ここから先が、将軍の間です。」

私はゆっくりうなずいた。

「はい。」

「ですが。」

信綱は微笑む。

「いつもの茜殿で。」

私は笑顔になった。

「分かりました。」

その瞬間――

静かに襖が開いた。

部屋の最奥には、一人の武将が座している。

天下を治める男。

徳川三代将軍、

徳川家光。

家光は静かに茜を見つめる。

そして、その第一声は、誰も予想しなかった言葉だった。

「……長旅であったな。」

その一言には、将軍の威厳よりも、一人の人間として旅人をねぎらう優しさが込められていた。

私は思わず微笑み、深く頭を下げた。

「得川茜と申します。」

「本日は、お招きいただき、ありがとうございます。」

江戸城の空気が静かに動き始める。

歴史を変える対話が、今、始まろうとしていた。

第十九章 将軍家光との対面

江戸城・大広間。

静寂が流れていた。

広い畳敷きの間には、老中、旗本、大目付など、将軍家を支える重臣たちが居並ぶ。

誰も言葉を発しない。

視線は、一人の若い女性へ集まっていた。

ダメージジーンズ。

革のブーツ。

背には大きなチェロケース。

天下の将軍に謁見する姿としては、あまりにも異質だった。

だが、その表情には少しの怯えもない。

ただ、穏やかな笑顔だけがあった。

「面を上げよ。」

将軍・徳川家光が静かに告げた。

私はゆっくり顔を上げる。

家光は私をじっと見つめていた。

思っていたより若い。

そして、思っていたより優しい目をしている。

「そなたが得川茜か。」

「はい。」

「得川茜と申します。」

「遠路、ご苦労であった。」

「ありがとうございます。」

そのやり取りだけで、広間の空気が少し柔らかくなった。

家光は信綱へ目を向けた。

「信綱。」

「はっ。」

「町での話は、すべて真か。」

「一つの偽りもございません。」

「民は、この娘を慕っております。」

「歌を聴けば分かります。」

家光は静かに頷く。

「そうか。」

その時、一人の老臣が前へ進み出た。

「上様。」

「申せ。」

「恐れながら。」

「この娘が得川家の末裔であるという証。」

「まだ江戸では確認できておりませぬ。」

広間に緊張が走る。

家光は静かに老臣を見る。

「だからこそ。」

「今日、会った。」

「だが。」

老臣はさらに続けた。

「証がないまま厚遇することは、天下へ示しがつきませぬ。」

私は黙って聞いていた。

信綱が何か言おうとした、その時。

私は一歩前へ出る。

「上様。」

家光が頷く。

「申してみよ。」

「私は、得川の名を認めていただくために参ったのではありません。」

老臣が眉をひそめる。

私は続けた。

「私は、人に会うために旅をしています。」

「城主様にも。」

「農民の皆さんにも。」

「商人の皆さんにも。」

「歴史は、人が生きた証だからです。」

広間は静まり返った。

家光は興味深そうに尋ねた。

「では。」

「なぜ余に会いたいと思った。」

私は少し笑った。

「歴史の本には。」

「将軍が何をしたかは書いてあります。」

「でも。」

「何を見て。」

「何を感じ。」

「どんな願いで国を治めたのか。」

「それは書いてありません。」

「私は、それを知りたかったんです。」

家光は思わず笑みを浮かべた。

「面白い。」

「余を将軍としてではなく。」

「一人の人として見ておるのか。」

「はい。」

私はまっすぐ答えた。

「人を知れば、歴史はもっと好きになります。」

広間にいた重臣たちは顔を見合わせた。

こんな受け答えをする者は見たことがない。

恐れてもいない。

媚びてもいない。

ただ素直だった。

信綱は小さく微笑んでいる。

「これが茜殿です。」

家光は静かに頷いた。

「信綱。」

「なるほど。」

「書状の意味が分かった。」

「茜。」

突然、家光は呼び捨てにした。

私は驚く。

「はい。」

「その楽器。」

「『時奏』と申します。」

「名も美しい。」

「その音を、余にも聴かせてくれるか。」

私は深く一礼した。

「喜んで。」

広間の中央へ進む。

静かにチェロケースを置く。

留め金へ手を掛ける。

カチリ。

その瞬間。

蓋の裏側で、小さく三つ葉葵が輝いた。

家光は、その光を見逃さなかった。

（やはり……。）

しかし何も言わない。

私は『時奏』を取り出す。

ゆっくりエンドピンを伸ばす。

弓を構える。

最初の一音。

G線。

ボオオオ……

低く、深く、広間いっぱいに響く。

その音は江戸城の太い梁を震わせ、庭の松を揺らし、池の水面にまで静かな波紋を広げていくようだった。

私は目を閉じ、歌い始める。

♪

人は生まれて 名を授かり

人に出会って 道を知る

偉き人にも 幼き日あり

涙を拭いた 母がいる

国を治める その前に

一人の人で ありますよう

笑顔が未来へ 続くよう

今日も歴史は 歩いてる

♪

歌が終わる。

誰一人、声を出さない。

静寂だけが流れる。

やがて。

家光は静かに目を開いた。

その頬には、一筋の涙が伝っていた。

「……母上。」

誰にも聞こえないほど小さな声だった。

幼い頃、病床で手を握ってくれた母・お江の方との記憶が、鮮やかによみがえ

っていたのである。
家光は涙をぬぐい、ゆっくりと立ち上がる。
そして広間中が息を呑む中、茜へ向かって静かに頭を下げた。
「ありがとう。」
天下人が、一人の吟遊詩人へ贈った、心からの感謝だった。
その瞬間、広間にいた誰もが理解した。
この出会いは偶然ではない。
歴史が、この二人を引き合わせたのだと――。

第二十章 得川の姫

江戸城・大広間。
将軍・徳川家光が静かに頭を下げたまま、しばらく動かなかった。
重臣たちは息を呑む。
天下の将軍が、一人の旅の吟遊詩人へ礼を尽くしている。
誰も見たことのない光景だった。
私は慌てて立ち上がる。
「上様、おやめください！」
家光はゆっくり顔を上げる。
「礼を言うべきは余である。」
「そなたの音は、余に大切なものを思い出させてくれた。」
「……。」
「母上の笑顔を。」
私は静かに頭を下げた。
「それは、上様ご自身の心の中にあった思い出です。」
「私は、その扉を少し開いただけです。」
家光は微笑んだ。
「信綱の申したとおりであった。」
「人を惑わすのではない。」
「人の心を照らす娘か。」

その時、一人の老臣が静かに進み出た。
「上様。」
「申せ。」
「海老蔵より運ばれた古文書、すべて調べ終わりました。」
広間の空気が再び張り詰める。

老臣は慎重に巻物を広げた。

「花押。」

「紙質。」

「墨。」

「年代。」

「いずれも矛盾はございませぬ。」

家光は静かに頷く。

「続けよ。」

「島村家伝来の記録とも一致いたしました。」

「得川の名は実在しております。」

「さらに。」

老臣はもう一枚の古文書を広げた。

そこには古い系図が描かれていた。

「こちらは江戸城紅葉山文庫に保管されていた古記録。」

「家康公以前の控えにございます。」

信綱が思わず身を乗り出す。

「見つかったのか。」

「はい。」

老臣は深くうなずく。

「得川の名が、確かに記されております。」

広間がざわめく。

「本当に……。」

「存在したのか。」

家光は静かに立ち上がった。

「茜。」

「はい。」

「そなたは、そのことを知っておったか。」

私は首を横に振る。

「詳しくは知りません。」

「祖父から。」

「『人を大切にきなさい』とだけ教えられて育ちました。」

「得川の名を誇りに思え、と言われたことはありません。」

「……。」

「だから私は。」

私は笑顔で続ける。

「得川の姫よりも。」

「吟遊詩人でいたいんです。」

重臣たちは驚いた。

名誉でも。

地位でも。

権力でもない。

この娘が望むのは、人と出会い、歴史を書くことだけだった。

家光は静かに笑った。

「信綱。」

「はっ。」

「この娘が人気者である理由が、ようやく分かった。」

信綱も微笑む。

「私も最初は驚きました。」

「ですが今は納得しております。」

「身分を持たぬから、人は心を開くのです。」

家光は広間を見渡した。

「皆の者。」

重臣たちが一斉にひざまずく。

「ははっ。」

「今日、この場で申し渡す。」

静寂。

「得川茜。」

「はい。」

「そなたは今後、得川家ゆかりの姫として、将軍家が保護する。」

広間がどよめく。

「しかし。」

家光は穏やかに続けた。

「城へ閉じ込めるつもりはない。」

私は顔を上げる。

「え？」

「旅を続けよ。」

「歴史を書き続けよ。」

「人々の笑顔を守り続けよ。」

「それこそが、そなたの役目である。」

私は胸が熱くなった。

「ありがとうございます。」

「上様。」

さらに家光は信綱へ向き直る。

「信綱。」

「はっ。」

「茜には自由に旅をさせる。」

「ただし。」

「行く先々の諸藩へ書状を送る。」

信綱はすぐに意図を理解した。

「無礼がないように、でございますな。」

「そうだ。」

家光は笑った。

「また牢へ入れられては困る。」

広間に笑いが広がる。

私も思わず笑ってしまった。

「それは困ります。」

「三日間は長かったです。」

信綱まで吹き出した。

「確かに。」

「忍藩の失態であった。」

その日の夕刻。

江戸城本丸から一通の御書付が全国へ向けて作られ始めた。

そこにはこう記されていた。

＞ **得川茜は、将軍家保護の客人である。**

＞ **諸国を巡り、人々の暮らしを書き残すことを許す。**

＞ **各藩は便宜を図り、その旅を助けるべし。**

その書状は、やがて日本中の街道を駆け巡ることになる。

そして茜はまだ知らない。

最初の行き先として家光が選んだ地が、かつて徳川家康もたびたび訪れた、歴史ある城下町——**行田・忍藩**ではなく、その先の新たな歴史舞台であることを。

新しい歴史散歩が、再び始まろうとしていた。

第二十一章 将軍家の姫君

江戸城・白書院。

朝の柔らかな陽光が障子越しに差し込んでいた。

昨日までとは違い、今日は重苦しい空気はない。

将軍・徳川家光は穏やかな表情で庭を眺めていた。

「茜。」

「はい、上様。」

「今日は少し城内を歩かぬか。」

「えっ？」

私は思わず信綱を見る。

信綱は微笑みながら頷いた。

「上様自らご案内くださるそうです。」

「そんな……。」

私は恐縮して頭を下げた。

「恐れ多いです。」

家光は笑う。

「将軍としてではない。」

「一人の案内役として歩こう。」

庭園へ出る。

池には大きな錦鯉。

手入れの行き届いた松。

石灯籠。

どこを見ても美しい。

「すごい……。」

私は思わず取材ノートを取り出した。

「池の配置は……。」

「橋の角度は……。」

「松の枝ぶりが……。」

家光が吹き出した。

「ははは。」

「本当に書くのだな。」

「はい。」

「忘れたくないので。」

信綱も笑う。

「昨日も同じことをしておりました。」

「見るもの全てが取材です。」

家光は感心したように頷く。

「これが吟遊詩人か。」

歩いていると、一人の女中が静かに近づいてきた。

「上様。」

「何だ。」

「御台所様より。」

「姫君に、お召し物をお届けしたいとのことにございます。」

私は慌てた。

「え？」

「私ですか？」

「はい。」

「将軍家の客人として。」

ほどなくして運ばれてきたのは、美しい桐箱だった。

開けると、中には淡い水色の小袖。

銀糸で桜が刺繍されている。

思わず息を呑む。

「きれい……。」

家光は静かに言う。

「受け取ってくれ。」

「城では、その姿も見てみたい。」

私は困った顔で笑う。

「でも。」

「町へ戻ったらジーンズですよ？」

信綱が吹き出した。

「やはりそうなりますか。」

「歩きやすいので。」

家光は声を立てて笑った。

「好きにするとよい。」

「余は、その方が茜らしいと思う。」

その日の午後。

江戸城では小さな茶会が開かれた。

招かれたのは、ごく限られた重臣たちだけ。

茜も華やかな水色小袖の姫様衣装で末席へ座る。

さすが得川の姫であると注目の的になる。

一人の老臣が静かに尋ねた。

「茜殿。」

「はい。」

「今後は江戸城へ住まわれますかな。」

私は首を横に振った。

「いいえ。」

「私は旅を続けます。」

「なぜです。」

「歴史は城だけにあるものではありません。」

「村にも。」

「宿場にも。」

「畑にも。」

「子どもたちの笑顔にもあります。」

「私は、それを書き残したいんです。」

老臣は静かに目を閉じた。

「見事なお考えです。」

その時、家光が静かに口を開いた。

「皆の者。」

「はっ。」

「余は決めた。」

広間が静まり返る。

「茜には、將軍家の御紋入り通行手形を授ける。」

重臣たちがざわめく。

「御紋入り……。」

「まさか。」

家光は続けた。

「この手形を持つ者は、日本全国どこの関所でも通ることができる。」

「宿場では宿を提供せよ。」

「諸藩は安全を守れ。」

「これは余の命である。」

信綱は深く頭を下げた。

「ありがたき幸せ。」

私は驚いたまま立ち尽くしていた。

「上様。」

「そんな大切なもの……。」

家光は穏やかに微笑む。

「旅は一人ではできぬ。」

「余も少し手伝うだけだ。」

私は胸が熱くなった。

「ありがとうございます。」

その夜。

江戸城の一室で、信綱と茜は旅の地図を広げていた。

「さて。」

信綱が地図を指さす。

「次はどこへ参りましょう。」

私は目を輝かせる。

「行ってみたい場所が、たくさんあります。」

「ですが。」

「上様。」

「お願いがあります。」

家光は微笑む。

「何だ。」

「私は、有名な場所だけではなく。」

「誰も知らない歴史も歩きたいんです。」

「名もない人たちの歴史も。」

「未来へ残したい。」

家光は静かに頷いた。

「その志こそ、本物である。」

そして地図の一点を指さした。

「ならば、まずここへ参れ。」

信綱も地図をのぞき込む。

「……なるほど。」

「そこですか。」

私は地名を見て目を丸くした。

「日光輪王寺」

しかし、そこには、茜と『時奏』の秘密が眠っていた。

私は『時奏』をそっと抱きしめる。

「また新しい歴史散歩ですね。」

チェロは小さくG線を震わせた。

ボォ……

まるで「さあ、行こう」と語りかけるように。

こうして、得川茜の新たな旅が始まる。

将軍家の姫君でありながら、誰よりも庶民の近くを歩く吟遊詩人として――。

第二十二章 日光御成道への旅立ち

江戸城で一夜を過ごした翌朝。

私は白書院の縁側に座り、庭を眺めていた。

池には朝日が映り、鯉が静かに泳いでいる。

『時奏』を膝に置き、そっと弦をなでる。

「今日から、また旅だね。」

ボォ……

G線が小さく震えた。

まるで「準備はできている」と返事をするようだった。

「茜。」

後ろから穏やかな声が聞こえた。

振り向くと、将軍・徳川家光が立っていた。

「上様、おはようございます。」

「よく眠れたか。」

「はい。」

家光は庭へ目を向ける。

「昨日申した旅の続きを話そう。」

「はい。」

信綱も静かに加わる。

家光は広げられた地図の一点を指さした。

「ここだ。」

私は身を乗り出した。

「本郷追分……。」

「そして、その先の日光御成道。」

信綱が頷く。

「将軍家が日光東照宮へ参詣するための道。」

「まだ多くの者には知られておりません。」

家光は静かに続ける。

「日光街道ほど賑わってはおらぬ。」

「だが。」

「将軍家にとって極めて大切な道だ。」

私は地図を見つめた。

「宿場町が並んでいますね。」

「岩槻。」

「大門。」

「鳩ヶ谷。」

「川口……。」

信綱は笑った。

「全部歩くつもりかな。」

「もちろんです。」

私は即答した。

「宿場には必ず物語があります。」

「名前が残らなくても。」

「そこに生きた人がいます。」

家光は満足そうに頷いた。

「だから、そなたに任せたい。」

その時、一人の側近が桐箱を運んできた。

「上様。」

「例の品にございます。」

箱が開く。

中には美しい漆塗りの木箱。

その中に納められていたのは、一枚の木札だった。

表には三つ葉葵。

裏には金文字で、

『将軍家御用 得川茜』

と刻まれている。

私は驚いて目を見開いた。

「これは……。」

家光は木札を手に取り、私へ差し出した。

「旅の証だ。」

「関所では、これを示せ。」

「諸藩は、そなたを将軍家の客人として迎える。」

私は恐る恐る受け取った。

「ありがとうございます。」

「でも……。」

少し困ったように笑う。

「これを見せたら、皆さん緊張しませんか？」

家光は声を立てて笑った。

「その時は。」

「茜らしく笑えばよい。」

信綱も笑う。

「その笑顔で、皆安心します。」

出立の時刻。

江戸城大手門には、信綱以下二十騎の護衛が並んでいた。

「今回は余も同行しよう。」

信綱が言う。

「ありがとうございます。」

「日光御成道は、将軍家にとって特別な道。」

「家光公の日光社参に備えて安全を確認したい。」

私は深く頭を下げた。

門が開く。

江戸の町へ出ると、人々が一斉に振り返った。

「あれは信綱様。」

「松平信綱様の行列だ。」

「後ろの娘は誰だ？」

私はいつものジーンズ姿。

背中には『時奏』。

その姿は、豪華な武士たちの中でひととき目立っていた。

子どもが小さく手を振る。

私は笑顔で振り返す。

「おはよう！」

その一言だけで、周囲に笑顔が広がる。

信綱は馬上からその様子を見つめ、小さく微笑んだ。

「やはり。」

「茜殿は、どこへ行っても茜殿だ。」

本郷追分。

ここから日光御成道が始まる。
私は静かに立ち止まった。
街道を見つめる。
まっすぐ北へ伸びる一本の道。
その先には、まだ出会ったことのない町。
まだ知らない人々。
まだ語られていない歴史が待っている。
私は『時奏』を取り出した。
「旅立ちの一曲です。」
信綱も護衛たちも静かに見守る。
G線が低く響く。
ボォォォ……
私は空を見上げ、歌い始めた。

♪
道は未来へ 続いてる
名もない町へ 続いてる
歩く足あと 一つずつ
誰かの明日を 照らしてる
笑顔を歌に 歴史にして
今日も私は 旅に出る
♪
歌が終わると、街道を歩く旅人たちが静かに頭を下げた。

第二十三章 本郷追分、旅立ちの朝

江戸城を後にした一行は、本郷追分までゆっくりと歩みを進めていた。
ここから北へ延びる一本の道。
日光御成道。
「ここが始まりなのですね。」
私は街道の先を見つめた。
信綱が頷く。
「ここから岩槻、粕壁、杉戸、幸手を経て栗橋へ至る。」
「将軍家にとって大切な道だ。」
私は静かに取材ノートを開いた。
『日光御成道旅の始まり。』
一行は歩き始める。
道端では農夫が畑を耕し、

旅人が荷を担ぎ、
子どもたちが元気に走り回っている。

「こんにちは！」

私が笑顔で声を掛けると、
子どもたちも笑顔で手を振った。

「こんにちは！」

信綱は横で微笑んでいる。

「もう町の者は茜殿を恐れぬな。」

「笑ってくれると嬉しいです。」

昼過ぎ。

街道脇の松林。

護衛が休憩の準備をしている頃だった。

信綱の視線が鋭くなる。

「……誰かいる。」

護衛たちが一斉に刀へ手を掛けた。

松林の奥。

木々の間に黒い影が揺れる。

一人。

二人。

三人。

「出てこい。」

信綱が低く言う。

影は動かない。

やがて一人の浪人風の男が姿を現した。

「松平信綱。」

「久しいな。」

信綱の表情が変わる。

「……何者だ。」

男は答えない。

ただ茜だけを見つめている。

「その娘。」

「得川の姫か。」

私は静かに前へ出た。

「私に何か。」

男はゆっくり刀へ手を掛けた。

「日光へ行かれては困る。」
空気が一変する。
護衛たちが茜を囲む。
「何を知っている。」
信綱が問い掛ける。
男は不気味に笑った。
「日光には。」
「まだ誰にも知られてはならぬ秘密が眠っている。」
「得川の姫がそこへ辿り着けば……。」
男は言葉を切る。
「困る者が大勢いる。」
「誰だ。」
「何者の命だ。」
信綱が踏み込む。
しかし男は笑うだけだった。
「それを教えるわけにはいかぬ。」
その瞬間。
シュツ。
松林から矢が飛ぶ。
「殿！」
護衛が信綱をかばう。
さらに三本。
四本。
浪人たちが一斉に斬りかかってきた。
「茜殿をお守りしろ！」
刀と刀が激しくぶつかる。
私は思わず『時奏』を抱き締めた。
（また……。）
（人が傷付く。）
胸が締め付けられる。
その時だった。
無意識に右手がG線へ触れる。
ボオオオ……
低い音が松林いっぱいに響いた。
風が止まる。
鳥が羽ばたきを止める。

浪人たちの動きが、一瞬だけ止まった。
一人の浪人が刀を落とす。
「母……。」
もう一人は膝をついた。
「親父……。」
幼い日の記憶。
家族と笑っていた日々。
失いたくなかった時間。
誰もが忘れていた記憶が胸にあふれ出す。
刀が一本、また一本と地面へ落ちていく。
私は涙を浮かべながら静かに言った。
「お願いします。」
「もう誰も傷付けしないでください。」
「日光へ向かう理由は、争うためではありません。」
「人の歴史を未来へ残したいだけです。」
浪人たちはうつむいたまま動かない。
やがて最初に現れた男が小さくつぶやいた。
「……すまなかった。」
そう言い残し、仲間たちとともに松林の奥へ姿を消していった。
静けさが戻る。
信綱は茜の前まで歩み寄る。
「茜殿。」
私は顔を上げた。
信綱は静かに微笑む。
「あなたは刀で勝ったのではない。」
「人の心を取り戻した。」
「それが、あなたの強さです。」
私は『時奏』をそっと抱き寄せた。
遠く北の空を見つめる。
その先には、日光御成道。
そして、まだ誰も知らない歴史が待っていた。

第二十四章 鳩ヶ谷宿 鋳物師の町

翌朝。
松林での出来事が夢だったかのように、日光御成道には穏やかな朝が訪れていた。

小鳥のさえずり。
朝露に濡れる草花。
遠くでは百姓たちが鍬を振るっている。
私は『時奏』を背負い、ゆっくり歩いていた。

「信綱様。」

「何かな。」

「昨日の方たち……。」

「心配しておりますか。」

私は静かに頷く。

「悪い人には見えませんでした。」

信綱も頷いた。

「ああ。」

「剣の腕は立っていた。」

「だが、本当の悪人の目ではなかった。」

「誰かに命じられている。」

「余もそう思う。」

私は空を見上げた。

（日光には何があるんだろう。）

その答えは、まだ分からなかった。つぎ

昼頃。

一行は鳩ヶ谷宿へ入った。

町へ一歩足を踏み入れると、

カン……

カン……

カン……

軽やかな金属音が聞こえてくる。

私は思わず立ち止まった。

「この音……。」

信綱が笑う。

「鳩ヶ谷宿は鋳物師の町。」

「鋳物？」

「鍋や釜。」

「鐘や灯籠。」

「様々な鋳物を作る職人が暮らしている。」

私は目を輝かせた。

「見てみたいです！」

職人町へ入ると、
大きな炉が赤く燃えていた。
鉄が溶け、
鋳型へ流し込まれていく。
職人たちは汗だくになりながら働いている。

「すごい……。」

私は夢中で見つめた。

「こんにちは！」

一人の親方が笑った。

「旅のお嬢さんか。」

「はい。」

「歴史を書いて歩いています。」

「ほう。」

「変わった旅だ。」

親方は豪快に笑う。

私は取材帳を広げる。
「毎日、どのくらい鉄を使うんですか。」
「この鐘は何日でできますか。」
「弟子は何人いるんですか。」

質問が止まらない。

信綱は苦笑している。

「始まったな。」

護衛たちも笑った。

「茜様は、こうなると止まりません。」

--

親方は鋳型を見せてくれた。

「これが秘密だ。」

私は目を丸くする。

「砂なんですね。」

「そうだ。」

「型が命。」

私は夢中で書き留めていく。

すると親方が尋ねた。

「嬢さんは何を作る人なんだ。」
私は『時奏』を見せた。
「私は歌を作ります。」
「歌？」
「町を歩いて。」
「皆さんのお話を聞いて。」
「その日の歌を作ります。」
親方は豪快に笑った。
「面白い！」
「なら今日は鳩ヶ谷の歌だ！」
周囲の職人たちも仕事の手を止める。
「聴きたい！」
「ぜひ！」

私は町の真ん中へ歩いた。
炉の熱。
鉄の匂い。
職人たちの笑顔。
全部を胸へしまう。
『時奏』を静かに構えた。
G線が響く。
ボオオオ……
町中の金槌の音が止まる。
私は歌い始めた。
♪
炎の中に 夢がある
鉄を打つ手に 明日がある
熱き心で 形づくるは
人を想う 優しさよ
鍋も釜も 鐘の音も
誰かの暮らしを 守ってる
名もない職人 その汗こそ
歴史に光る 宝もの
♪
歌が終わると、
親方は静かに目頭を押さえた。

「親父を思い出した。」

「俺に初めて金槌を握らせてくれた日を……。」

若い弟子も涙を流している。

「師匠。」

「俺、もっと頑張ります。」

町の人々が笑顔になる。

その光景を見て、信綱は小さくつぶやいた。

「また町が一つ変わった。」

夕方。

宿へ戻ろうとした時だった。

宿場の入口で、一人の旅僧が一行を待っていた。

年の頃は六十を過ぎている。

しかし背筋は真っすぐだった。

旅僧は茜を見るなり、静かに合掌する。

「ようやく、お会いできました。」

私は首をかしげる。

「私をご存じですか。」

旅僧は穏やかに微笑んだ。

「あなた様ではありません。」

「そのチェロです。」

私は思わず『時奏』を抱き寄せた。

「時奏をご存じなんですか？」

旅僧はゆっくりとうなずく。

「五十年前……。」

「いや。」

「もっと昔から伝わる話があります。」

信綱の表情が引き締まる。

「どのような話だ。」

旅僧は北の空を見上げた。

「日光へ向かう前に、一つだけ申し上げます。」

「その楽器には、人を癒やす力だけではありません。」

「まだ眠っている力があります。」

風が静かに吹き抜ける。

私は『時奏』を見つめた。

（まだ……知らない力？）

その答えは、日光御成道の先に待っている。
旅は、ますます深い歴史の中へと歩み始めていた。

第二十五章 大門宿 旅僧が語る「時奏」の由来

翌朝――。

鳩ヶ谷宿を発った一行は、旅僧も加わって日光御成道を北へ歩いていた。
旅僧は名を**空然**と名乗った。

「空然様は、どちらのお寺の方なのですか。」

私が尋ねると、旅僧は静かに笑った。

「寺を持たぬ僧です。」

「諸国を巡り、人の心を訪ね歩いております。」

「私と同じですね。」

「ええ。」

「違うのは、私は仏の教えを。」

「あなたは歴史を伝えていることです。」

信綱が二人を見比べて微笑む。

「似た者同士だな。」

街道は松並木が続いていた。

春の風が葉を揺らし、

木漏れ日が街道へ降り注ぐ。

私は取材帳へ書き込む。

『日光御成道。

歩く人は違っても、

四百年後の未来も、この風は吹いている。』

ふと信綱が覗き込んだ。

「未来でも、この街道は残っているのか。」

私は思わず口を押えた。

しまった。

未来という言葉を使ってしまった。

「えっと……。」

空然が静かに笑う。

「未来を夢見る旅人。」

「それで良いではありませんか。」

信綱も笑った。

「確かに。」

私はほっと胸をなで下ろした。

昼前。

一行は**大門宿**へ到着した。

鳩ヶ谷ほど大きな宿ではない。

しかし街道を行き交う旅人で賑わっている。

宿場の中央には井戸。

馬つなぎ。

旅籠。

小さな茶屋。

「静かな宿ですね。」

信綱が頷く。

「この宿は旅人を休ませる宿。」

「派手さはない。」

「だが街道には欠かせぬ場所だ。」

私は静かに町を見回した。

「こういう宿が好きです。」

「どうして。」

「人の暮らしが見えるから。」

茶屋へ入る。

年配の夫婦が営む小さな店だった。

「いらっしゃい。」

「旅のお方ですか。」

「はい。」

「お団子を三本ください。」

おばあさんが笑った。

「四本にしておくれ。」

「一つは、おまけ。」

「ありがとうございます。」

私は嬉しそうに受け取る。

その様子を見ていた信綱が笑う。

「茜殿は、どこでも人に好かれる。」

「皆さんが優しいからです。」

空然は静かにお茶を飲んでいた。

「茜殿。」

「はい。」

「昨日申し上げた続きを。」

私は姿勢を正した。

『時奏』をそっと抱える。

空然はゆっくり語り始めた。

「その楽器は。」

「一本の木から作られたものではありません。」

私は目を丸くする。

「え？」

「四本の木です。」

「四本？」

「春。」

「夏。」

「秋。」

「冬。」

「四季を見続けた木が一つになり、生まれたと伝えられています。」

私は静かに『時奏』へ触れた。

「だから、こんなに温かい音なんだ……。」

空然は頷く。

「さらに。」

「その木は。」

「人の涙を数え続けた木とも伝わっています。」

信綱も興味深そうに聞いている。

「そのような話は初めて聞く。」

空然は微笑む。

「伝説です。」

「真実かどうかは分かりません。」

「ですが。」

「その楽器は。」

「悲しみを消すものではありません。」

「悲しみを受け止める力を持っています。」

私は静かにうなずいた。

「だから皆さん。」

「昔を思い出して涙を流すんですね。」

「そうです。」

その時だった。

茶屋の外が急に騒がしくなった。

「逃げろ！」

「暴れ馬だ！」

一頭の馬が手綱を切って街道を走ってくる。

旅人たちは慌てて道を開けた。

小さな男の子が、

道の真ん中で立ち尽くしている。

「危ない！」

母親の悲鳴。

私は考えるより先に走っていた。

「茜殿！」

信綱の声が聞こえる。

私は男の子を抱き寄せた。

だが、

暴れ馬はすぐ目の前まで迫っていた。

その瞬間――

ボオオオ……

『時奏』のG線が、

誰も触れていないのに静かに響いた。

馬の耳がぴくりと動く。

荒れていた呼吸が少しずつ落ち着いていく。

馬は茜の目の前で立ち止まり、

静かに首を垂れた。

宿場中が息を呑む。

「馬が……。」

「止まった。」

空然は静かに目を閉じた。

「やはり。」

「時奏は、人だけではありません。」

「生きものの心にも届くのです。」

私は男の子を母親へ返した。

母親は涙を流しながら何度も頭を下げる。

「ありがとうございました。」

私は笑顔で首を振った。

「助かってよかった。」

信綱は『時奏』を見つめながら、小さくつぶやいた。

「まだ眠っている力。」

「それは、このことだったのか……。」

空然は静かに首を横へ振る。

「いいえ。」

「これは、ほんの始まりです。」

その言葉に、一同は静まり返った。

『時奏』には、まだ誰も知らない秘密が残されている。

そして、その秘密は——

日光へ近づくほど、少しずつ姿を現していくのであった。

第二十六章 岩槻宿 城下町に響く調べ

翌朝——。

大門宿を発った一行は、街道を北へ歩いていた。

日光御成道は緩やかに続き、遠くには武蔵野の広い田園風景が広がっている。

「あれをご覧ください。」

信綱が前方を指さした。

私は目を細める。

青空の向こうに、白い櫓が小さく見えていた。

「あれが……。」

「岩槻城です。」

私は思わず足を止めた。

「ついに城下町ですね。」

城へ近づくにつれ、町は活気を増していく。

呉服屋。

桶屋。

酒屋。

味噌屋。

荷車が行き交い、人々の笑い声が絶えない。

「大きな町ですね。」

「岩槻は城下町だからな。」

信綱が説明する。

「城を支える武士だけでなく、多くの職人や商人が暮らしている。」

私は夢中で取材帳へ書き込んでいく。

『城が町を育て、
町が城を支える。』

一行が宿場へ入ると、人々がざわめき始めた。

「あれは松平信綱様。」

「将軍家のお使いか。」

「後ろの娘は誰だ。」

すると、一人の旅人が声を上げた。

「あっ！」

「鳩ヶ谷で歌っていた人だ！」

「歌姫だ！」

その声は瞬く間に町中へ広がっていった。

「歌を聴きたい！」

「お願いだ！」

「一曲だけ！」

私は困って信綱様を見る。

信綱様は笑ってうなずいた。

「今日の予定を少し変えよう。」

「岩槻の皆にも聴かせてあげなさい。」

町の広場。

たちまち大勢の人々が集まった。

武士も。

商人も。

子どもも。

農家の人も。

私は静かに『時奏』を取り出した。

G線が響く。

ポオオオ……

町の喧騒が少しずつ静まっていく。

私は岩槻の町を見渡した。

城を見上げる人。

店を守る人。

家族を支える人。

その姿を胸へ刻み、歌い始める。

♪

城が見守る この町で

人は笑って 今日を生きる

売る人 買う人 歩く人

みんな歴史の 主人公

名は残らずとも その暮らし

明日へ続く 宝もの

♪

歌が終わると、広場には静かな拍手が広がった。

一人の武士が目を潤ませている。

「戦ばかりが武士ではない……。」

「家族を守ることも武士の務めか。」

隣にいた若い足軽もうなずいた。

「父を思い出しました。」

その時だった。

城から数人の武士がやって来た。

「失礼いたす。」

人々が道を開ける。

先頭にいた年配の家老が信綱へ深く一礼した。

「松平伊豆守様。」

「岩槻城主より、お迎えに参りました。」

信綱も礼を返す。

「かたじけない。」

家老は私へ向き直る。

「得川茜様。」

「城主様が、ぜひ一曲お聴きしたいと申されております。」

私は少し驚いた。

「私が……お城でですか。」

「はい。」

「将軍家より御書付も届いております。」

私は信綱を見た。

信綱は穏やかに笑う。

「茜殿。」

「将軍家の旅は、もう始まっている。」

「各地で人々とのご縁を結ぶことも、その役目です。」

私は静かにうなずいた。

「分かりました。」

その夜。

岩槻城では、小さな演奏会が開かれた。

豪華な宴ではない。

城主と家族、家臣たちだけの静かな席だった。

演奏が終わると、城主は深く頭を下げた。

「茜殿。」

「はい。」

「今日、家臣たちの表情が変わった。」

「え？」

「皆、民の暮らしをもっと見ようと話しておる。」

「あなたの歌が、城の空気を変えた。」

私は照れくさそうに笑う。

「私は、皆さんのお話を歌にただけです。」

城主は穏やかに答えた。

「だからこそ、人の心へ届くのです。」

その夜遅く。

城の外れ。

月明かりの下で、一人の黒装束の男が岩槻城を見上げていた。

「また……。」

「間に合わなかったか。」

男は静かに拳を握る。

「得川の姫は、確実に北へ向かっている。」

「次は……。」

「粕壁宿か。」

男は闇へ溶けるように姿を消した。

その影を、誰も見る者はいなかった。

しかし、その足音は確実に茜たちを追っていた。

そして次の舞台は、広大な田園と古い河川に囲まれた宿場町——**粕壁宿**。

そこには、後の世に「春日部」と呼ばれる町の始まりが静かに息づいていた。

第二十七章 粕壁宿 人が行き交う宿場町

翌朝――。

岩槻城をあとにした一行は、再び日光御成道を北へ進んでいた。

田園には稲が風に揺れ、小川には澄んだ水が流れている。

遠くでは雲雀がさえずり、のどかな景色が続いていた。

私は何度も足を止めては景色を眺める。

「どうしました。」

信綱が微笑みながら尋ねた。

「この風景を覚えておきたいんです。」

「未来では……。」

言いかけて、私は口を押さえた。

また「未来」と言ってしまった。

信綱は苦笑する。

「茜殿は時々、不思議なことを申される。」

私は照れ笑いした。

「旅人の独り言です。」

昼過ぎ。

前方に大きな宿場町が見えてきた。

旅籠が軒を連ね、

荷馬車が何台も行き交い、

旅人たちの声が響いている。

「着きました。」

信綱が静かに言った。

「粕壁宿です。」

私は目を輝かせた。

「ここが粕壁宿……。」

「江戸からも近く、奥州や日光へ向かう旅人で賑わう宿場だ。」

私は取材帳へ書き込む。

『人が町をつくる。

旅人が宿場を育てる。』

宿場へ入ると、

魚を売る声。

味噌の香り。

焼き団子の匂い。
町全体が活気に満ちていた。
「いらっしゃい！」
「今朝採れた野菜だよ！」
「団子はいかが！」
私は目を輝かせる。
「全部見たい！」
信綱は笑った。
「今日は宿場をゆっくり歩こう。」

市場を歩いていると、
一軒の古い団子屋が目に入った。
店先では白髪のおばあさんが団子を焼いている。
「こんにちは。」
私が声を掛けると、
おばあさんは顔を上げた。
「あら。」
「きれいなお嬢さん。」
「旅のお方かい。」
「はい。」
「歴史を書いて歩いています。」
おばあさんは目を細めた。
「歴史かい。」
「それなら、この宿場の一番の宝も書いておくれ。」
「宝？」
「旅人同士が助け合う心さ。」
私は静かにうなずいた。
「はい。」
「それを書きます。」

すると突然、
宿場の入口が騒がしくなった。
「道を開けろ！」
荷車が横転している。
積んでいた米俵が道いっぱいに散らばった。
老人が一人、困り果てて座り込んでいる。

私は駆け寄った。
「大丈夫ですか。」
「すまん……。」
「車輪が折れてしまって。」
信綱も護衛たちへ命じた。
「手伝え。」
「はっ。」
武士たちが米俵を運び始める。
町の人たちも次々に集まってきた。
「俺も持つ。」
「こっちは任せろ。」
「あっという間に片付けよう。」
誰一人、見返りを求めない。
私はその光景を見つめていた。
（これが宿場なんだ。）
（みんな家族みたい……。）

荷車が直る頃には、
日は少し傾き始めていた。
老人は深く頭を下げる。
「助かりました。」
「これで明日の市に間に合います。」
私は笑顔で答えた。
「私一人ではありません。」
「皆さんが助けてくださったんです。」
宿場の人々も笑っている。
「困った時はお互い様。」
「それが宿場だからな。」

その言葉を聞いた私は、
静かに『時奏』を取り出した。
「皆さん。」
「今日は、この宿場へお礼の歌を歌わせてください。」
町の人々が自然と集まってくる。
信綱も腕を組みながら静かに見守る。
G線が低く響いた。

ボオオオ……

宿場の喧騒が静まる。

私は目を閉じて歌い始めた。

♪

旅の荷物は 重くても

支える手があれば 歩ける

知らない人も 笑い合えば

今日からみんな 旅の友

宿場の灯りは 人の灯り

優しさつないで 道になる

♪

歌が終わると、

市場には温かな拍手が広がった。

団子屋のおばあさんが涙をぬぐう。

「長く生きてきたけれど。」

「こんな歌は初めて聞いたよ。」

私は照れながら笑った。

「皆さんが歌を作ってくださったんです。」

その夜。

本陣で夕食を囲んでいると、

信綱が地図を広げた。

「明日は杉戸宿。」

「そして、その次はいよいよ幸手宿だ。」

私は顔を上げた。

「幸手宿……。」

信綱は静かに頷く。

「この旅で最も長く滞在する宿になる。」

「本陣では、正式な客人として迎えられる。」

私は少し緊張した。

「また大勢の人が集まるのでしょうか。」

「おそらく。」

「將軍家からの御書付も届いている。」

私は『時奏』をそっと抱いた。

「皆さんに喜んでいただける歌を作りたいです。」

信綱は微笑む。

「きっとできる。」

「幸手宿では、新しい出会いが待っている。」

その言葉どおり、幸手宿では本陣だけでなく、宿場中の人々が茜を迎える準備を始めていた。

そして、その歓迎の陰で、茜を狙う者たちもまた静かに宿場へ集まり始めていた――。

第二十八章 杉戸宿 古利根川の夕暮れ

翌朝――。

粕壁宿を出立した一行は、日光御成道をさらに北へ進んでいた。

街道の両側には青々とした田畑が広がり、初夏の風が稲を優しく揺らしている。

私は深く息を吸い込んだ。

「いい香り。」

信綱が微笑む。

「田植えを終えたばかりだからな。」

「土の匂いが違うでしょう。」

私は静かにうなずいた。

「町ごとに風の匂いまで違います。」

信綱は感心したように笑う。

「そのようなことを申す旅人は初めてだ。」

昼過ぎ。

前方に川が見えてきた。

ゆったりと流れる水面。

そのほとりに開けた宿場町。

「杉戸宿です。」

信綱が静かに言った。

私は目を細める。

「古利根川……。」

川面を渡る風が、とても心地よい。

船頭たちの掛け声が遠くから聞こえてくる。

「穏やかな町ですね。」

「杉戸宿は水運でも栄えている。」

「川とともに生きる町だ。」

宿場へ入ると、人々はすぐに信綱一行へ気付いた。

「あれは松平様だ。」

「将軍家のお役人だ。」

その中の一人が私を見つける。

「あっ！」

「岩槻で歌った娘さんだ！」

「あの歌姫だ！」

またたく間に人が集まり始めた。

私は少し照れながら頭を下げた。

「こんにちは。」

子どもたちが走ってくる。

「お姉ちゃん！」

「また歌って！」

私は笑顔になる。

「もちろん。」

本陣へ案内される前に、私は古利根川の土手へ歩いた。

夕日が水面を黄金色に染めている。

舟が静かに流れていく。

その景色を見た瞬間、自然と言葉がこぼれた。

「ここで歌いたい。」

信綱は何も言わずにうなずいた。

「今日は、この景色が舞台だ。」

夕暮れ。

町の人々が土手へ集まってきた。

農家の人。

船頭。

商人。

旅人。

武士。

誰もが夕焼けを見つめている。

私は『時奏』を抱えた。

G線がゆっくり響く。

ポオオオ……

その音は、川面を渡る風と一つになった。

私は静かに歌い始める。

♪

古利根川に 夕日が揺れて
遠い時代の 舟が行く
流れる水は 変わらずとも
人の暮らしは 受け継がれ
今日の笑顔を 明日へ乗せて
川は静かに 語りゆく

♪

歌声は川面を渡り、
対岸の木立へと吸い込まれていった。
船頭の一人が目を閉じる。

「親父と初めて舟を漕いだ日を思い出した。」
年老いた女性は静かに涙をぬぐう。
「この川に嫁いできた日の夕焼けと同じだよ……。」
町の人々は、静かに頭を下げた。
拍手はない。
ただ、心からの感謝だけが、その場を包んでいた。

その夜。
杉戸宿本陣。
本陣主人が信綱へ深く頭を下げた。
「本日はご宿泊いただき、誠に光栄にございます。」
信綱も礼を返す。
「世話になる。」
主人は茜へ向き直った。
「茜様のお歌は、宿場中の評判でございます。」
私は少し恥ずかしそうに笑った。
「ありがとうございます。」
主人は静かに言葉を続ける。
「明日は幸手宿でございます。」
「はい。」
「幸手宿本陣では、すでにお迎えの準備が整っております。」
私は驚いた。
「もうですか。」
「將軍家の御書付が届いておりますので。」

信綱が静かに付け加える。

「幸手宿は、この旅でも特に重要な宿場だ。」

「ここから先は、利根川が旅の鍵になる。」

私は地図を広げた。

「栗橋宿。」

「そして房川の船橋ですね。」

信綱は満足そうにうなずく。

「そのとおり。」

「船橋を渡れば、下総国と武蔵国の境を越える。」

「旅も新しい段階へ入る。」

私は取材帳へ大きく書いた。

『幸手宿——旅の節目。』

その頃。

幸手宿では、本陣の主人が庭を掃き清めていた。

座敷には新しい畳。

床の間には季節の花。

「將軍家のお客様を迎える。」

「粗相があってはならん。」

宿場の人々も総出で街道を掃き、提灯を整え、歓迎の準備を進めていた。

しかし、その宿場へ、一人の黒装束の男が静かに入り込んでいた。

男は宿場を見回し、小さくつぶやく。

「幸手宿か……。」

「ここで、もう一度試させてもらおう。」

その視線の先には、本陣が静かに佇んでいた。

翌日、幸手宿で待っているのは、盛大な歓迎だけではない。

茜と『時奏』を狙う、新たな試練もまた近づいていた。

第二十九章 幸手宿 本陣のもてなし

翌朝——。

杉戸宿を発った一行は、日光御成道を北へ歩いていた。

朝の空気は澄み渡り、街道の松並木を吹き抜ける風が心地よい。

信綱は馬上から前方を見つめていた。

「茜殿。」

「はい。」

「もう間もなく幸手宿です。」

私は自然と背筋を伸ばした。

「楽しみです。」

「本陣へ泊まるのは初めてですから。」

信綱は穏やかに笑う。

「今日は、宿場の人々が皆、そなたを待っている。」

やがて街道の向こうに、宿場町が見えてきた。

旅籠が軒を連ね、

商家の暖簾が風に揺れる。

宿場の入口には、大勢の人が並んでいた。

「あっ！」

「来た！」

「松平様のお着きだ！」

町中に声が響く。

本陣主人を先頭に、

宿役人、

名主、

商人、

農家、

子どもたちまで、

街道の両側へ整列していた。

私は驚いて立ち止まる。

「こんなに……。」

信綱が小さく笑う。

「茜殿。」

「これは、そなたが歩いてきた旅への贈り物だ。」

本陣主人が深く頭を下げた。

「松平伊豆守様。」

「ようこそ幸手宿へ。」

「お待ち申し上げておりました。」

続いて私へ向き直る。

「得川茜様。」

「幸手宿一同、心より歓迎申し上げます。」

私は慌てて頭を下げた。

「そんな……。」

「私は旅人です。」

主人は優しく微笑む。

「旅人だからこそ、お迎えするのです。」

「宿場とは、そのためにございます。」

私は胸が熱くなった。

本陣へ入る。

太い梁。

磨き上げられた廊下。

美しい庭園。

床の間には季節の花が生けられていた。

「すてき……。」

思わず見とれてしまう。

主人が静かに説明する。

「この本陣は、多くの大名や幕府役人をお迎えしてまいりました。」

「その歴史に、新しい一頁を書いていただければ幸いです。」

私は取材帳へ記す。

『本陣とは、旅人の心を休ませる家である。』

昼過ぎ。

私は宿場を歩かせてもらった。

呉服屋。

桶屋。

米屋。

鍛冶屋。

どの店でも笑顔で迎えられる。

「茜さん！」

「待っていました！」

子どもたちはもう名前と呼んでくれる。

「今日は歌ってくれる？」

「もちろん。」

私は笑顔で答えた。

夕方。

本陣の庭園には、宿場中の人々が集まっていた。

庭いっぱい提灯が灯される。

信綱は縁側に座り、その光景を静かに眺めていた。

「これほど集まるとは。」

護衛の武士が感心する。

「茜殿の歌を聴くためでしょう。」

信綱は微笑んだ。

「いや。」

「茜殿に会うためだ。」

私は庭の中央へ歩いた。

『時奏』を抱える。

宿場は静まり返った。

G線が静かに響く。

ボオオオ……

その音は、庭園を包み込み、

本陣の屋根を越え、

宿場の夜空へ溶けていく。

私は歌い始めた。

♪

宿場の灯りが 道を照らし

旅人迎える あたたかさ

疲れた心を 包むのは

人の笑顔と 思いやり

また会いましょう その言葉

それが旅人の 宝もの

♪

歌が終わる。

しばらく誰も動かなかった。

やがて、本陣主人が静かに立ち上がる。

目には涙が浮かんでいた。

「茜様。」

「はい。」

「私は三十年、この本陣を預かってまいりました。」

「ですが。」

「今日ほど、この家が旅人のために建てられたことを誇りに思った日はございません。」

宿場中の人々が大きくうなずく。

「ありがとう。」

「また来てください。」

「必ず。」

私は笑顔で答えた。

「約束します。」

その夜。

本陣では、將軍家の客人として、茜のために特別な部屋が用意された。

しかし、茜は縁側で一人、月を眺めていた。

『時奏』を静かに抱えながら、小さくつぶやく。

「今日も、いい一日だったね。」

その時だった。

屋根の上で、瓦がかすかに鳴る。

カタン……

信綱は障子越しに、その音を聞き逃さなかった。

「誰かいる。」

護衛へ目配せする。

武士たちが静かに庭へ散る。

しかし、屋根の上には、すでに人影はなかった。

月明かりの中、遠くの木立へ消えていく黒い影だけが見えた。

信綱は静かにつぶやく。

「やはり来たか……。」

その男の狙いは、本陣に泊まる茜なのか。

それとも、『時奏』なのか。

まだ誰にも分からない。

だが、その答えは――

第三十章 幸手宿の夜

夜も更けていた。

幸手宿本陣。

庭園には虫の音だけが静かに響いている。

昼間の賑わいが嘘のようだった。

私は縁側へ腰を掛け、『時奏』をそっと磨いていた。

「今日はありがとう。」

ケースを軽くたたく。
ボォ……
小さくG線が震えた。
私は思わず笑う。
「返事をしてくれるんだね。」

離れでは、松平信綱が護衛たちと話していた。
「今夜は警戒を解くな。」
「屋根の上にも二名。」
「裏門にも二名。」
「庭にも巡回を。」
「はっ。」

護衛たちは静かに持ち場へ散る。
信綱だけは庭を見つめたまま動かなかった。
（来る。）
武将としての勘が告げていた。

午前零時頃。
宿場の鐘が静かに鳴る。
ゴーン……
その直後だった。
カサッ。
屋根瓦がわずかに動く。
信綱の目が鋭く光る。
「来た。」
黒装束が三人。
音もなく屋根を走る。
護衛が叫ぶ。
「曲者！」
黒装束は一斉に庭へ飛び降りた。
しかし刀は抜かない。
真っすぐ向かった先は——
『時奏』だった。
「やはり狙いは楽器か。」
信綱が刀を抜く。
「捕らえよ！」

武士たちが庭へ飛び出した。

私は突然の物音で目を覚ました。

障子を開ける。

「信綱様！」

庭では激しい立ち回りが始まっていた。

刀と刀がぶつかる。

火花が散る。

黒装束は護衛を避けながら、一直線に私へ向かってくる。

「茜殿！」

信綱が叫ぶ。

「離れなさい！」

しかし一人の男が私の目前まで迫った。

「その楽器を渡せ。」

低い声だった。

私は『時奏』を胸へ抱き寄せる。

「渡せません。」

「その楽器は、お前には過ぎたものだ。」

「違います。」

私は静かに首を振る。

「これは誰かを傷付けるためのものではありません。」

男は刀を構えた。

「ならば。」

「力づくでもいただく。」

その瞬間だった。

ボオオオオ……

『時奏』が誰も触れていないのに響いた。

低く。

深く。

まるで大地そのものが歌っているような音だった。

庭の風が止まる。

提灯の炎が揺れる。

黒装束たちの足が止まった。

一人が小さくつぶやく。

「この音……。」

「母上……。」

もう一人は刀を落とした。

「帰りたい。」

「故郷へ……。」

最後の一人も膝をつく。

「こんな仕事……。」

「もう終わりにしたい。」

私はゆっくり近づいた。

「どうして。」

「そこまでして、このチェロを。」

男は顔を伏せたまま答えた。

「命令だ。」

「誰の。」

男は首を横へ振る。

「言えない。」

「言えば。」

「家族が殺される。」

私は息を呑んだ。

信綱も表情を変える。

「やはり。」

「誰かが裏で糸を引いている。」

その時だった。

シュツ。

闇の中から一本の矢が飛んできた。

「危ない！」

信綱が男を突き飛ばす。

矢は庭石へ突き刺さった。

黒装束たちは顔色を変える。

「消される！」

「逃げろ！」

三人は屋根へ飛び上がる。

護衛たちが追う。

しかし夜の闇へ紛れ、

姿は消えてしまった。

庭には一本の矢だけが残されていた。

信綱が拾い上げる。

矢羽根を見た瞬間、

表情が変わる。

「……。」

護衛が尋ねる。

「殿。」

「何か。」

信綱は矢羽根を懐へしまった。

「いや。」

「今はまだ話せぬ。」

しかし心の中では確信していた。

（幕府の者ではない。）

（だが、かなり大きな組織だ。）

（得川家の秘密を恐れている者たち……。）

翌朝。

宿場中が昨夜の騒ぎを知った。

本陣主人は深く頭を下げる。

「申し訳ございません。」

私は笑顔で首を振る。

「誰も傷付かなくて良かったです。」

主人は目に涙を浮かべた。

「茜様。」

「幸手宿は、いつまでもあなた様をお待ちしております。」

私は深く一礼した。

「また必ず帰ってきます。」

信綱も静かにうなづく。

「約束しよう。」

宿場中の人々が街道へ並ぶ。

子どもたちは涙を浮かべながら手を振っている。

「茜さん！」

「また来てね！」

私は大きく手を振り返した。

「約束！」

そして一行は、いよいよ旅の大きな節目――

****栗橋宿関所****へ向けて歩き始めた。

その先には、利根川を渡る壮大な****房川の船橋****が待っている。

しかし信綱は、懷にしまった一本の矢を静かに握りしめていた。

この矢こそが、得川家の秘密へとつながる最初の手掛かりになることを、まだ茜は知らなかった。

第三十一章 栗橋宿関所 将軍家御用の通行手形

翌朝――。

幸手宿の人々に見送られた一行は、日光御成道をさらに北へ進んでいた。

宿場を離れると、田畑の向こうに広い空が開ける。

朝日に照らされた道は、まっすぐ北へ続いていた。

私は何度も振り返る。

幸手宿の人々は、姿が見えなくなるまで手を振り続けていた。

「また来ます。」

私は小さくつぶやいた。

信綱も振り返り、静かにうなずく。

「きっと戻って来られる。」

昼近く。

前方に大きな番所が見えてきた。

高い柵。

見張り櫓。

武装した役人たち。

「栗橋宿関所です。」

信綱が静かに言った。

私は思わず息をのむ。

「ここが関所……。」

街道を行き交う旅人は皆、ここで足を止めていた。

荷物を改められ、

通行手形を確かめられ、

一人ひとり名前を記帳している。

私は取材帳へ書いた。

****『関所とは、人を止める場所ではない。**

人を守る場所でもある。』**

一行が近づくと、
関所役人が大きな声を上げた。
「止まれ！」
武士たちが整列する。
「身分と通行手形を。」
信綱は馬を降りた。
「松平伊豆守。」
その一言だけで、
役人たちの表情が変わる。
「これは失礼いたしました！」
一斉に頭を下げる。
しかし信綱は静かに首を振った。
「いや。」
「今日、確かめてもらいたいのは余ではない。」
そう言って私を見る。
「茜殿。」
私は胸元から、家光公から授かった木札を取り出した。
両手で丁寧に差し出す。
関所役人は、それを受け取った瞬間、
思わず息をのんだ。
「こ……これは。」
三つ葉葵。
そして、
『将軍家御用 得川茜』
の文字。
役人は震える手で木札を返し、
深く頭を下げた。
「失礼いたしました。」
「どうぞ、お通りください。」

私は困ったように笑った。
「そんなに畏まらないでください。」
役人は顔を上げる。
「ですが……。」
私は微笑んだ。
「私は旅人です。」

「皆さんと同じように歩いています。」
「だから、いつもどおり話しかけてください。」
役人は少し驚いたあと、
優しく笑った。
「そのようなお方でしたか。」
「信綱様がお守りになる理由が分かりました。」

その時だった。
関所の片隅で泣いている少女が目に入った。
まだ七つほどだろう。
母親が困った顔をしている。
私は近づいた。
「どうしました。」
母親が頭を下げる。
「父親が病で倒れまして……。」
「薬を買いに古河へ行きたいのですが。」
「通行の手続きに時間がかかって……。」
関所役人も困っていた。
「規則でございますので……。」
私は信綱を見た。
信綱は事情を聞き、
役人へ静かに言った。
「病人を救うための旅だ。」
「余が責任を持つ。」
「通してあげなさい。」
役人はすぐに頭を下げた。
「承知いたしました。」
母親は涙を流しながら何度も礼を言う。
「ありがとうございます。」
「ありがとうございました。」
少女も笑顔になった。
「お姉ちゃん、ありがとう。」
私はその頭を優しくなでた。
「お父さん、きっと良くなるよ。」

関所を出ると、

信綱がゆっくり歩きながら言った。

「茜殿。」

「はい。」

「関所には規則がある。」

「だが。」

「規則を守ることと、人を救うことは両立できる。」

私は静かにうなずいた。

「今日、勉強になりました。」

「歴史は。」

「人の優しさでもできているんですね。」

信綱は満足そうに笑った。

「その言葉を忘れぬことだ。」

午後。

一行は街道をさらに北へ進む。

やがて木立が開けた。

目の前には、

広く雄大な川が姿を現した。

私は思わず立ち止まる。

「わあ……。」

どこまでも続く水面。

その川に、何艘もの舟が横一列につながれている。

舟の上へ板が渡され、

一本の長い橋になっていた。

信綱が静かに告げる。

「茜殿。」

「あれが**房川の船橋**だ。」

私は息をのんだ。

「橋が……。」

「舟でできている。」

夕日に照らされた船橋は、まるで川の上へ浮かぶ一本の道だった。

舟子たちの掛け声が風に乗って聞こえてくる。

私は『時奏』をそっと抱き寄せた。

（なんて美しい景色……。）

この橋の上で奏でる音は、

どんな響きになるのだろう。

その答えは、明日。
茜の旅の中でも忘れられない、一つの演奏となる。

第三十二章 房川の船橋 水の道がつなぐ心

翌朝――。
栗橋宿本陣を出た一行は、ゆっくりと利根川の渡し場へ向かった。
朝霧が川面を包み、
遠くでは水鳥が羽ばたいている。
私は思わず足を止めた。
「きれい……。」
信綱も静かに川を見つめる。
「この景色は、何度見ても飽きぬ。」

――

やがて霧が晴れ始める。
目の前に姿を現したのは、
幾艘もの船を横一列につなぎ、その上へ厚い板を渡した壮大な橋だった。
「……。」
私は言葉を失った。
「これが……。」
「房川の船橋。」
信綱がゆっくり頷く。
「利根川を渡るための橋だ。」
「水かさが増せば橋を外し、流れが静まれば再びつなぐ。」
「人の知恵で造られた橋なのだ。」
私は橋の端へしゃがみ込み、
一艘一艘の船を見つめた。
「橋じゃなくて……。」
「船が橋になっている。」
思わず取材帳へ書く。
『橋とは、人の知恵である。』

――

橋を守る船頭たちが近づいてきた。
日焼けした顔。
太い腕。
長年、川とともに生きてきた男たちだった。

一人の年配の船頭が笑う。

「松平様。」

「ようこそ。」

信綱も笑顔で応える。

「いつも世話になる。」

船頭は私へ目を向けた。

「こちらがお噂の吟遊詩人ですな。」

私は深く頭を下げた。

「得川茜です。」

「よろしく願ひいたします。」

船頭は豪快に笑った。

「こちらこそ。」

「橋も喜びます。」

私は不思議そうな顔をした。

「橋が……ですか？」

船頭は川を見ながら答える。

「毎日、人を渡しておる橋だからな。」

「笑顔の旅人が来ると、橋まで嬉しそうに揺れる。」

私は微笑んだ。

「素敵ですね。」

橋を歩き始める。

ギシ……

ギシ……

船がゆっくり上下する。

板の下では、大きな流れが音を立てていた。

「少し揺れますね。」

「怖いか。」

信綱が尋ねる。

私は首を横へ振る。

「いいえ。」

「橋が呼吸しているみたい。」

信綱は思わず笑った。

「そのように思ったことはなかった。」

橋の中央まで来ると、
私は立ち止まった。
川風が優しく吹く。
遠くまで続く水面。
空には白い雲。
「信綱様。」
「何かな。」
「ここで一曲、よろしいでしょうか。」
信綱は川を見回した。
船頭たちも微笑んでいる。
「皆も望んでいる。」
「歌いなさい。」

私は『時奏』を取り出した。
舟子たちが仕事の手を止める。
旅人たちも立ち止まった。
G線が静かに響く。
ボォォォ……
その音は水面を渡り、
川霧の向こうまで広がっていった。
私は目を閉じて歌い始める。

♪

舟がつながり 橋となり
人がつながり 道となる
流れる水は 止まらずとも
心はここで めぐり逢う
渡る命を 見守って
今日も静かに 川は歌う

♪

歌が終わる。
しばらく風の音だけが聞こえていた。
やがて一人の若い船頭が帽子を脱ぐ。
「親父。」
「俺、この橋を守り続ける。」
年配の船頭は静かに涙をぬぐった。
「橋は木や船じゃない。」

「人を思う心でできている。」
その言葉に、私は胸が熱くなった。

信綱が橋の欄干に手を置く。

「茜殿。」

「はい。」

「橋は国境を越える。」

「そして。」

「人の心も越えていく。」

私は静かに頷いた。

「音楽も同じですね。」

「人と人をつなぐ橋です。」

信綱は満足そうに微笑んだ。

「だから家光公は、そなたを旅へ送り出されたのだろう。」

橋を渡り終えたその時だった。

橋番が息を切らして走ってきた。

「松平様！」

「どうした。」

「古河城より早馬にございます！」

一通の書状が信綱へ渡される。

信綱は静かに封を開いた。

読み終えた瞬間、

表情が少しだけ和らぐ。

「茜殿。」

「はい。」

「古河城主が、ぜひ城へ立ち寄ってほしいと申しておる。」

「本当ですか！」

「今夜は古河城でお迎えしたいそうさ。」

私は思わず『時奏』を抱きしめた。

「また新しい出会いですね。」

しかし信綱は書状を静かに畳みながら、心の中で別のことを考えていた。

(幸手宿の襲撃……。)

(あれほどの手勢を動かした者が、このまま諦めるとは思えぬ。)

信綱は護衛頭へ小さく命じる。

「今夜から警戒をさらに厳しく。」

「古河城へ着くまで、一瞬たりとも油断するな。」

「はっ。」

夕日に染まる船橋を背に、一行は古河城へ向かって歩き始めた。

そして古河城では、一人の姫君が窓辺から街道を見つめながら、茜との出会いを心待ちにしていた。

第三十三章 古河城の姫

夕暮れ——。

房川の船橋を渡った一行は、ゆっくりと古河城下へ近づいていた。

西の空は茜色に染まり、

城下町には夕餉の支度をする煙が立ちのぼっている。

遠くに白壁の櫓が見え始めた。

「見えてきました。」

信綱が静かに言う。

「あれが古河城です。」

私は思わず立ち止まった。

「大きなお城……。」

信綱は穏やかに笑う。

「利根川を押さえる要の城。」

「江戸を守る北の玄関口でもある。」

私は取材帳へ書き記した。

『城は国を守り、人は城を守る。』

古河城大手門。

城主自らではないが、重臣たちが正装で並んでいた。

門が開かれる。

「松平伊豆守様、ご到着。」

「得川茜様、ご到着。」

私は驚いて小さく信綱へささやく。

「私まで名前を呼ばれるんですね。」

信綱は笑った。

「將軍家のお客様だからな。」

「もう慣れなさい。」

私は少し照れながら頭を下げた。

城内へ案内される。
庭園には池があり、
白い鷺が静かに羽を休めている。
廊下は磨き上げられ、
障子越しに柔らかな夕日が差し込んでいた。
「美しい……。」
思わず見とれてしまう。
その時、
廊下の向こうから軽やかな足音が聞こえた。
「お父様。」
澄んだ声だった。
振り向くと、一人の若い女性が立っている。
年の頃は二十歳ほど。
淡い藤色の小袖をまとい、
気品のある笑顔を浮かべていた。
城主が微笑む。
「こちらは娘の千代。」
「千代と申します。」
私は深く一礼した。
「得川茜です。」
千代姫は目を輝かせた。
「お会いしたかったです。」
「私にですか？」
「はい。」
「房川の船橋で歌われたお話が、もう城まで届いております。」

私は驚いて信綱を見る。
「もう？」
信綱は苦笑した。
「宿場の話は早い。」
「人の口は飛脚より速い。」
広間に笑いが広がった。

夕餉の席。
豪華な料理が並ぶ。

しかし千代姫は料理よりも茜に興味津々だった。

「旅は怖くありませんか。」

私は少し考えた。

「怖い時もあります。」

「でも。」

「出会いの方が多いんです。」

千代姫は静かにうなづく。

「私は城の外を知りません。」

「町を歩いてみたいと、ずっと思っていました。」

私はにっこり笑う。

「では明日、一緒に城下町を歩きませんか。」

広間が静まり返る。

家臣たちは思わず顔を見合わせた。

「姫様が城下へ？」

千代姫も驚いている。

「本当に……。」

私は首をかしげる。

「だめですか？」

城主は娘の顔を見た。

千代姫の瞳は期待で輝いている。

城主はゆっくりとうなずいた。

「信綱様。」

「いかがでしょう。」

信綱は穏やかに笑った。

「護衛を付ければ問題ありますまい。」

「茜殿の旅は、人を知る旅。」

「姫様にも良い経験となりましょう。」

千代姫は嬉しそうに頭を下げた。

「ありがとうございます。」

その夜。

茜は城の天守近くへ案内された。

古河の町には無数の灯がともっている。

利根川には月が映り、

遠く房川の船橋には、かすかな灯火が揺れていた。

「きれい……。」

千代姫が隣へ来る。
「毎日見ている景色ですが。」
「今日は違って見えます。」
私は微笑んだ。
「景色は変わらなくても。」
「誰と見るかで変わります。」
千代姫は静かに笑った。
「茜様は不思議なお方ですね。」
私は『時奏』を抱えた。
「少しだけ演奏してもいいですか。」
「ぜひ。」
夜風の中、
G線が静かに響く。
ボオオオ……
その音は、
城下町を包み込むように広がっていく。
城下では人々が夜空を見上げた。
「また歌が聞こえる。」
「姫様のお客様だ。」
「なんて優しい音だろう。」
その音色は古河城だけではなかった。
遠く、城下の外れ。
闇の中に潜む黒装束の男も立ち止まっていた。
「……。」
男は目を閉じる。
そして静かにつぶやく。
「俺たちは……。」
「本当に、この娘を敵にしてよいのか。」
初めて、その心が揺らぎ始めていた。
しかし、そのさらに遠くでは——
黒装束たちを操る真の首謀者が、冷たい目で北の空を見上げていた。
「古河まで来たか。」
「ならば次が最後だ。」
その言葉の意味を知る者は、まだ誰もいなかった。

翌朝――。

古河城の朝は、城下町へ響く鐘の音とともに始まった。

ゴーン……

柔らかな朝日が天守を照らし、城下町にも少しずつ活気が戻ってくる。

私は障子を開け、大きく伸びをした。

「いい朝。」

『時奏』を抱き上げると、小さくG線が震えた。

ボォ……

「おはよう。」

私は笑いかけた。

しばらくすると襖が開いた。

「茜様。」

千代姫だった。

今日は薄い桃色の小袖に身を包んでいる。

「おはようございます。」

「お待ちしておりました。」

私は笑顔で立ち上がる。

「今日は城下町ですね。」

千代姫は子どものように目を輝かせた。

「はい。」

「初めてなのです。」

信綱は護衛を六名だけ選んだ。

「今日は姫様方の町歩きだ。」

「目立ち過ぎぬように。」

護衛たちも普段着に着替えている。

私は思わず笑った。

「武士に見えません。」

信綱も笑う。

「今日は旅人だ。」

城下町へ出る。

朝市が開かれ、

野菜。

魚。

布。

陶器。

さまざまな品が並んでいる。

千代姫は何を見るにも新鮮だった。

「あれは何ですか。」

「味噌です。」

「あちらは。」

「染物屋さんですね。」

私は一つひとつ説明する。

千代姫は夢中になって歩いた。

すると、

団子屋の前で足が止まる。

「いい匂い……。」

私は笑った。

「食べましょう。」

団子屋の主人が驚く。

「姫様！」

千代姫は少し困ったように笑う。

「今日は町娘です。」

主人は思わず吹き出した。

「では町娘さん。」

「焼きたてですよ。」

二人で団子を頬張る。

「あつつ。」

「ふふっ。」

思わず笑い合う。

その様子を見ていた町の人々も自然と笑顔になった。

そこへ一人の少女が近づいてきた。

着物には何度も継ぎ当てがしてある。

「お姉ちゃん。」

「なあに。」

「その楽器。」

「きれい。」

私はしゃがみ込む。

「触ってみる？」

少女は驚いた。

「いいの？」

「もちろん。」

そっとケースに触れる。

少女は嬉しそうに笑った。

「温かい。」

私は少し驚いた。

「そう感じる？」

少女は何度もうなずいた。

「生きてるみたい。」

信綱が静かに茜を見る。

（子どもには分かるのか。）

その時だった。

少女が急に咳き込んだ。

「ゴホッ……。」

母親が慌てる。

「この子は生まれつき体が弱くて。」

私は少女の手を握る。

冷たい。

千代姫も心配そうに見つめる。

「大丈夫？」

少女は笑おうとする。

「うん。」

その笑顔が痛々しかった。

私は信綱を見る。

「少しだけ。」

信綱は静かにうなずく。

私は町角へ腰を下ろした。

『時奏』を抱える。

G線が静かに響く。

ボオオオ……

町の人々が自然と集まってくる。

私は少女へ向かって歌った。

♪

朝の光が 降りそそぐ
あなたの笑顔を 照らすよう
悲しい日には 空を見よう
雲の向こうに 青がある
一人じゃないよ
忘れないで
今日も明日も 歩いてこう

♪

歌が終わる。

少女は涙をぬぐっていた。

「ありがとう。」

「元気になった。」

母親も深く頭を下げる。

「ありがとうございます。」

私は笑顔で答えた。

「私ではありません。」

「町みんなが応援しています。」

すると団子屋の主人が言った。

「薬代くらいなら俺も出す。」

魚屋も手を挙げる。

「うちも。」

染物屋も。

「うちもだ。」

次々と声が上がった。

千代姫は目を潤ませる。

「城の中では見られない景色です。」

信綱は静かに言った。

「これが町だ。」

「人が人を支えて生きている。」

夕方。

城へ戻る途中。

千代姫は小さく頭を下げた。

「茜様。」

「今日は一生忘れません。」
私は微笑んだ。
「私もです。」
「また町を歩きましょう。」
その時、
信綱のもとへ一人の早馬が駆け込んできた。
「急報！」
「小山宿より使者にございます！」
信綱は書状を開く。
読み終えた瞬間、
静かに茜を見た。
「茜殿。」
「はい。」
「小山宿でも、そなたを迎える準備が整ったそうだ。」
私は笑顔で『時奏』を抱きしめる。
「また、新しい出会いですね。」
しかし信綱は書状の最後の一文を、茜には見せなかった。
そこには短く、
＞ **『黒装束の者、小山周辺にも出没。十分警戒されたし。』**
と記されていた。
茜の旅は、人々との出会いを重ねるたびに、同時に大きな陰謀へと近づいていた。

第三十五章 小山宿 思川のほとり

翌朝――。
古河城では、多くの人々が門前に集まっていた。

城主をはじめ、家臣たち、町人、子どもたちまでが見送りに並ぶ。
千代姫は少し寂しそうに微笑んだ。
「もう、お別れですね。」
私はそっと手を握る。
「また会えます。」
「旅には終わりがありませんから。」
千代姫は何度もうなずいた。
「その日を楽しみにしています。」

城門を出ると、信綱が馬を並べた。

「今日は小山宿まで。」

「思川沿いを歩く。」

私は取材帳を開いた。

「思川……。」

「きれいな名前ですね。」

信綱は静かに答えた。

「古くから人々の暮らしを支えてきた川だ。」

「この先は下野国。」

「旅もいよいよ北国の趣が深くなる。」

街道には秋の気配が漂い始めていた。

風が少しだけ涼しい。

黄金色になり始めた田んぼ。

雀たちが群れをなして飛び立つ。

私は立ち止まった。

「季節まで旅をしているみたい。」

信綱は微笑む。

「人だけではない。」

「季節も街道を歩いておる。」

昼過ぎ。

思川の堤へ着いた。

ゆったりと流れる水。

川岸では子どもたちが魚を追いかけて遊んでいる。

老人は網を繕い、

女性たちは洗濯をしていた。

私はしばらくその景色を眺めていた。

「何も特別じゃない景色なのに……。」

「とても美しい。」

信綱は静かに言った。

「だからこそ残す価値がある。」

「名勝だけが歴史ではない。」

私は深くうなずいた。

「はい。」

やがて小山宿へ到着した。
宿場では名主や本陣主人が出迎える。
「松平様。」
「ようこそお越しくださいました。」
主人は私へも深く頭を下げた。
「得川様。」
「お待ち申し上げておりました。」
私は笑顔で一礼した。
「よろしく願ひいたします。」

宿場を歩いていると、一人の少年が後ろをついてきた。
十歳くらいだろうか。
何か言いたそうだが、なかなか声を掛けられない。
私は立ち止まった。
「どうしたの？」
少年は勇気を出して言った。
「僕……。」
「旅に出てみたい。」
私は微笑む。
「どこへ？」
「江戸。」
「日光。」
「もっと遠く。」
私はしゃがみ込み、少年と目を合わせた。
「旅はね。」
「遠くへ行くことじゃない。」
少年は首をかしげる。
「え？」
「人に会うこと。」
「話を聞くこと。」
「今日、君と会えたことも旅なんだよ。」
少年は少し考えてから笑った。
「じゃあ。」
「僕も旅をしたんだ。」
「そう。」

「もう始まっているよ。」

夕暮れ。

宿場外れの思川の土手。

町の人々が集まってきた。

「今日も歌を。」

「ぜひ。」

私は『時奏』を抱えた。

夕日が川面を赤く染める。

G線が響く。

ボオオオ……

私は静かに歌い始めた。

♪

流れる川は 急がない

急げば見えぬ 花がある

歩いた道を 振り返れば

笑顔がそっと 手を振ってる

旅は終わらず 人を結び

心は今日も 橋になる

♪

歌が終わると、誰もが静かに川を見つめていた。

本陣主人が口を開く。

「茜様。」

「はい。」

「この宿場には昔から言い伝えがあります。」

「どんなお話ですか。」

「思川は、人の思いを運ぶ川。」

「だから『思川』と呼ぶのだと。」

私は静かに川面を見つめた。

「思いを運ぶ川……。」

その言葉を取材帳へ書き留める。

その夜。

信綱は宿の一室で、幸手宿から持ち帰った矢を取り出していた。

矢羽根を灯りにかざす。

「やはり……。」

そこには、ごく小さな焼印が刻まれていた。

護衛頭が息をのむ。

「殿。」

「この印は。」

信綱は静かにうなずいた。

「まだ茜殿には話せぬ。」

「だが敵は、想像していたより近くにいる。」

障子の外では、茜が月を見上げながら『時奏』を優しく磨いていた。

明日はいよいよ宇都宮へ向かう街道。

そして、その先には徳川家にも関わる、さらに大きな秘密が静かに待ち受けていた。

第三十六章 宇都宮城への道 街道に残る祈り

翌朝――。

小山宿を発った一行は、宇都宮へ向けて日光街道を北へ歩き始めた。

朝靄の中を歩く旅人。

荷を背負う飛脚。

馬を引く商人。

街道には今日も多くの人々の営みがあった。

私はその一人ひとりを見つめながら歩いていた。

「信綱様。」

「何かな。」

「旅を始めた頃は、お城ばかり見ていました。」

「ほう。」

「でも今は、人を見ています。」

信綱は穏やかに笑った。

「それでよい。」

「城は人が造る。」

「歴史もまた、人が残すものだ。」

私は静かにうなずいた。

「はい。」

――

昼近く。

街道脇に、小さなお地蔵様が並んでいた。

赤い前掛けは少し色あせ、

花が一輪供えられている。

私は自然と足を止めた。

「どうされました。」

信綱が尋ねる。

「誰がお花を替えているんでしょう。」

護衛の一人が答える。

「近くの村人でしょう。」

「旅人の無事を願って、昔から守られております。」

私は静かに手を合わせた。

「ありがとうございます。」

その姿を見た信綱も、黙って一礼した。

武士たちも自然と頭を下げる。

街道には、しばらく静かな時間が流れた。

さらに北へ進む。

街道沿いの茶店で休憩を取るようになった。

白髪の老婆が一人で店を切り盛りしている。

「いらっしゃいませ。」

「温かいお茶ですよ。」

私は笑顔で礼を言った。

「ありがとうございます。」

老婆は『時奏』を見つめる。

「その楽器……。」

「とても大切にされておりますな。」

私はケースを優しくなでた。

「はい。」

「私の旅の相棒なんです。」

老婆は静かにうなずいた。

「道具には。」

「持つ人の心が宿ります。」

「大切になさい。」

私は深く頭を下げた。

「はい。」

茶店を出ようとした時だった。

街道の向こうから、一頭の馬が駆けてきた。

「早馬！」

護衛が声を上げる。

馬上の使者は土埃を上げながら信綱の前で馬を止めた。

「松平伊豆守様！」

「宇都宮城より急ぎの書状にございます！」

信綱は書状を受け取り、静かに封を切る。

読み進めるうちに、その表情が少しだけ変わった。

私は気になって尋ねる。

「何かありましたか。」

信綱は微笑んで書状をたたんだ。

「心配はいらぬ。」

「宇都宮城主が、茜殿を心より歓迎したいと書かれている。」

私はほっと息をつく。

「よかった。」

しかし、その書状には、もう一行だけ書き添えられていた。

＞ **『城下に不審な浪人が集まりつつあり、警戒を強めています。』 **

その一文を、信綱は茜には見せなかった。

午後。

街道は雑木林へ入る。

木漏れ日が道へまだら模様を描く。

鳥のさえずりだけが聞こえる静かな道だった。

その時。

信綱が右手を上げた。

「止まれ。」

一行が足を止める。

護衛たちが周囲へ視線を走らせる。

静かすぎる。

風も止んでいた。

「……何かいますか。」

私が小声で尋ねる。

信綱は小さくうなずく。

「気配が多い。」

その瞬間だった。

ガサッ――

林の奥から数人の男たちが姿を現した。

だが、刀は抜いていない。

一人の男が前へ出て、深く頭を下げた。

「得川茜殿。」

私は驚いた。

「私をご存じですか。」

男は静かに答えた。

「歌を聴かせていただきました。」

「幸手宿で。」

「房川の船橋で。」

「小山宿で。」

私は少し安心した。

「ありがとうございます。」

男は続ける。

「どうか。」

「宇都宮へお着きになりましたら、お気を付けください。」

「敵は、もう街道では動きません。」

「城の中におります。」

信綱の目が鋭くなる。

「何者だ。」

男は首を振った。

「名乗ることはできません。」

「ですが。」

「あなた方を襲った者たちの中にも、この娘を守りたいと願う者がおります。」

私は思わず一歩前へ出た。

「あなたは敵ではないんですか。」

男は寂しそうに笑った。

「敵にも、守りたい家族があります。」

「それだけは覚えていてください。」

そう言い残すと、男たちは林の奥へ静かに姿を消した。

追おうとする護衛を、信綱が制する。

「追うな。」

「……殿。」

「今の男は。」

信綱は静かに答えた。

「敵ではない。」

「いや。」

「敵になり切れなかった者だ。」

私は『時奏』を胸に抱いた。

「信綱様。」

「はい。」

「悲しいですね。」

「争いたくない人まで、争いに巻き込まれてしまう。」

信綱はゆっくりとうなずいた。

「だからこそ。」

「この旅には意味がある。」

遠く前方には、宇都宮城の白い櫓が、夕日に照らされてかすかに輝いていた。

そこでは、新たな出会いと、得川家の秘密に迫る大きな転機が、静かに待ち受けてい。

第三十七章 宇都宮城の姫

翌朝――。

一行は宇都宮城下へ入った。

街道はこれまでよりもさらに広く、
多くの旅人や商人で賑わっている。

武具屋。

紙屋。

味噌蔵。

城下町らしい活気が町いっぱいにあふれていた。

私は思わず足を止める。

「すごい……。」

信綱が微笑む。

「宇都宮は北関東の要。」

「奥州へ向かう人々が集まる町だ。」

私は取材帳へ書き込む。

『道が集まれば、人も集まる。』

やがて宇都宮城の大手門が見えてきた。

高い石垣。

白壁。

堂々たる櫓。

門前には正装した家臣たちが並んでいた。

「松平伊豆守様、ご到着。」

「得川茜様、ご到着。」

城門がゆっくり開く。

私は静かに一礼した。

「よろしく願いいたします。」

広間では城主が笑顔で迎えてくれた。

「ようこそ宇都宮城へ。」

信綱も深く頭を下げる。

「世話になる。」

城主は私へ向き直った。

「茜殿。」

「あなたのお噂は、房川の船橋よりも早く届いております。」

私は思わず笑ってしまった。

「そんなに早いんですか。」

「街道とは、そのようなものです。」

広間は和やかな笑いに包まれた。

その時だった。

襖が静かに開く。

「失礼いたします。」

一人の若い女性が入ってきた。

年の頃は二十歳ほど。

白地に薄紫の小袖。

凛とした立ち姿。

しかし、その瞳にはどこか寂しさが宿っていた。

城主が紹介する。

「娘の**美緒姫**です。」

私は立ち上がり、一礼する。

「得川茜です。」

美緒姫も丁寧に頭を下げた。

「ずっと、お会いしたいと思っておりました。」

昼食の席。

美緒姫は私へ静かに尋ねた。

「旅は楽しいですか。」

私は笑顔で答えた。

「はい。」

「毎日、新しい出会いがあります。」

「うらやましいです。」

その一言に私は少し驚いた。

「姫様でもですか。」

美緒姫は窓の外を見つめた。

「私は城の外へ自由に出られません。」

「町の祭りも。」

「市場も。」

「田んぼも。」

「遠くから見るだけです。」

その声は少し寂しそうだった。

私は思わず信綱を見る。

信綱は小さくうなずいた。

私は美緒姫へ微笑みかける。

「では。」

「明日、一緒に城下町を歩きませんか。」

美緒姫は目を丸くした。

「本当に？」

「もちろん。」

「旅は、一人より二人の方が楽しいですよ。」

美緒姫の顔に初めて笑顔が咲いた。

「ありがとうございます。」

夕暮れ。

宇都宮城の庭園。

私は『時奏』を抱えていた。

城主。

美緒姫。

家臣たち。

皆が静かに庭へ集まる。

G線が低く響く。

ボォォォ……

庭園の池に波紋が広がる。

私は歌い始めた。

♪

城の白壁 空を映し

人の願いを 守りゆく

高き櫓も 石垣も

人の笑顔で 生きている

会えた喜び 胸に抱き

今日も歴史は 花開く

♪

歌が終わる。

美緒姫は静かに涙をぬぐっていた。

「茜様。」

「はい。」

「城の中にも。」

「こんなに温かい風が吹くのですね。」

私は微笑む。

「風は、どこへでも吹きます。」

「城にも。」

「町にも。」

「人の心にも。」

その夜。

信綱は城主と二人だけで書院にいた。

机の上には、幸手宿で拾った矢が置かれている。

城主は矢羽根を見るなり、表情を変えた。

「この印……。」

信綱は静かに尋ねる。

「ご存じか。」

城主はゆっくりとうなずいた。

「二十年ほど前に姿を消した一団です。」

「名を**影鴉（かげがらす）**。」

「金で動く忍びではありません。」

「ある一族を代々守り続けてきた者たちです。」

信綱は眉をひそめた。

「得川家か。」

「……分かりません。」

城主は首を横に振る。

「ですが、その名が再び現れたということは——。」

二人は言葉を失った。

一方その頃。

月明かりの城下町を、美緒姫と歩く夢を思い描きながら、茜は静かに眠りについていた。

まだ知らない。

翌日、その城下町で起こる小さな出来事が、やがて「影鴉」の真実へつながる第一歩になることを。

第三十八章 宇都宮城下 笑顔の散歩

翌朝——。

宇都宮城の空は、雲ひとつない青空だった。

城下町からは朝市のにぎやかな声が聞こえてくる。

私は庭へ出ると、大きく深呼吸した。

「今日もいい天気。」

『時奏』をそっと抱き上げる。

ボォ……

G線が優しく応えた。

「今日は美緒姫との約束だよ。」

「茜様。」

振り向くと、美緒姫が待っていた。

今日は淡い藍色の小袖。

いつもの姫装束より少し質素で、城下へ出ても目立たぬ装いだった。

「お待たせしました。」

「いいえ。」

私は笑った。

「今日はいっぱい歩きましょう。」

信綱も姿を現した。

「護衛は四名だけ。」

「城下の者には姫と分からぬように。」

「承知いたしました。」

城門をくぐる。
美緒姫は立ち止まり、静かに町を見つめた。
「城門を歩いて出るのは……。」
「初めてです。」
私は驚いた。
「本当に？」
「はい。」
「いつもは駕籠でした。」
私はそっと微笑む。
「今日は歩きましょう。」
「ゆっくり。」
美緒姫は嬉しそうにうなずいた。

朝市では威勢の良い声が響いている。
「新鮮な野菜だよ！」
「朝採れの大根！」
「焼きたてのお餅！」
美緒姫は何を見るにも目を輝かせていた。
「こんなに人が笑っているんですね。」
「城から見ていただけでは分かりませんでした。」
私は答えた。
「町は、人の笑顔でできています。」

一軒の八百屋の前で足が止まる。
店主が声を掛けた。
「お嬢さん。」
「この梨、味見していきな。」
私は美緒姫を見る。
「いただきます。」
二人で一切れずつ口へ運ぶ。
「甘い！」
思わず声がそろう。
店主は豪快に笑った。
「その顔が見たかった。」
信綱も思わず笑みを浮かべる。
「城では味わえぬ甘さでしょう。」

美緒姫は何度もうなずいた。

そこへ、小さな男の子が走ってきた。

「あっ！」

「歌のお姉ちゃん！」

私はしゃがみ込む。

「こんにちは。」

男の子は少し困った顔をしていた。

「どうしたの？」

「おじいちゃんが元気ないんだ。」

私は男の子に案内される。

市場の片隅。

年老いた竹細工職人が座っていた。

完成しかけた籠が、そのままになっている。

「手が思うように動かなくなってね。」

職人は寂しそうに笑った。

「もう終わりだ。」

私は首を横に振る。

「終わりじゃありません。」

「え？」

「その手は。」

「何十年も人を助ける籠を作ってきた手です。」

「それは誰にも真似できません。」

職人は黙って私を見つめた。

私は『時奏』を取り出した。

市場の人々が自然と集まってくる。

G線が静かに響く。

ボオオオ……

竹細工の籠が風に揺れた。

私は歌い始める。

♪

手のひら刻む しわ一つ

歩いた道の 長さです

今日まで作った その思い

明日も誰かを 守るでしょう

歳を重ねる その姿
歴史を紡ぐ 宝もの

♪

歌が終わると、
竹細工職人は静かに立ち上がった。
そして作りかけの籠を手にする。

「もう一つだけ。」

「作ってみよう。」

孫が飛びついた。

「おじいちゃん！」

市場中から温かな拍手が起こる。
美緒姫は目に涙を浮かべていた。

「茜様。」

「歌で、人はこんなにも変わるのですね。」

私は静かに首を横へ振った。

「違います。」

「変わったのは、おじいちゃん自身。」

「私は、その勇気を思い出すお手伝いをしただけです。」

その言葉を聞いた信綱は、小さく微笑んだ。

（やはり、この娘は人の心を照らす。）

城へ戻る途中。

美緒姫は空を見上げて言った。

「今日は、一生忘れられない日になりました。」

「私も。」

私は笑顔で答えた。

「また町を歩きましょう。」

その時だった。

遠くから寺の鐘が鳴り響く。

ゴーン……

ゴーン……

信綱の表情が変わる。

「あの鐘は……。」

護衛頭も顔を上げる。

「あれは城下の火急を知らせる鐘です。」

一人の足軽が息を切らして駆けてきた。

「殿！」

「城下外れの旧街道で騒ぎが起きました！」

「黒装束の一団が現れたとの知らせです！」

信綱はすぐに茜と美緒姫の前へ立った。

「茜殿、美緒姫。」

「先に城へ。」

しかし茜は、遠くの空を静かに見つめていた。

『時奏』が、小さく震えている。

ボォ……

まるで何かを知らせるように。

私は胸に手を当て、小さくつぶやいた。

「……誰かが助けを呼んでいる。」

その直感が、この旅最大の事件の始まりになることを、まだ誰も知らなかった。

第三十九章 旧街道の黒装束

宇都宮城の鐘が鳴り響く。

ゴーン……

ゴーン……

その音は、城下町全体を震わせた。

市場にいた人々も足を止める。

「何事だ。」

「火事か。」

「違う、警鐘だ。」

城下はたちまち騒然となった。

「茜殿。」

信綱は静かに言った。

「美緒姫とともに城へ。」

私は首を横に振った。

「でも……。」

「助けを呼ぶ声がします。」

信綱は少し困ったように笑う。

「その優しさは分かる。」

「しかし今は余の役目だ。」

「茜殿は守られることも務めの一つ。」

私は静かにうなずいた。

「はい。」

しかし、『時奏』はなおも小さく震えている。

ボォ……

その頃。

宇都宮城下外れ。

旧日光街道沿い。

十数人の黒装束が、一台の荷車を取り囲んでいた。

荷車には老人夫婦と若い娘。

荷には米俵や反物が積まれている。

「金を置いていけ。」

黒装束の男が低く言った。

老人は必死に首を振る。

「これは村の年貢でございます。」

「奪われれば村中が飢えてしまいます。」

男は無言で刀を抜いた。

若い娘が老人の前へ立つ。

「お願いします。」

「父を傷つけないでください。」

その時だった。

「そこまでだ。」

静かな声が響く。

松平信綱だった。

護衛たちも左右へ広がる。

黒装束の男たちは一斉に振り向く。

「松平信綱……。」

「やはり来たか。」

信綱は刀を抜かない。

「道を開けよ。」

「その荷は村人の命だ。」

男は苦く笑った。

「我らも命令なのだ。」

「また命令か。」

信綱の表情が曇る。

その頃。

城へ戻る途中だった私は、どうしても胸騒ぎが収まらなかった。

『時奏』を抱く腕が自然と熱くなる。

「美緒姫。」

「はい。」

「少しだけ。」

「歌わせてください。」

美緒姫は驚いた。

「ここで？」

「はい。」

「きっと届きます。」

私は街道脇へ腰を下ろした。

信綱はいない。

護衛も少ない。

それでも私は『時奏』を抱えた。

G線へ弓を置く。

ボオオオ……

低い音が城下町へ広がる。

風が吹いた。

木々が揺れる。

私は目を閉じて歌い始める。

♪

争うために 生まれた人は

誰も一人も いらないはず

守りたい人が いるからこそ

今日まで歩いて 来たのでしょうか

帰る場所には 笑顔がある

どうか忘れないで

♪

旧街道。

黒装束たちは突然顔を上げた。

「……。」

「この歌。」

一人が刀を下ろす。

「茜殿だ。」

もう一人が目を閉じる。

「母の子守歌に似ている……。」

老人を囲んでいた輪が少しずつ崩れていく。

信綱はその変化を見逃さなかった。

「今だ。」

護衛たちが老人一家を安全な場所へ導く。

しかし、隊の頭目だけは動かなかった。

静かに信綱を見つめている。

「松平信綱。」

「一つだけ教えてやろう。」

「何だ。」

「我らの主は。」

男は北を指さした。

「日光を恐れている。」

「なぜだ。」

「それは……。」

男が口を開いた、その瞬間だった。

ヒュッ——

一本の矢が闇から飛んできた。

「危ない！」

信綱が男を突き飛ばす。

矢は男の肩をかすめ、地面へ突き刺さった。

男は顔色を変えた。

「口封じか。」

闇の中から馬の足音が遠ざかっていく。

ダダダダ……

「追え！」

護衛が駆け出そうとする。

しかし信綱は手を上げた。

「追うな。」

「殿！」

「敵は陽動だ。」

「まず人命を守れ。」

護衛たちはすぐ老人一家を囲んだ。

頭目は苦しそうに笑った。

「……ありがとう。」

信綱は傷口を押さえる。

「まだ話せるか。」

男は小さくうなずいた。

「日光山。」

「輪王寺……。」

「東照宮ではない。」

「輪王寺に……。」

そこまで言うと、男は静かに意識を失った。

信綱の表情が変わる。

（輪王寺……。）

（東照宮ではないのか。）

そこへ茜と美緒姫が駆けつける。

「信綱様！」

私は倒れている男を見る。

「この人は……。」

信綱は静かに立ち上がった。

「命は助かる。」

「そして。」

「ようやく敵が恐れる場所が分かった。」

私は『時奏』を胸に抱いた。

日光には、まだ誰も知らない秘密が眠っている。

しかも、その鍵は東照宮ではなく、**輪王寺**にあるという。

夕暮れの空を、一羽の鷹が北へ向かって飛んでいく。

まるで一行を日光へ導くように――。

（第四十章 日光への招待状へ続く）

第四十章 日光への招待状

宇都宮城。

書院には重い空気が流れていた。

信綱の前には、傷の手当てを受けた黒装束の男が横になっている。

男は命を取り留めたものの、まだ意識は戻らない。

「輪王寺……。」

信綱は静かにその言葉を繰り返した。

「なぜ東照宮ではなく輪王寺なのだ。」
誰も答えられなかった。

翌朝。
茜は城の庭園を歩いていた。
池には朝日が映り、鯉が静かに泳いでいる。
『時奏』を抱え、小さくつぶやく。
「日光まで、もう少しだね。」
ボォ……
G線が優しく震えた。
その音を聞いた美緒姫が微笑む。
「まるで返事をしているようですね。」
「はい。」
「この子は旅が好きなんです。」
二人は顔を見合わせて笑った。

その時だった。
城門の方から法螺貝が鳴り響く。
ブォー——ッ。
家臣が慌ただしく走ってくる。
「殿！」
「日光山より使者が参られました！」
信綱は静かに立ち上がる。
「お通しせよ。」

やがて一人の僧が広間へ通された。
年の頃は六十ほど。
墨染めの法衣。
落ち着いた眼差し。
深く一礼する。
「日光山より参りました、慈円と申します。」
信綱も礼を返した。
「遠路ご苦労。」
慈円は懷から一通の巻紙を取り出した。
「これは日光山よりの書状にございます。」
信綱が受け取り、ゆっくりと開く。

書かれていたのは短い文章だった。

＞ **得川茜殿を日光山へお迎えしたい。**

＞

＞ **輪王寺に伝わる古き記録について、お話し申し上げたい。**

信綱の表情が変わる。

「やはり……。」

私は思わず尋ねた。

「私にですか。」

慈円は穏やかに微笑む。

「はい。」

「あなた様を、長くお待ちしておりました。」

「え？」

「私を？」

「そうです。」

広間が静まり返る。

慈円は続けた。

「もっとも。」

「待っていたのは、茜様というお名前ではございません。」

「では？」

「**『時を奏でる者』**です。」

私は思わず『時奏』を抱きしめた。

信綱も驚きを隠せない。

「その名を知っておられるのか。」

慈円は静かにうなずいた。

「輪王寺には古くから、一つの言い伝えが残されております。」

広間の空気が張りつめる。

慈円は静かに語り始めた。

「昔。」

「人の争いが絶えぬ世に、一人の楽人がおりました。」

「その者は一挺の楽器を携え、人々の心を慰めながら諸国を歩いたと申します。」

私は『時奏』を見つめる。

慈円は続ける。

「その楽器は。」

「人の心を映し。」

「人の涙を受け止め。」

「持つ者を、歴史の必要な場所へ導く。」

私は息をのんだ。

信綱も言葉を失っている。

「しかし。」

慈円の表情が少し曇る。

「その伝承は、途中で途絶えております。」

「なぜだ。」

信綱が尋ねる。

「分かりません。」

「ただ。」

「最後の一頁だけが失われております。」

私は静かに顔を上げた。

「その続きが……。」

慈円は深くうなずく。

「輪王寺に残されているかもしれません。」

その時。

城の外から子どもたちの笑い声が聞こえてきた。

私は障子を開ける。

城下の子どもたちが手を振っている。

「茜さん！」

「また歌って！」

私は笑顔で手を振り返した。

「帰る前に、一曲だけね！」

慈円はその姿を見て、小さく微笑んだ。

「ようやく分かりました。」

「何がです。」

「なぜ楽器が、あなた様を選んだのか。」

私は首をかしげる。

慈円は優しく答えた。

「あなた様は、歴史を知るために旅をしているのではありません。」

「歴史を生きた人々を知るために歩いておられる。」

その言葉に、信綱も静かにうなずいた。

「まさしく、そのとおりだ。」

その夜。

宇都宮城では、翌朝の日光山への出立が決まった。

城主も、美緒姫も、名残惜しそうに茜を見送る準備を始める。

一方、宇都宮城から遠く離れた山道では、一人の男が馬を走らせていた。

「急げ。」

「日光へ先回りしろ。」

「輪王寺へ着かれてはならぬ。」

男の背には、幸手宿で見たものと同じ黒装束。

しかし、その袖口には見覚えのない金糸の紋が刺繍されていた。

影鴉を動かしている者は、まだ姿を現していない。

本当の敵は、すでに日光で待っている――。

第四十一章 日光街道 最後の旅路

翌朝――。

宇都宮城の大手門には、多くの人々が集まっていた。

城主。

美緒姫。

家臣たち。

城下町の人々。

そして、これまで茜が会ってきた子どもたちまでが見送りに来ていた。

美緒姫が一步前へ進む。

「茜様。」

「はい。」

「また、お会いできますか。」

私は笑顔で答えた。

「もちろんです。」

「旅に終わりはありません。」

「また必ず、この城へ戻ってきます。」

美緒姫は涙を浮かべながら頷いた。

「その日を楽しみに待っています。」

信綱が馬へまたがる。

「出立。」

静かな号令が響いた。

一行は宇都宮城を後にする。
城門の外へ出ると、街道はゆるやかに北へ伸びていた。
その先には、青く霞む山々が見える。
私は思わず立ち止まる。
「あれが……。」
信綱も空を見上げる。
「ああ。」
「あれが日光連山だ。」
初めて見る雄大な山並みに、私は胸が熱くなった。
「もうすぐなんですね。」

街道を歩き始める。
これまでの宿場とは少し景色が違う。
杉木立が増え、
山から吹き下ろす風が涼しい。
私は深く息を吸い込んだ。
「空気まで違います。」
信綱は微笑む。
「日光が近い証だ。」

昼頃。
一行は街道脇の茶屋で休憩を取るようになった。
茶屋の主人は信綱を見るなり深く頭を下げる。
「松平様。」
「お待ちしておりました。」
「待っていた？」
私は不思議そうに尋ねる。
主人は笑った。
「宇都宮から飛脚が参りましてな。」
「歌姫様がお通りになる、と。」
私は苦笑する。
「飛脚さん、本当に早いですね。」
信綱も笑った。
「街道の情報は風より速い。」

茶屋には旅人たちも集まっていた。

奥州へ向かう商人。

寺参りの老夫婦。

若い武士。

それぞれが旅の途中だった。

「茜様。」

主人が静かに言う。

「お願いがございます。」

「何でしょう。」

「出立前に、一曲だけ。」

旅人たちも静かに頭を下げた。

私は『時奏』を取り出した。

G線が響く。

ボオオオ……

街道を吹き抜ける風と音色が一つになる。

私は歌い始めた。

♪

同じ道でも 歩く人

それぞれ違う 夢がある

急ぐ旅人 祈る人

みんな未来へ 向かってる

今日の出会いは 宝もの

また会う日まで 元気でと

街道の風が 歌ってる

♪

歌が終わると、

旅人たちは静かに立ち上がり、それぞれ深く頭を下げた。

老夫婦が涙ぐみながら言う。

「無事に日光までお参りできます。」

若い武士も微笑む。

「勇気をいただきました。」

私は笑顔で送り出した。

「お氣をつけて。」

午後。

街道は次第に山道へ変わっていく。

その時だった。

『時奏』が小さく震えた。

ボオ……

私は足を止める。

「どうしたの？」

信綱も気付く。

「またか。」

G線は、ゆっくりと北を向くように震えている。

まるで何かに導かれるようだった。

その時、一人の山伏が杉木立の中から現れた。

法螺貝を腰に下げ、

錫杖を手にしている。

山伏は茜を見るなり静かに合掌した。

「ようこそ。」

「日光山へ。」

私は深く一礼する。

「ありがとうございます。」

山伏は『時奏』へ目を向ける。

「その楽器も。」

「ようやく帰って来られましたな。」

私は思わず顔を上げた。

「帰って……来た？」

山伏は穏やかに微笑む。

「ええ。」

「人だけではありません。」

「その楽器もまた、日光へ帰る日を待っていたのです。」

信綱の表情が変わる。

「どういう意味だ。」

山伏は北の山を見つめた。

「その答えは。」

「輪王寺で明らかになります。」

それ以上は何も語らなかった。

夕暮れ。

一行は日光山の麓へ到着した。

見上げれば、杉の巨木が天を覆い、

山全体が静かな靈氣に包まれている。

風が吹く。

杉の葉がざわめく。

私は胸の前で『時奏』を抱いた。

ボォ……

G線が今までになく優しく震えた。

まるで、

「おかえり。」

そう語りかけるように。

私は思わず目を閉じる。

「ただいま……。」

その言葉が自然と口からこぼれた。

信綱は静かに茜を見つめる。

（やはり、この旅は偶然ではない。）

（茜殿は、この地へ導かれてきたのだ。）

その夜、一行は日光山の宿坊に宿を取る。

そして翌朝——。

茜はついに、徳川家の祈りを見守り続けてきた古刹、**輪王寺**の山門をくぐることとなる。

そこには、四百年の時を超えて待ち続けていた「最後の一頁」が眠っていた。

第四十二章 輪王寺の古文書

翌朝——。

まだ夜明けの余韻が残る日光山。

杉木立の間を、朝霧が静かに流れていた。

鳥のさえずりだけが山に響く。

茜は宿坊の縁側へ出ると、大きく深呼吸をした。

「空気まで違う……。」

『時奏』を抱く。

ボォ……

G線が、今までで一番優しく震えた。

「やっぱり。」

「ここへ帰ってきたんだね。」

信綱が静かに近づいてきた。

「よく眠れましたか。」

「はい。」

「でも。」

私は杉並木を見つめる。

「この山に来てから、『時奏』がずっと喜んでいる気がします。」

信綱は小さく微笑んだ。

「余にも、そのように見える。」

やがて宿坊の前へ、一人の老僧が現れた。

昨日、宇都宮城へ使者として来た慈円である。

慈円は深く合掌した。

「お待ちしておりました。」

「茜様。」

「おはようございます。」

「輪王寺へご案内いたします。」

一行はゆっくりと石畳を歩く。

何百年も人々が踏みしめてきた参道。

杉の巨木が空を覆い、

朝日が木漏れ日となって降り注ぐ。

私は何度も立ち止まりながら歩いた。

「信綱様。」

「はい。」

「ここは。」

「音が違います。」

信綱は耳を澄ませる。

風。

鳥。

水。

鐘。

それぞれが溶け合っていた。

「山全体が一つの楽器のようだ。」

私は静かに笑った。

「本当に。」

やがて輪王寺の山門へ着く。

慈円はゆっくり振り返った。

「この先は。」

「代々限られた者しか入れぬ場所がございます。」

信綱は一礼する。

「将軍家の命により参った。」

慈円もうなずいた。

「承知しております。」

寺の奥。

厚い板戸が開かれる。

薄暗い蔵だった。

古い経巻。

木箱。

巻物。

数え切れないほどの古文書が並んでいる。

私は思わず息をのんだ。

「すごい……。」

慈円は一番奥へ歩いていく。

そこには、小さな桐箱が置かれていた。

何百年も動かされていないような箱だった。

慈円は静かに言う。

「これが。」

「最後まで残された記録です。」

箱が開かれる。

中から現れたのは、一巻の古文書。

しかし。

誰も手を伸ばそうとしない。

慈円が私を見る。

「茜様。」

「はい。」

「どうか、お開きください。」

私は驚いた。

「私がですか。」

「はい。」

「伝えでは。」

「**時を奏でる者のみが開くことができる**。」
信綱も黙って見守っている。

私は両手で巻物を持った。
不思議と温かい。
まるで人の手のぬくもりが残っているようだった。
静かに紐をほどく。
すると――
スッ……
誰も触れていない『時奏』のG線が響いた。
ボオオオ……
蔵の空気が震える。
慈円が静かに目を閉じた。
「やはり。」
巻物は抵抗なく開いた。

最初の一行には、こう書かれていた。
＞ **『この記は、時を奏でる者へ託す。』**
私は思わず顔を上げる。
慈円も信綱も息をのんでいる。
続きを読む。
＞ **『この楽器は、人の心を映す鏡である。』**
＞ **『争いを止めるために造られた。』**
＞ **『持つ者は、歴史を変える者ではない。』**
＞ **『歴史を未来へ伝える者である。』**
私は胸が熱くなった。
「歴史を……。」
「未来へ。」

さらに読み進める。
そこには、一文だけ朱で記されていた。
＞ **『楽器は、いつか日光へ帰る。』**
＞ **『そして、新たな旅人を選ぶ。』**
慈円が静かにつぶやく。
「四百年。」
「この日を待っておりました。」

私は『時奏』を抱きしめた。

「帰るって。」

「そういう意味だったんだね。」

しかし。

巻物は、そこで終わっていた。

最後の一枚だけが、

きれいに切り取られていたのである。

私は驚く。

「最後がありません。」

信綱も眉をひそめた。

「誰かが持ち去ったのか。」

慈円は静かにうなずいた。

「はい。」

「百年以上前には、すでに失われておりました。」

蔵の中が静まり返る。

その時だった。

蔵の外から、慌ただしい足音が近づいてきた。

「大変です！」

若い僧が息を切らして飛び込んでくる。

「慈円様！」

「どうした。」

「蔵の裏手で、不審な者を取り押さえました！」

信綱の目が鋭くなる。

「まさか……。」

若い僧は続けた。

「その者の懐から。」

「**古文書の最後の一枚と思われる紙**が見つかりました！」

私は思わず『時奏』を抱きしめた。

四百年もの間、失われていた最後の一頁。

それが今、目の前へ戻ろうとしている。

だが、その紙を狙う者もまた、この日光山のどこかに潜んでいた。

第四十三章 失われた最後の一頁

輪王寺・経蔵。

蔵の中は、水を打ったような静けさに包まれていた。
若い僧が息を切らしながら、両手で一枚の和紙を差し出す。

「慈円様。」

「これでございます。」

慈円は震える手で受け取った。

「……。」

確かに古い。

紙の色も、墨のにじみも、先ほど開いた巻物と同じだった。

信綱も静かに近づく。

「間違いないのか。」

慈円はゆっくりとうなずいた。

「同じ料紙。」

「同じ筆。」

「同じ時代のものです。」

私は思わず息をのんだ。

「四百年前の……。」

その頃。

輪王寺の裏庭では、一人の男が縄を掛けられて座っていた。

昨夜から寺の周囲をうろついていた男である。

しかし黒装束ではない。

粗末な旅人姿だった。

信綱が男の前へ立つ。

「名を申せ。」

男は静かに答えた。

「弥助。」

「百姓です。」

「嘘を申すな。」

男は苦笑した。

「百姓だった。」

「と言った方が正しい。」

「この紙を盗んだのか。」

信綱が尋ねる。

男は静かに首を横へ振った。

「違います。」

「守っていました。」

その言葉に、一同は顔を見合わせる。

「守っていた？」

慈円が一步前へ出る。

「どういうことです。」

男はゆっくり語り始めた。

「祖父から。」

「そのまた祖父から。」

「この紙だけは命に代えても守れ、と。」

「誰に言われた。」

「分かりません。」

「名前だけ伝わっています。」

「得川家。」

私は思わず胸を押さえた。

信綱は男を見つめる。

その目に偽りはなかった。

「なぜ今まで寺へ返さなかった。」

男は遠く杉並木を見た。

「返せば。」

「必ず奪われる。」

「だから。」

「時を待っていました。」

私は静かに尋ねた。

「どんな時を？」

男は私を見つめる。

「『時を奏でる者』が現れる時です。」

蔵の中が静まり返る。

慈円はゆっくりと最後の一頁を巻物へ重ねた。

紙はぴたりと合った。

まるで最初から一冊だったように。

私は静かに『時奏』を抱いた。

ポオ……

G線が優しく震える。

慈円は巻物を開き、

最後の一頁を読み始めた。

そこには、こう記されていた。

> **『時を奏でる者よ。』**

> **『そなたの役目は、過去を変えることではない。』**

> **『過去に生きた人々の願いを、未来へ届けることである。』**

私は涙があふれた。

今まで歩いてきた旅。

宿場町。

村人。

船頭。

職人。

子どもたち。

すべての出会いが胸によみがえる。

さらに、その下には短い一文が添えられていた。

> **『人は二度生きる。』**

> **『一度は、この世を歩く時。』**

> **『もう一度は、その人のことを誰かが語る時。』**

私は思わず巻物を抱きしめた。

「だから……。」

「私は旅をしているんだ。」

「皆さんを忘れないために。」

慈円は静かに微笑む。

「その答えに、ご自身でたどり着かれましたな。」

信綱も目を閉じる。

武将として数え切れないほどの戦を見てきた。

名を残した者。

名もなく散った者。

しかし、この一文は、そのすべてを包み込んでいた。

「歴史とは。」

信綱が静かに言う。

「勝った者だけが残すものではない。」

私は力強くうなずいた。

「はい。」

「普通に暮らした人も。」
「町を守った人も。」
「橋を造った人も。」
「子どもを育てた人も。」
「みんな歴史です。」

その時だった。
『時奏』が今までにないほど美しく響いた。
ボオオオ……
蔵いっぱい音色が広がる。
誰も弾いていない。
それでも音は、慈円にも、信綱にも、弥助にも、同じように届いていた。
慈円は静かに合掌する。
「役目は終わったのではありません。」
「今、始まったのです。」
私は『時奏』を見つめ、ゆっくりとうなずいた。
「はい。」
「私は、この旅を続けます。」
「まだ出会っていない人が、たくさんいますから。」

その時、輪王寺の鐘が静かに鳴り響いた。
ゴーン……
ゴーン……
杉木立を渡る風は穏やかだった。
四百年守られてきた一枚の古文書は、再び一つとなり、その役目を終えた。
そして茜の旅は、「得川家の秘密」を追う旅ではなく、日本各地に眠る名もなき人々の歴史を未来へ届ける、新たな旅へと姿を変えていく。
遠く空では、一羽の白い鳥がゆっくりと北へ飛んでいった。
その先には、まだ見ぬ町があり、まだ出会っていない人々が待っている。
茜は『時奏』を背負い、静かに歩き始めた。

——第一部 「日光御成道編」 完

第四十四章 新たな旅立ち

輪王寺の朝——。

杉木立を吹き抜ける風は、昨日までとはどこか違って感じられた。
慈円は山門まで茜たちを見送りに来ていた。

「茜様。」

「はい。」

「古文書は役目を終えました。」

「しかし。」

「あなた様の旅は、これからが本当の始まりです。」

私は静かに『時奏』を抱いた。

「私もそう思います。」

「宿場で出会った皆さん。」

「橋を守る船頭さん。」

「職人さん。」

「姫様たち。」

「まだ書き残せていない人が、たくさんいます。」

慈円は静かに微笑んだ。

「その志こそが、時を奏でる者に与えられた使命なのでしょう。」

信綱が馬を進める。

「茜殿。」

「はい。」

「将軍家へ戻ろう。」

「家光公も、この旅の報告を待っておられる。」

私はうなずいた。

「はい。」

日光山を下り始める。

杉並木の石畳。

朝日に照らされる苔。

小川のせせらぎ。

私は何度も振り返った。

『時奏』が静かに震える。

ボォ……

まるで、

「また帰っておいで。」

そう言われているようだった。

私は小さく微笑む。

「うん。」

「また来るね。」

山道の途中。

信綱が馬を止めた。

「見てごらんなさい。」

私は顔を上げた。

眼下には、

これまで旅してきた関東平野が、どこまでも広がっていた。

宇都宮。

古河。

栗橋。

幸手。

杉戸。

粕壁。

岩槻。

鳩ヶ谷。

本郷追分。

一本の街道が、まるで一本の糸のように遠くまで続いている。

私は思わず息をのんだ。

「全部……。」

「歩いてきた道。」

信綱は静かに言った。

「街道とは、人を運ぶ道ではない。」

「文化を運び、想いを運び、歴史を運ぶ道だ。」

私は取材帳を開き、大きく一行だけ書いた。

『街道は、日本という国の背骨である。』

その時だった。

一羽の鷹が、青空を大きく旋回した。

『時奏』がもう一度だけ響く。

ポオオオ……

風が吹いた。

その風に乗って、一枚の紙が舞い上がる。

拾い上げると、それは輪王寺の古文書を書き写したものだった。

慈円がいつの間にか入れてくれたのだろう。

最後に、たった一行だけ添えられていた。

＞ **『人の歴史は、人の心に宿る。』**

私は胸の前で紙を大切にたたみ、旅袋へしまった。

夕暮れ。

一行は再び日光街道を南へ歩き始める。

その背中を夕日が照らしていた。

私は『時奏』へ小さく話しかける。

「次はどこへ行こうか。」

ボォ……

優しいG線が応えた。

私は笑った。

「そうだね。」

「まだ、日本中を歩かなくちゃ。」

信綱も笑みを浮かべる。

「茜殿。」

「はい。」

「次はどこへ向かうと思う。」

私は少し考えてから答えた。

「街道の続くところです。」

「人が待っているところ。」

信綱は満足そうにうなずいた。

「その答えなら間違いない。」

幕間 1 江戸城 旅の報告

日光山から江戸へ戻る道。

茜たちは春の日差しを浴びながら、ゆっくりと日光街道を南へ歩いていた。

旅は終わった。

しかし、心は少しも終わった気がしない。

幸手宿。

栗橋宿。

房川の船橋。

古河城。

宇都宮城。

そして日光山輪王寺。
出会った人々の笑顔が、次々と思い浮かぶ。
私は『時奏』をそっと抱いた。
「ただいま。」
ボォ……
優しいG線が、小さく返事をした。

――
数日後――。
江戸城。
大広間には幕臣たちが並んでいた。
松平信綱が一步前へ進み、深く頭を下げる。
上段には将軍・家光が静かに座っている。
「戻りました。」
家光は穏やかに頷いた。
「ご苦労。」
「旅はどうであった。」
信綱は静かに答える。
「日光御成道は、将軍家の道であるだけではございませんでした。」
「ほう。」
「民の暮らしがあり。」
「職人の誇りがあり。」
「旅人の笑顔があり。」
「橋を守る船頭がおりました。」
家光は静かに耳を傾けている。

――
「そして。」
信綱は続けた。
「茜殿は、その一人ひとりの歴史を書き留めました。」
家光は茜を見る。
「そうか。」
私は深く頭を下げた。
「皆さんが教えてくださいました。」
「私は書いただけです。」
家光は静かに笑った。
「違う。」
「書こうと思わねば、歴史は残らぬ。」

広間が静まり返る。

信綱は懷から一冊の帳面を差し出した。

「これは。」

「茜殿が旅で記した取材帳にございます。」

家光は一頁ずつ静かに読み始めた。

そこには、

宿場町の子どもの笑顔。

船橋を守る船頭。

鋳物師。

団子屋のおばあさん。

竹細工職人。

村人たち。

誰一人、武将ではない。

誰一人、有名人ではない。

しかし。

皆、生きていた。

皆、笑っていた。

皆、歴史をつくっていた。

家光は本を閉じた。

しばらく何も話さなかった。

やがて静かに口を開く。

「余は。」

広間が息をのむ。

「日本を知っていると思っていた。」

「……。」

「しかし。」

「余が知っていたのは城だけだった。」

家光は遠くを見るようにつぶやく。

「本当に日本を支えているのは。」

「城ではない。」

「民なのだな。」

信綱は静かに頭を下げた。

「その通りにございます。」

家光は茜を見る。

「茜。」

「はい。」

「次の旅へ出なさい。」

私は驚いた。

「次……ですか。」

「まだ書き残されていない日本がある。」

「歩いてこい。」

「そして。」

「余にも見せてほしい。」

私は静かにうなずいた。

「はい。」

家光は側近へ目を向けた。

「地図を。」

一枚の大きな街道図が広げられる。

家光は一本の道へ指を置いた。

「次は。」

指は江戸から北へ延びる一本の道をなぞる。

****奥州街道。****

「白河。」

「仙台。」

「松島。」

「そして北の大地まで。」

私は地図を見つめた。

知らない町。

知らない人。

まだ出会っていない歴史。

胸が高鳴る。

信綱が静かに笑う。

「茜殿。」

「はい。」

「また長い旅になる。」

私は『時奏』を背負った。

ボォ……

G線が力強く響く。

「大丈夫。」

「この子と一緒になら。」

家光は満足そうに頷いた。

「今度は奥州街道。」

「日本の北を見てまいれ。」

私は深く一礼した。

「承知いたしました。」

その夜。

江戸城の天守から北の空を見上げる一人の少女がいた。

風が吹く。

遠く、奥州へ続く街道は、月明かりの中で静かに輝いている。

私は小さくつぶやいた。

「待っていてください。」

「今、行きます。」

『時奏』が静かに応えた。

ボォ……

その音は、まだ見ぬ奥州の山々へ向かって、優しく響いていった。

幕間2 忍城で旅の思い出を語る

「終わってしまいましたね。」

信綱は穏やかに笑った。

「いや。」

「旅に終わりはない。」

「一つの旅が終われば、また新しい旅が始まる。」

茜も笑顔でうなずく。

「そうですね。」

「また歩きたい道が、たくさんできました。」

数日後。

一行は武蔵国・忍城へ到着した。

城門では城兵たちが深々と頭を下げる。

「松平伊豆守様、ご帰城。」

「得川茜様、お帰りなさいませ。」

茜は思わず笑った。

「ただいま。」

城の庭では若葉が風に揺れ、小鳥がさえずっている。

ここが、すべての旅の始まりだった。

その夜。

信綱は茜を天守へ案内した。

夕日に染まる関東平野が一望できる。

遠くには、日光へ続く街道が一本の帯のように伸びていた。

信綱は静かに言う。

「茜殿。」

「はい。」

「旅で、一番心に残ったことは何かな。」

茜は少し考えた。

「最初は、お城を見る旅だと思っていました。」

「でも違いました。」

「私が出会ったのは、人でした。」

「鳩ヶ谷の鋳物師さん。」

「粕壁のお団子屋さん。」

「杉戸の船頭さん。」

「幸手宿の本陣の皆さん。」

「栗橋関所の役人さん。」

「房川の船橋を守る人たち。」

「古河城の千代姫。」

「宇都宮城の美緒姫。」

「そして、輪王寺の慈円様……。」

「皆さんが歴史そのものだったんです。」

信綱は深くうなずいた。

「余も同じことを学んだ。」

「城は人が築く。」

「歴史もまた、人が築く。」

二人はしばらく黙って夕焼けを眺めていた。

信綱は懐から一冊の帳面を取り出した。

「これは？」

「旅の途中で、余も書き留めていた。」

茜は驚いた。

「信綱様も？」

信綱は少し照れくさそうに笑う。

「武士も時には筆を執る。」

そこには、宿場ごとの出来事だけではなく、茜が人々と語り合う姿が細やかに記されていた。

最後の頁には、短くこう書かれていた。

＞ **『茜殿と歩けば、民の声が聞こえる。』 **

茜は思わず涙ぐんだ。

「ありがとうございます。」

信綱は空を見上げた。

「礼を言うのは余の方だ。」

「この旅で、余も日本を学び直すことができた。」

翌朝。

忍城を出発する時が来た。

城門で信綱が静かに言う。

「茜殿。」

「はい。」

「また旅に出る日まで。」

「この城は、いつでも帰る場所である。」

茜は深く頭を下げた。

「必ずきます。」

忍城を離れた茜は、城を背に海老蔵へ向かった。

2階の書斎で。

『時奏』を胸に抱く。

「そろそろ帰ろうか。」

G線へ静かに弓を置く。

ポオオオ……

深く澄んだ音色が部屋いっぱいに広がる。

風が渦を巻き、光があふれる。

街道。

松並木。

忍城。

気がつくと、茜は2030年の「海老蔵」の書斎に立っていた。

机の上には、旅立つ前に開いていたノートパソコン。

壁の時計は、ほんの数分しか進んでいない。

「……帰ってきた。」

そこへ奥の部屋から孟が顔を出した。

「お帰り。」

「今回は長旅だったみたいだね。」

茜は笑顔でうなずいた。

「うん。」

「信綱様と一緒にだったので楽しかったよ！」

「家光公に会ってきた。」

「日光御成道を歩いてきた。」

「日光街道も！」

「みんなに会ってきた。」

孟は静かに温かいお茶を差し出す。

「すごいね！ ゆっくり聞かせて。」

茜は取材帳を机いっぱいに広げた。

宿場町で出会った人々。

輪王寺で見つけた古文書。

信綱との旅。

そのすべてを、一つの記事へまとめ始める。

パソコンの画面には、新しいタイトルが入力された。

『時奏姫の街道旅 忍城から江戸城・御成道・日光街道——人がつないだ歴史の道』

茜は日本地図を広げた。

「次は、どこへ行こう。」

奥州街道。

中山道。

東海道。

甲州街道。

地図の上には、まだ歩いていない街道が幾筋も伸びている。

孟が静かに微笑んだ。

「歴史は、まだまだ待っているね。」

茜は『時奏』をそっと抱き寄せた。

ボォ……

G線が優しく響く。

「うん。」

「次の旅の準備をしよう。」

窓の外には、現代の夕焼け空が広がっていた。

しかし茜には、その空の向こうに、日光街道の松並木が、今も静かに続いているように見えていた。

——『時奏姫の街道旅 忍城から江戸城・御成道・日光街道——人がつないだ歴史の道』 完

作者：海老蔵管理人
(2026. 7.1 完)